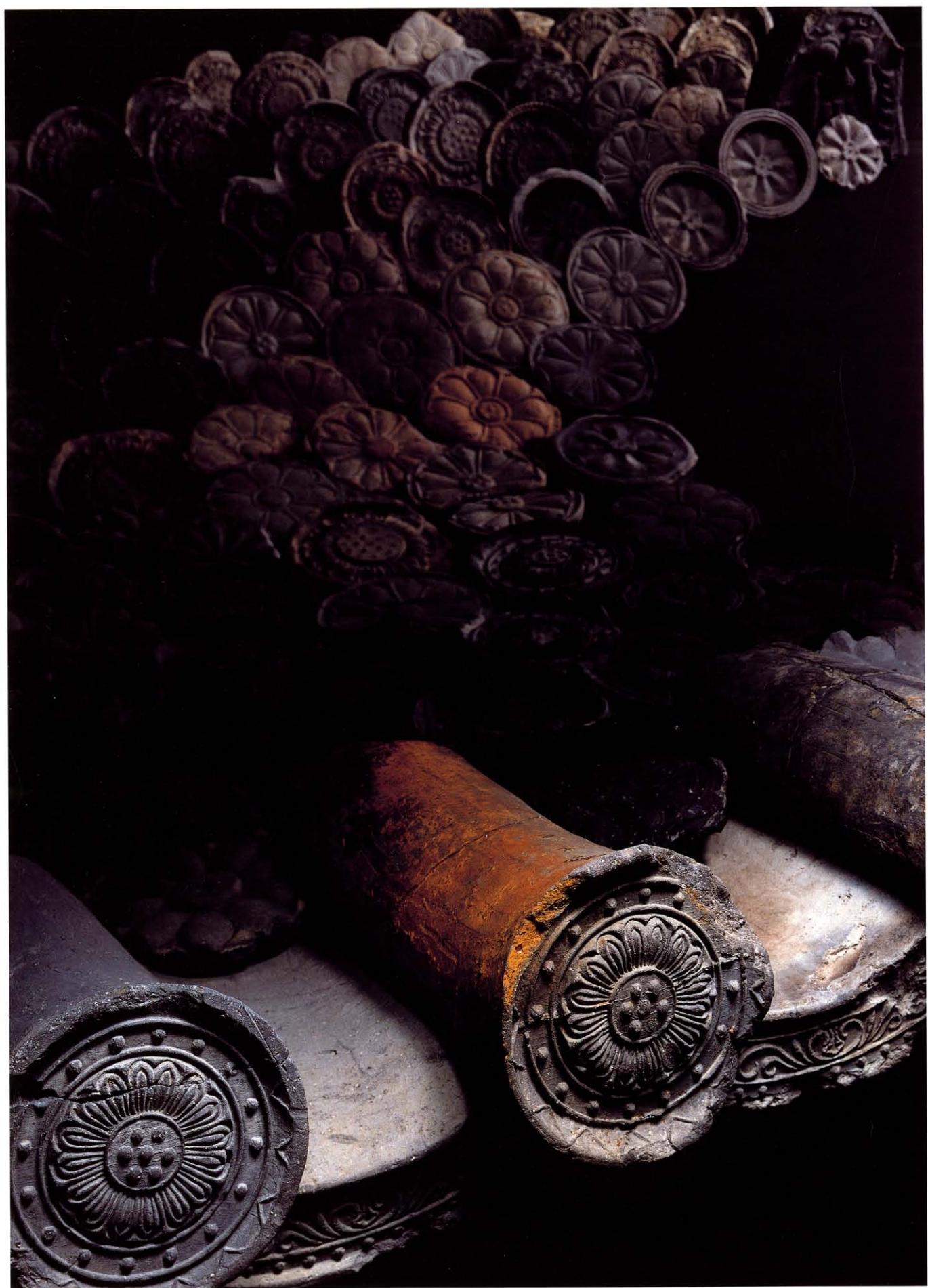


新堂廃寺

2001年3月
大阪府教育委員会





1960(昭和35)年度 発掘調査風景



同、現地説明会風景



1998年度 調査地遠景(正面にヲガンジ池とお龜石古墳を望む 南東から)



1998年度 調査地全景(北から)

卷頭図版 4 南門柱掘方出土鷗尾



大阪府埋蔵文化財調査報告 200-1

新 堂 廃 寺

—府営住宅建て替えに伴う遺物整理報告—

2001年3月

大阪府教育委員会

はしがき

大和飛鳥の地で蘇我氏の氏寺飛鳥寺の造営が、百濟からやってきた先端技術者集団の手で開始されたのは6世紀末のことでした。日本最初の仏教寺院の誕生です。それから間もなく、大和の遠つ飛鳥に対して近つ飛鳥と呼ばれていた南河内においても、ひとつの寺院が建立されました。それが新堂廃寺です。

大陸の文化や技術をいち早く摂取し、渡来系の人々とも深いつながりを持っていた最有力氏族蘇我氏の拠点だった南河内は、華やかな国際交流の舞台であり、かつ、政治、経済、文化的一大中心地でした。海外に開かれた港のあった難波から大和飛鳥に至る官道「竹内街道」がすぐ近くを通過していることが、この寺の重要性を物語っています。「近つ」とは、とりもなおさず大陸に最も近いということだとも言えるのです。

古墳時代に大王をはじめとする有力者の権力の象徴として築かれた大古墳は飛鳥時代には姿を消し、聖徳太子や蘇我氏を中心とする勢力は新たに仏教を軸にして国を治めていこうと考えていました。壮大な伽藍を有する仏教寺院は、人々の目にその政策をありありと示したことでしょう。聖徳太子以来の法灯を嗣ぐ摂津四天王寺やこの新堂廃寺以外にも、この時期、大和、山城など重要な地域にいくつかの寺院が矢継ぎばやに建立されたことには、そういうたった国家の意思が背景にあったと考えられます。

新堂廃寺の発見は古く大正時代にさかのぼりますが、昭和34・35年に府営住宅建設に先立つ発掘調査が実施されたことにより、数少ない飛鳥時代創建の寺院跡であることが確認されました。近年はその府営住宅建て替えに伴う大阪府教育委員会による調査や、重要な範囲の史跡指定を目的とした富田林市教育委員会による範囲確認調査などが実施されています。

このたびの報告はそれらの成果を整理し、新堂廃寺に関して現時点で判明していることを盛り込んだもので、本遺跡の保存と活用にいささかでも資することができれば幸いと考えるものであります。

現地での発掘調査、遺物整理、重要範囲の保存にご理解とご協力を賜った地元住民の皆様をはじめ、富田林市教育委員会、大阪府建築都市部住宅整備課ほか、関係機関、関係者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財の保護にご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成13年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が実施した府営富田林緑ヶ丘住宅建て替えに伴う、富田林市緑ヶ丘町所在、新堂廃寺の発掘調査報告書である。
2. 遺物整理事業は、大阪府建築都市部住宅整備課の依頼を受けた文化財保護課が、平成11年4月1日から平成13年3月31日まで2年度にわたって、平成11年度は調査第1係主査広瀬雅信、資料係技師井西貴子を、平成12年度は調査第2グループ技師井西貴子、調査管理グループ技師橋本高明、同山田隆一、同小浜成を担当者として実施した。
3. 現地における発掘調査は、大阪府建築部住宅建設課（現：建築都市部住宅整備課）の依頼を受けた文化財保護課が、用地全域の試掘・確認調査を平成4年度（担当：調査第1係技師井西貴子）、第Ⅰ期住宅予定地及び埋設管路の発掘調査を平成7・8年度（担当：調査第1係技師井西貴子）、第Ⅱ期住宅予定地及び重要範囲の一部の確認調査を平成10年度（担当：調査第1係技師小浜成）、集会所建設予定地の発掘調査を平成12年度（担当：調査第2グループ技師井西貴子）に実施した。また、平成10年度に調査と並行して実施した遺物整理の一部は、資料係技師地村邦夫が担当した。平成10年度までの調査の概要については、新堂廃寺発掘調査概要・同Ⅱ・同Ⅲが刊行されている。
4. 遺物整理にあたって、特に瓦類については、建て替え以前の府営富田林住宅建設に先立つ調査等の資料についても、既報告、未報告を問わずできる限り検討することとした。昭和35年に大阪府教育委員会が実施した発掘調査の出土遺物（本府ならびに府立近つ飛鳥博物館保管）はもとより、昭和34年に大阪府の委託により大阪大学文学部が実施した予備調査の出土遺物（大阪大学保管）の一部も同大学の協力を得て実測調査等を行い、本書に掲載するよう努めた。
5. 富田林市教育委員会が実施したヲガンジ池瓦窯跡と新堂廃寺範囲確認調査の出土遺物及び図面・写真等の資料については実見し、瓦の製作技法の検討を行った。その結果については本文中に述べたが、実測図、写真等は本書には掲載していない。詳細は近々刊行予定の市教育委員会正報告を参照されたい。
6. 本書の執筆は、堀大輔氏（京都市埋蔵文化財調査センター技師）、梶原義実氏（京都大学大学院）、岩戸晶子氏（京都大学大学院）、井西、広瀬が行い、編集は井西が行った。それぞれ

の文責は文末に記した。また、大阪市立大学教授栄原永遠男氏からは文字瓦に関して、玉稿を賜った。

付章「摂河泉の古代寺院」は地村邦夫作成の一覧表を基礎データとし、矢倉嘉人、中村祐子、西村香織、東英美子が作成した。

7. 英文要旨は、西村香織（京都府立大学）が訳した。ハングル要旨は大洞真白氏（八幡市教育委員会）が訳し、李斗允氏（福岡女子短期大学講師）の校訂を受けた。日本語原稿は廣瀬が作成した。
8. 本書に掲載した遺構写真は、航空写真及び特に注記のあるもの以外は各調査担当者が、遺物写真は（有）阿南写真工房に委託して撮影した。
9. 卷頭図版に掲げた鶴尾の復元修理については（株）スタジオ三十三に製作を委託した。また、金属器、木器の保存処理は（財）元興寺文化財研究所に委託して実施した。
10. 府営住宅建て替えに伴う発掘調査、遺物整理及び本書作成に要した経費は、全額を大阪府建築都市部が負担した。
11. 府営住宅建て替えに伴う調査で出土した遺物は、一部府立近つ飛鳥博物館で展示しているものを除いて、大阪府教育委員会が保管している。また、調査及び遺物整理にあたって作成した実測図、写真、拓本等の資料も大阪府教育委員会が保管している。
12. 現地での発掘調査、遺物整理、報告書作成にあたっては、下記の方々及び機関から指導、助言、協力を得た。記して感謝申し上げます。
網伸也、栗田薰、李タウン、猪熊兼勝、上原真人、井原稔、大脇潔、小沢毅、金子裕之、北野耕平、金田章裕、黒崎直、栄原永遠男、齋部麻矢、成正鏞、清家章、坪井清足、東野治之、中晴世、中盛秀、中辻亘、西口寿生、大洞真白、花谷浩、菱田哲郎、廣瀬和雄、藤澤一夫、藤原学、堀田啓一、堀大輔、松村恵司、水野正好、森郁夫、毛利光俊彦、吉田晶（50音順、敬称略）
大阪大学大学院文学研究科考古学研究室、譽田八幡宮、奈良国立文化財研究所、忠南大学校百濟文化研究所、富田林市教育委員会、古代瓦研究会、摂河泉古瓦研究会、大阪府建築都市部住宅整備課

本文目次

はしがき

例言

凡例

第1章 位置と環境	3
第1節 立地と自然環境	3
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査経過	6
第3章 調査結果	9
第1節 59年度予備調査（伽藍配置確認の調査）	9
第2節 60年度調査（主要伽藍の調査）	13
第3節 92年度試掘調査（寺域確認の調査）	17
第4節 95年度調査（主要伽藍北東部の調査）	18
第5節 96年度調査（主要伽藍東側の調査）（96067）	18
第6節 98年度府教委調査（南門・主要伽藍南側の調査）（98021）	18
第7節 00年度府教委調査（主要伽藍北側の調査）（00031）	51
第4章 瓦類	58
第1節 軒丸瓦・軒平瓦の型式設定について	58
第2節 軒丸瓦	60
第3節 軒平瓦	84
第4節 丸瓦	86
第5節 平瓦	102
第6節 道具瓦	104
第5章 考察	
第1節 河内国石川郡における郷の配置（栄原永遠男）	143
第2節 新堂廃寺造瓦集団の系譜と動向（井西貴子）	157
第3節 新堂廃寺出土横置式一本造りの製作技法（井西貴子）	169
第4節 山田寺式軒丸瓦における外縁の挽き型施紋について（堀大輔）	173
第5節 新堂廃寺の重弧紋軒平瓦（広瀬雅信）	177
第6節 奈良時代における新堂廃寺の造瓦組織（梶原義実）	187
第7節 南門柱掘方出土鷂尾とその復元（岩戸晶子）	197
第8節 道具瓦から見る新堂廃寺（岩戸晶子）	203
第9節 新堂廃寺出土鷂尾 修復報告書（株式会社スタジオ三十三）	214
附 章 摂河泉の古代寺院	217
まとめ	263
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	98年度調査地区割り図 (98021)	1	第38図	G区、溝67断面図・1 (98021)	44
第2図	本遺跡周辺遺跡分布図	4	第39図	G区、溝67断面図・2 (98021)	45
第3図	調査位置・主要伽藍位置図	7	第40図	G区、溝67出土遺物実測図・1 (98021)	46
第4図	59年度調査出土軒丸瓦実測図	11	第41図	G区、溝67出土遺物実測図・2 (98021)	47
第5図	59年度調査出土軒平瓦実測図	12	第42図	G区、溝67出土遺物実測図・3 (98021)	48
第6図	59年度調査出土鷲尾実測図・1	14	第43図	G区、溝67出土遺物実測図・4 (98021)	49
第7図	59年度調査出土鷲尾実測図・2	15	第44図	G区、自然流路62断面図 (98021)	50
第8図	B区、整地土出土遺物実測図 (98021)	20	第45図	G区、自然流路62出土遺物実測図 (98021)	51
第9図	A～C区、遺構全体図・断面図 (98021)	21～22	第46図	G区、硯・漆容器実測図 (98021)	51
第10図	A区、瓦溜出土遺物実測図 (98021)	24	第47図	石製品実測図・1、土製品実測図 (98021)	52
第11図	F区、遺構平面図・断面図 (98021)	24	第48図	石製品実測図・2 (98021)	53
第12図	E区、遺構平面図・断面図 (98021)	25	第49図	石製品実測図・3 (98021)	54
第13図	溝53出土遺物実測図 (98021)	26	第50図	石製品実測図・4 (98021)	55
第14図	C区、南門瓦落ち出土遺物実測図 (98021)	27	第51図	石製品実測図・5、木製品実測図 (98021)	56
第15図	C区、築地49遺物出土状態 (98021)	28	第52図	00年度調査平面図・断面図 (00031)	57
第16図	C区、築地49出土遺物実測図 (98021)	28	第53図	軒丸瓦接続技法・瓦当範模式図	59
第17図	B区、溝5・6・9～12（参道側溝） 断面図 (98021)	28	第54図	軒丸瓦実測図・1 (I A 02型式)	67
第18図	C区、溝52出土遺物実測図 (98021)	29	第55図	軒丸瓦実測図・2 (I A 02型式)	68
第19図	C区、包含層（築地南辺付近）出土遺物 実測図 (98021)	29	第56図	軒丸瓦実測図・3 (I A 03型式)	69
第20図	G区、遺構全体図 (98021)	31	第57図	軒丸瓦実測図・4 (I A 04型式)	70
第21図	G区、南壁断面図 (98021)	33～34	第58図	軒丸瓦実測図・5 (I A 04・05・13型式)、 垂木先瓦実測図 (I C 01・02・04型式)	71
第22図	G区、北壁断面図 (98021)	35	第59図	軒丸瓦実測図・6 (II A 06型式)	72
第23図	G区、井戸68平面図・断面図 (98021)	36	第60図	軒丸瓦実測図・7 (II A 06・II A 07型式)	73
第24図	G区、土坑63断面図 (98021)	36	第61図	軒丸瓦実測図・8 (II A 07型式)、 垂木先瓦実測図 (II C 03型式)	74
第25図	G区、土坑70出土遺物実測図 (98021)	36	第62図	軒丸瓦実測図・9 (II A 09型式)	75
第26図	G区、土坑70平面図・断面図 (98021)	37	第63図	軒丸瓦実測図・10 (II A 09型式)	76
第27図	G区、土坑83断面図 (98021)	37	第64図	軒丸瓦実測図・11 (II A 09型式)	77
第28図	G区、土坑83出土遺物実測図 (98021)	37	第65図	軒丸瓦実測図・12 (II A 10型式)	78
第29図	G区、溝58・59断面図 (98021)	37	第66図	軒丸瓦実測図・13 (IV A 12型式)	79
第30図	G区、溝58出土遺物実測図・1 (98021)	38	第67図	軒丸瓦実測図・14 (IV A 12型式)	80
第31図	G区、溝58出土遺物実測図・2 (98021)	39	第68図	軒丸瓦実測図・15 (IV A 12型式)	81
第32図	G区、溝58出土遺物実測図・3 (98021)	40	第69図	軒丸瓦実測図・16 (IV A 12型式)	82
第33図	G区、溝59出土遺物実測図 (98021)	41	第70図	軒丸瓦実測図・17 (IV A 12型式)	83
第34図	G区、溝65・66断面図 (98021)	41	第71図	軒丸瓦実測図・18 (平安時代～中世)、 軒平瓦実測図・1 (飛鳥時代)	87
第35図	G区、溝65出土遺物実測図 (98021)	42	第72図	軒平瓦実測図・2 (II B 01型式 a)	88
第36図	G区、溝66出土遺物実測図 (98021)	42	第73図	軒平瓦実測図・3 (II B 01型式 a)	89
第37図	G区、溝84断面図 (98021)	43	第74図	軒平瓦実測図・4 (II B 01型式 a・b)	90
			第75図	軒平瓦実測図・5 (II B 01型式 b)	91

第76図	軒平瓦実測図・6 (Ⅱ B 02型式 a・b)92	第115図	平瓦凡例図193
第77図	軒平瓦実測図・7 (Ⅱ B 05型式・Ⅳ B 06型式)93	第116図	南門柱掘方出土鴟尾の各部位198
第78図	軒平瓦実測図・8 (Ⅳ B 03型式)94	第117図	鴟尾製作工程模式図200
第79図	軒平瓦実測図・9 (Ⅳ B 03型式)95	第118図	鴟尾復元図 (縮尺不同)204
第80図	軒平瓦実測図・10 (Ⅳ B 03型式)96	第119図	鴟尾法量計測図206
第81図	軒平瓦実測図・11 (Ⅳ B 03型式)97	第120図	鬼瓦復元図210
第82図	軒平瓦実測図・12 (Ⅳ B 03型式・中世)98		
第83図	丸瓦実測図・1 (無段式、飛鳥～奈良時代)100		
第84図	丸瓦実測図・2 (有段式、飛鳥～奈良時代)101	付図1	C区、南門・築地・宝幢遺構平面図・断面図 (98021)
第85図	ヘラ描き平瓦104	付図2	C区、南門柱掘方出土鴟尾実測図
第86図	平瓦実測図・1 (飛鳥～白鳳時代)109		
第87図	平瓦実測図・2 (飛鳥～白鳳時代)110		
第88図	平瓦実測図・3 (奈良時代)111		
第89図	A区、瓦溜出土瓦実測図・1 (丸瓦)112	図版1	新堂廃寺周辺航空写真 (1961年撮影)
第90図	A区、瓦溜出土瓦実測図・2 (丸瓦・平瓦)113	図版2	60年度調査遺構
第91図	A区、瓦溜出土瓦実測図・3 (平瓦・文字瓦)114	図版3	95年度調査遺構
第92図	C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・1 (丸瓦)115	図版4	95・96年度調査遺構 (96067)
第93図	C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・2 (丸瓦)116	図版5～18	98年度調査遺構 (98021)
第94図	C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・3 (丸瓦・平瓦)117	図版19	00年度調査遺構 (00031)
第95図	C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・4 (平瓦)118	図版20～30	98年度調査出土土器 (98021)
第96図	C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・5 (平瓦)119	図版31～33	98年度調査出土土器・石器 (98021)
第97図	C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・6 (平瓦)120	図版34	98年度調査出土石器・土製品 (98021)
第98図	C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・7 (熨斗瓦)121	図版35	98年度調査出土土器・木製品・金属製品・礎石 (98021)
第99図	道具瓦実測図・1 (面戸瓦・熨斗瓦)122	図版36～42	軒丸瓦
第100図	道具瓦実測図・2 (鴟尾)123	図版43～48	軒平瓦
第101図	道具瓦実測図・3 (鴟尾)124	図版49～50	98年度調査C区、南門瓦落ち出土丸瓦 (98021)
第102図	道具瓦実測図・4 (鴟尾・隅木蓋瓦)125	図版51	98年度調査C区、南門瓦落ち出土平瓦 (98021)
第103図	道具瓦実測図・5 (鬼瓦)126	図版52	98年度調査C区、南門瓦落ち出土平瓦・熨斗瓦 (98021)
第104図	埴実測図127		
第105図	不明瓦製品実測図128	図版53	98年度調査A区、瓦溜出土丸瓦 (98021)
第106図	軒丸瓦型式一覧・接続技法模式図168	図版54	98年度調査A区、瓦溜出土丸瓦・平瓦 (98021)
第107図	軒丸瓦a・b・c角計測位置169	図版55	98年度調査A区、瓦溜出土平瓦・文字瓦 (98021)
第108図	成形台復元模式図 (推定)171	図版56～57	丸瓦
第109図	挽き型施紋の痕跡模式図173	図版58～61	平瓦
第110図	円筒形桶による重弧紋軒平瓦製作2態180	図版62	平瓦・面戸瓦
第111図	截頭円錐桶による重弧紋軒平瓦製作手順181	図版63～68	道具瓦 (鴟尾・隅木蓋瓦・鬼瓦)・不明瓦製品
第112図	丸瓦凡例図188	図版69～71	59年度調査瓦 (大阪大学保管資料)
第113図	丸瓦凹面拓影図189		
第114図	平瓦凹面削り調整191		

付 図 目 次

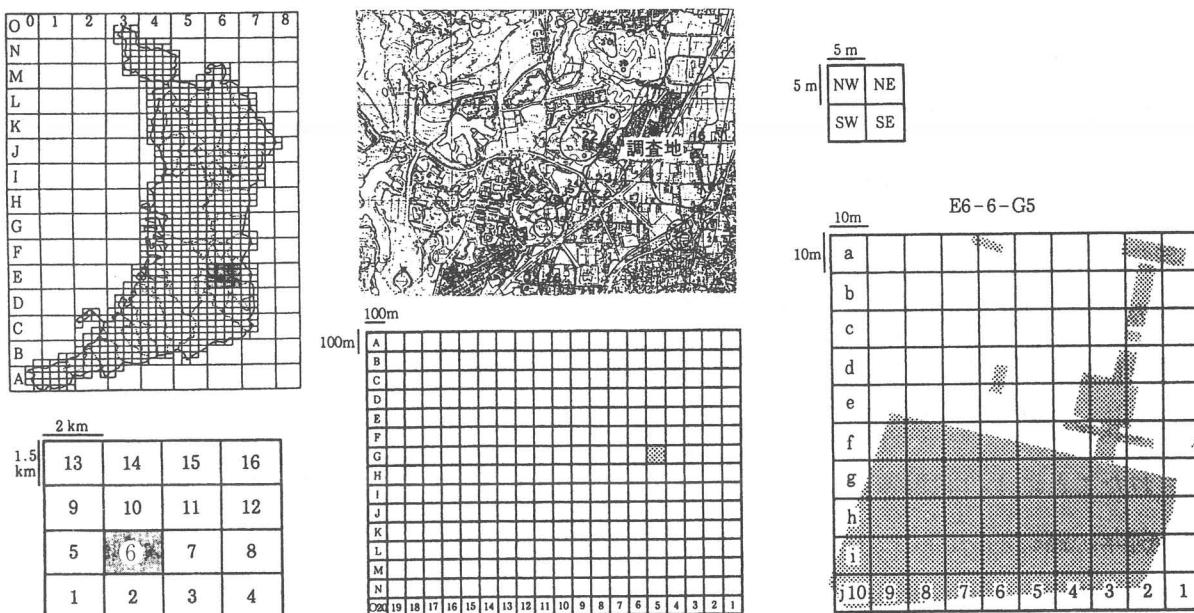
図 版 目 次

凡例

【遺構】

① 地区割り（第1図）

地区割りは、国土座標第VI系に基づき、1万分の1の地形図を使用し縦6km、横8kmの第I区画、2500分の1地形図を使用した縦1.5km、横2kmの第II区画、第II区画内を100m単位で区画した第III区画、第III区画内を10m単位で区画した第IV区画を用いて位置を標記した。1996年度以降の調査については、国土座標値が正確におとされているが、以前の調査では国土座標がおとされていない。第2図の調査区位置図については、住宅整備課が作成した500分の1の地図から、住宅地等を手がかりに縮小し、合成した図面を作成した。そのため、昭和35年から37年にかけての調査区の位置は正確には国土座標上にのっていない。



第1図 98年度調査地区割り図（98021）

② 調査番号・遺構番号

98年度調査以降については、大阪府で採用している調査番号が対応する。遺物の取り上げ、収納、現場図面、台帳類については調査番号で整理している。本報告についても遺構図面については調査番号も示した。しかし、瓦についてはほぼ原位置を保っていると考えられる南門所用瓦と中門所用瓦と考えられるもの以外については、調査年度、調査番号は示していない。

98021 98年度調査 『新堂廃寺発掘調査概要・Ⅲ』 大阪府教育委員会 1999年3月

00031 00年度調査

遺構番号は、95・96年度調査については概要報告から変更していない。98年度調査については、本報告を作成するにあたり新たに掲載する遺構がでてきたため、遺構番号の再整理を行った。基

本的には北から順に検出したすべての遺構に対し通し番号を付けた。遺構の性格を想定できるものについては遺構番号に溝・自然河川等の名詞を冠した。報告ではすべての遺構についての記述は行っていないため番号が飛んでいるが、整理した作業時の番号の変更は行っていない。ここでは変更した遺構名についてのみ記載しておく。新たに報告する遺構名については第9、11、12、20図を参照されたい。

【調査区対応表】

北方トレンチ→A区、中央トレンチ→B～C区、北西トレンチ→D区、西方トレンチ→E区、東方トレンチ→F区、寺域南側調査区→G区

【遺構番号対応表】

A区 犬走り→犬走り2、B区 参道側溝→溝5～13、C区 掘方1→柱穴25、掘方2→柱穴26、掘方3→柱穴27、掘方4→柱穴28、掘方5→柱穴29、掘方6→柱穴30、掘方7→柱穴31、掘方8→柱穴32、掘方9→柱穴33、掘方10→柱穴34、掘方11→柱穴35、掘方12→柱穴36、築地塀→築地49、犬走り→犬走り47、雨落ち溝→溝55、南辺溝→溝52、南限区画溝→溝53、宝幢遺構→柱穴37～42、E・F区 南限区画溝→溝53、G区 溝（中世～）→溝58・59、溝（飛鳥～奈良）→溝67、自然流路→自然流路62

③ 方位については、座標北を示している。調査地点における真北との差は、真北から座標北が東へ $6^{\circ} 40'$ 振っている。

【遺物】

- ① 既報告の軒丸瓦・軒平瓦のうち、特に重要と思われる資料については再掲載した。なお、必要に応じて加筆・修正を行った。
- ② 遺物実測図の縮尺については、土器が1/4、石製品・土製品が2/3と1/4、木製品が1/4、軒丸・軒平瓦が1/4、丸・平瓦が1/6である。断面が白抜きになっているのが弥生土器・土師器、スクリーントーンを貼っているのが黒色土器と瓦器、塗りつぶしているのが須恵器である。
- ③ 瓦の実測図は、割れているものについては破面として表現し、粘土の接着面が剥がれている場合については、外形より細い実線で表現した。接続技法については第4章に記載している。軒丸瓦の拓影の左右に貼っているスクリーントーンは、丸瓦の取りつけ位置で幅は厚みに対応する。厚みがわからないものについては、実線のみで表現した。
- ④ 道具瓦の縮尺は特に断らない限り、鷦尾・隅木蓋瓦・鬼瓦・不明瓦製品が1/4、埠・面戸瓦が1/6である。なお鷦尾は正面・背面のある遺物であることを踏まえ、左右両側面部分を区別するために断面図は頭部方向から見たようにレイアウトした。つまり、断面図は、左側面の破片の場合は平面図の左側に外面を左にして、右側面の破片の場合は平面図の右側に外面を右にして配している。断面図を伴わない平面図は裏面を表したものである。

第1章 位置と環境

第1節 立地と自然環境（図版1）

新堂廃寺の所在する富田林市は大阪平野の東南部、南河内地域のほぼ中心に位置している。市域中央を石川が北流し、東は嶽山と金胎寺山が、西は羽曳野丘陵が迫る。石川の形成した谷底平野は狭小で水田適地は少ないといえる。石川谷は北に広がり、現在の柏原市で大和川と合流するあたりから河内平野に連なっていく。嶽山の東には石川の支流である佐備川をはさんで河南町寛弘寺の丘陵が、さらに東には千早川が形成した谷平野が広がる。その東から南にかけては金剛山地が大きな屏風のように立ちふさがる。

新堂廃寺は石川西岸に形成された中位段丘の縁辺近くに立地する。この段丘は羽曳野丘陵から派生した幾筋もの短小な谷によって区画されており、新堂廃寺周辺にもいくつかの谷や埋没谷、谷を利用した溜池などが存在する。

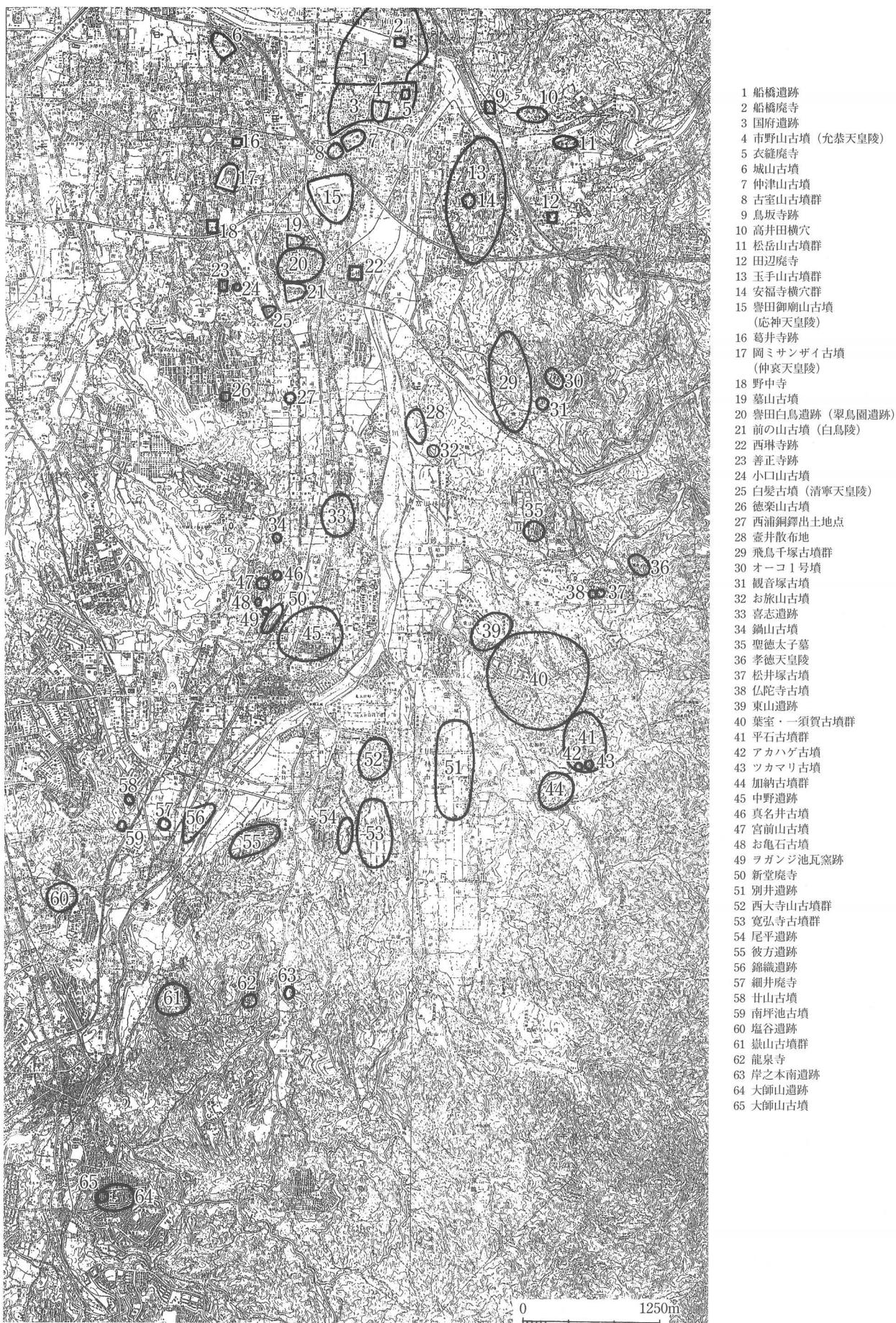
周辺は高度に市街化が進んでいるが、丘陵部や山地にはいまだ緑が広がっている。田畠や果樹林以外の山林の植生はほぼ完全に2次林化しているが、わずかに神社の社叢などで残るシリブカガシ、ヤマモモ、アラカシなどの照葉樹林が1次林の痕跡と考えられる。

第2節 歴史的環境（第2図）

富田林は古来南河内の中心として主に商業で栄えてきた。国の伝統的建造物群保存地区の選定を受けた富田林寺内町にはそのころの面影が色濃く残っている。さらに遡れば、古代の官道竹内街道が付近を通過することから、交通の要衝として重要な意味を持っていたとも考えられる。

旧石器時代の遺跡として周辺地域で著名なものは国府型ナイフ形石器の標式遺跡として知られる国府遺跡（藤井寺市）や、石器製作の状況が良好に残されていた翠鳥園（譽田白鳥）遺跡（羽曳野市）などがある。また、石器の主原料であるサヌカイトの産地である二上山麓にも多くの遺跡が知られている。富田林市域では谷川遺跡で国府型ナイフ形石器や翼状剥片、木葉形尖頭器が出土したのが初例であり、現在のところ唯一の遺跡であろう。旧石器時代末から縄紋時代草創期に属する有舌尖頭器はかなりの遺跡で出土しており、新堂廃寺でも本書に報告した例がある。

縄紋土器や石鏃などの石器が出土する遺跡も多数ある。新堂廃寺でも土器片や石鏃、石匙等が出土していることは本書に報告したとおりである。市域でよく知られている縄紋時代遺跡としては前期の錦織遺跡などがあるが、遺跡の構造までわかっているものはない。石川流域にはいくつかの縄紋遺跡が知られており、地域で著名なのはやはり国府遺跡である。前期及び晩期の土器、石器とともに多量の埋葬人骨が発掘されたことと、縄紋文化と国府型ナイフ形石器の文化層が層位的に確認されたことで、学史的にも重要である。前述の錦織遺跡は国府遺跡と地理的にも時期的にも近く、両者の密接な関係が指摘されている。さらに石川下流に下ると、大和川との合流点



第2図 本遺跡周辺遺跡分布図

近くに晩期船橋式の標式遺跡として知られる船橋遺跡（柏原市）がある。

弥生時代に入ると遺跡数は格段に増加するが、中河内地域などに比べると遺跡数、規模ともに見劣りする感はぬぐえない。富田林市域では前期の遺跡はなく、中期以後の遺跡だけが知られるという特徴がある。石川谷の狭小な平地が水稻耕作に適さなかったのであろうか。前期からの遺跡としては、やはり国府遺跡が著名で、その後石川谷に展開する弥生集落の母村的拠点であるとともに、サヌカイト製石器及び石材のターミナルとして河内全域に影響力を持ったムラであったと考えられる。市域で有名な中期の喜志遺跡は石川中流域の弥生遺跡の中では拠点的集落と呼べるものであるが、やはり石器製作を主要な生業としていたと考えられるムラで、まさに二上山麓に近く、また、主要な消費地である中河内に抜けやすい谷筋という立地が生んだムラといえる。他に中期の遺跡としては、中野遺跡（富田林市）や塩谷遺跡（河内長野市）、壺井遺跡（羽曳野市）などが、また、後期になると、彼方遺跡、尾平遺跡（富田林市）、東山遺跡（太子町）、大師山遺跡（河内長野市）などの高地性集落が周辺の丘陵に展開する。尾平遺跡では弥生時代末の墳丘墓も検出された。なお、南河内地域からは言い伝えも含めて9個の銅鐸の出土が知られている。出土地が明らかなものは、出土状態まで調査された西浦銅鐸（羽曳野市）を代表例とする。

古墳時代前期の前方後円墳としては玉手山古墳群、松岳山古墳（柏原市）が南河内地域の盟主墳としてよく知られている。石川中流部では、お旅山古墳（羽曳野市）、真名井古墳、鍋山古墳、廿山古墳（富田林市）などが、上流部では大師山古墳（河内長野市）がある。中期になると、最大の譽田御廟山古墳（応神天皇陵）をはじめとする古市古墳群が羽曳野、藤井寺両市を中心に展開するが、石川中・上流域には顕著な古墳は見られなくなる。後期には横穴式石室を主体とする古墳が現れ、金剛、生駒の西麓には大小の古墳群が形成される。周辺では一須賀古墳群（太子町・河南町）、寛弘寺古墳群（河南町）、飛鳥千塚（羽曳野市）、嶽山古墳群（富田林市）などの群集墳や、磯長谷古墳群のような天皇陵比定墳を含む古墳群、特殊なものとして高井田や安福寺の横穴群（柏原市）などがある。また、南河内地域には終末期古墳が多数存在する。お龜石古墳、宮前山古墳、南坪池古墳（富田林市）、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳（河南町）、孝徳陵、聖徳太子墓、仏陀寺古墳、松井塚古墳（太子町）、観音塚古墳、オーコ1号墳、小口山古墳、徳楽山古墳（羽曳野市）など枚挙にいとまがない。このうちお龜石古墳は横口式石棺の周囲に飛鳥時代の平瓦を積み上げた護壁があることとその位置関係から、新堂廃寺の建立氏族の墓ではないかとされている。お龜石古墳と新堂廃寺の中間には新堂廃寺所用瓦を生産したヲガンジ池瓦窯跡がある。古墳時代の集落遺跡も数多く知られているが、富田林市域では6世紀中葉から集落が営まれる中野遺跡が中心的集落の地位を持つと考えられる。須恵器生産では泉州地域の陶邑窯跡群がよく知られているが、近年南河内地域でも岸之本南遺跡（富田林市）などで韓式土器を含む初期須恵器を出土する遺跡が知られてきた。周辺には埴輪や土師器生産で栄えた土師の里遺跡（藤井寺市）など在来の氏族の集落も見られるが、南河内地域、特に石川流域には西文氏、船氏、紀氏、錦織氏など渡来系氏族の名が多く見られることも特徴として挙げられる。先に、石川中・上流域には

顯著な中期古墳が見られないことを述べたが、この谷間の段丘を耕地として開発するには渡来人の携えてきた先進的な技術が必要だったのではないかと推定する。『日本書紀』に見る日羅の記事を引くまでもなく、この地域が古来より渡来系の人々の集住する場所であったということは考えられることで、6世紀以降に石川谷の段丘上に遺跡が増加することとも符合する。そのような地域に百濟系単弁蓮華紋軒丸瓦を創建瓦とする新堂廃寺が建立されたことは自然な流れと見てよいだろう。それは飛鳥寺建立から数十年後、摂津四天王寺の創建とあまり変わらない時期であった。

(広瀬)

第2章 調査経過 (第3図)

新堂廃寺の予備調査及び発掘調査等については既往の報告・概要が刊行されており、詳細については第3章で再録するため、ここでは年度ごとに整理するのみにとどめる。

① 1959年度 予備調査 府営富田林住宅が本遺跡内に建設されることとなったために本府教育委員会が大阪大学に調査を委託した。(以下、59年度調査と略称する)

註1 北野耕平他『河内新堂廃寺』 1960年 大阪大学文学部国史研究室・大阪府教育委員会

(以下、59年度報告と略称する)

② 1960年度 発掘調査 59年度調査を受けて、約3500m²の発掘調査が実施された。

これらの発掘調査の成果を受けて伽藍の中心部が公園として保存されることになった。しかし、住宅建設が先行した中での発掘調査であったため、伽藍の東半分が未調査の状態で住棟が建設される結果となった。(以下、60年度調査と略称する)

註2 藤澤一夫他『河内新堂・鳥含寺の調査』 1961年 大阪府教育委員会 (以下、60年度報告と略称する)

③ 1992年度 試掘調査 住棟が老朽化したことにより、建て替えが具体的なこととなつたため、それまで未調査であった区域も含めて寺域の確定と保存区域の設定を計ることを目的に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果東西約1町、南北約2町の暫定的な保存区域が設定されたが、南側については既存の住宅が撤去されていなかったことにより十分なデータが得られなかつたため、再度調査を実施することとした。(以下、92年度調査と略称する)

註3 『新堂廃寺発掘調査概要』 1996年3月 大阪府教育委員会 (以下、概要Ⅰと略称する)

④ 1995年度 第Ⅰ期住宅建設のための発掘調査 保存区域の北側約5400m²。(調査番号96067)
(以下、95年度調査と略称する) (註4文献)

⑤ 1996年度 発掘調査・整理事業 埋管設置のための調査、約180m²。(以下、96年度調査と略称する) 95年度調査の遺物整理。

註4 『新堂廃寺発掘調査概要Ⅱ』 1997年3月 大阪府教育委員会 (以下、概要Ⅱと略称する)

⑥ 1997年度 立会調査 現在の公園の南端と南東隅の道路側溝に埋設管設置のための掘削に伴い立会調査を実施した。掘削深度は遺構面の上面にとどめた。

⑦ 1998年度 発掘調査 第Ⅱ期住宅建設予定地の本発掘調査及び保存区域南側の確定を計ることを目的に、暫定的保存区域南側の確認調査を実施した。この確認調査は同年度に実施された富田林市教育委員会による範囲確認調査と連続する位置で同時に実施したものである。(調査番号98021) (以下、98年度府教委調査と略称する)

註5 『新堂廃寺発掘調査概要Ⅲ』1999年3月 大阪府教育委員会 (以下、概要Ⅲと略称する)



第3図 調査位置・主要伽藍位置図

⑧ 1999年度 遺物整理 98年度調査の遺物洗浄・注記・接合などの基本整理及び遺物の分類等を実施した。

⑨ 2000年度 発掘調査・遺物整理 府営住宅集会所建設のための発掘調査。約60m²。（調査番号00031）集会所は基本的には盛り土内で建設されることとなったため、トレンチ調査を実施した。調査結果は本書にて報告する。（以下、00年度府教委調査と略称する）

今回の報告にあたり、遺物整理については、60年度調査以降出土したものはすべて実見し分類を行うとともに、98年度調査の遺構の再整理を実施した。

以上が今回の報告に至る新堂廃寺の発掘調査及び整理事業である。この他にも、新堂廃寺周辺では、現在の外環状線（遺跡の東側）の建設に先立ち、財團法人元興寺文化財研究所が調査を実施した。また、富田林市教育委員会が民間住宅開発（伽藍の北西）に伴って約400m²の発掘調査を実施し、奈良時代までの瓦を多量に含む大規模な南北溝を検出した。（以下、84年度市教委調査と略称する）

註6 『新堂廃寺』現地説明会資料 1984年8月 富田林市教育委員会

また、新堂廃寺を国史跡に指定し保存・活用していくことを目的に1997年度から同市教育委員会により範囲確認調査が実施されている。

① 1997年度 約50m²。金堂跡の東側の調査。遺構は4期確認されており、地山面（Ⅰ期）で南北方向の自然地形に反する約0.1mの比高差を確認。伽藍中軸線と平行することから、なんらかの建物基壇の可能性が指摘されている。（以下、97年度市教委調査と略称する）

② 1998年度 約85m²。伽藍南側の調査。遺構面は2面確認されており、第1面では、参道に伴う溝（5～13）が、第2面では飛鳥時代の中門及び南面回廊が検出された。この調査結果については、前述の98年度府教委調査と密接な関係を持つ遺構であるため、本書第3章でも取り扱う。（以下、98年度市教委調査と略称する）

註7 中辻亘他『平成10年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林市埋蔵文化財調査報告30

1999年3月 富田林市教育委員会（①と②は合本。）（以下、98年度市教委報告と略称する）

③ 1999年度 約60m²。97年度市教委調査の最終面（第Ⅰ期）も含めた調査。遺構面は5面確認されており、第Ⅱ期の遺構面が新堂廃寺の建物造営時の遺構である。この面で、60年度調査で確認された西方建物の東辺（瓦積基壇）を主要伽藍の中軸線で折り返したラインでわずかではあるが、南北方向の地山の段差が確認され、白鳳時代に東方建物が存在したであろうと報告されている。（以下、99年度市教委調査と略称する）

註8 中辻亘他『平成11年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林市埋蔵文化財調査報告31

2000年3月 富田林市教育委員会（以下、99年度市教委報告と略称する）

④ 2000年度 98年度の府及び市教委の調査で中門と南面回廊、南門が確認されたことにより、伽藍配置や規模の詳細な検討が必要となったため、59・60年度に調査が実施されて公園として保存されていた区域の再調査と、東面回廊推定地、推定東方建物東側及び中門北半部の調査が実施

された。公園部分では塔跡と考えられる南方建物、金堂と考えられる中央建物の一部、西方建物の一部が再発掘された。南方建物基壇中央から花崗岩製の地下式心礎が検出されたことにより、南方建物が塔であることが確定し、中央建物が金堂であることも確実になった。また、金堂と塔の間で瓦敷参道が検出された。西方建物南側では南北方向の地山の段差が検出され、西面回廊の一部と推定されている。東面回廊推定地では積み土（富田林市教委中辻亘氏教示）が確認されたものの、確実に回廊の基壇築成土とは言い切れないものであろう。東方建物東側では奈良時代の瓦を含む南北溝が検出された。中門北半部では伽藍と同じ軸を持つ大規模な掘立柱建物の一部が検出された。（以下、00年度市教委調査と略称する）

（井西）

註9 『新堂廃寺』現地説明会資料 2000年11月 富田林市教育委員会

第3章 調査結果

第1節 59年度予備調査（伽藍配置確認の調査）

第1項 調査位置

本調査は新堂廃寺に関する発掘調査の第1次調査といえるものである。府営富田林住宅（現・府営富田林緑ヶ丘住宅）の建設に先立ち、遺跡の範囲と要調査範囲を決定するための試掘・確認調査として、大阪府の委託により大阪大学文学部が北野耕平氏を担当者として実施したものである。調査期間は1959年3月15日～4月10日である。既往の調査結果や遺跡の現状からは全く堂塔痕跡を想定できなかったので、瓦の散布が顕著であり、丘陵の裾に接して低平な水田地域の中で一段高く突出した南北130m、東西120mの長方形状台地に50ヵ所のトレンチが設定された。

第2項 調査成果

本トレンチ調査の最大の成果としては、遺跡の範囲内においてまさしく調査位置が堂塔伽藍建設地であることが確認されたこと、および後に西方建物と称される瓦積基壇を検出したことである。調査成果の詳細については59年度報告によるが、重要なトレンチについてのみここで再録したい。記述は既往の報告の調査区域に準ずる。

① 第1区

この調査区域では、瓦堆積が間層を挟在して2層堆積していることが確認された。下層出土瓦は、4型式出土しているがいずれも飛鳥時代の様相を示している。上層には、川原寺式、平城宮式の瓦が含まれていた。

本調査域で特筆すべき点は、この時期を違える上下2層の瓦堆積層と整地土が検出されたこと、下層出土のIA04型式の瓦が「軒下に自然落下した如く点々とほぼ東西方向の線上に検出された」ことである。

② 第2区

この調査区域では、遺構面が3面確認された。最終面は地山面であり、旧地形が西側に向かって約0.6m下がることが確認された。第2面は黄色粘土層上面で検出された。黄色粘土層は上層堆積の瓦の時期から飛鳥時代の整地層と考えられる。この面では柱根が検出された。ただ、この柱根は直径43cmを測るが、残存長が10cm程しかなく、連続する柱根が検出されていないので、どのような構造物に伴うものかは不明であると言わざるを得ない。第1面では、60年度調査の結果西方建物と呼ばれる瓦積基壇（検出長12m）が検出された。

③ 第3区

この調査区域は、伽藍の北側部分に位置していたことになる。第1・2調査区とは旧地形の様相が違い、地山は高く、包含層は1層であった。北西部分の包含層内には焼瓦片を含む焼土層が堆積していた。この調査区域で特筆すべき遺構は、幅約5mを測る東西方向の溝である。調査時に寺域の北限との見解が出されている。

④ 第4区

この調査区域は、伽藍の中央部分に位置する。この調査区においてのみ、中世に属する土器類・瓦片が多量に出土した。中世まで存続した遺構の存在が推測された。

以上が59年度調査の主要成果である。再度、寺地に主眼をおいて簡略にまとめてみる。

【飛鳥時代】

北：第3調査区の30、32、33トレンチで検出された溝。

西：旧地形を整地（黄色粘土）した後、柱根が残存していた地点。

東：不明

南：第1調査区の5トレンチ下層、IA04型式の瓦が出土した地点。

【奈良時代】

北：東：南 飛鳥時代との差異は認められない。

西：飛鳥時代には谷であった所を整地（黄褐色・褐色粘土）し、寺地を広げた上で瓦積基壇が構築された。
(井西)

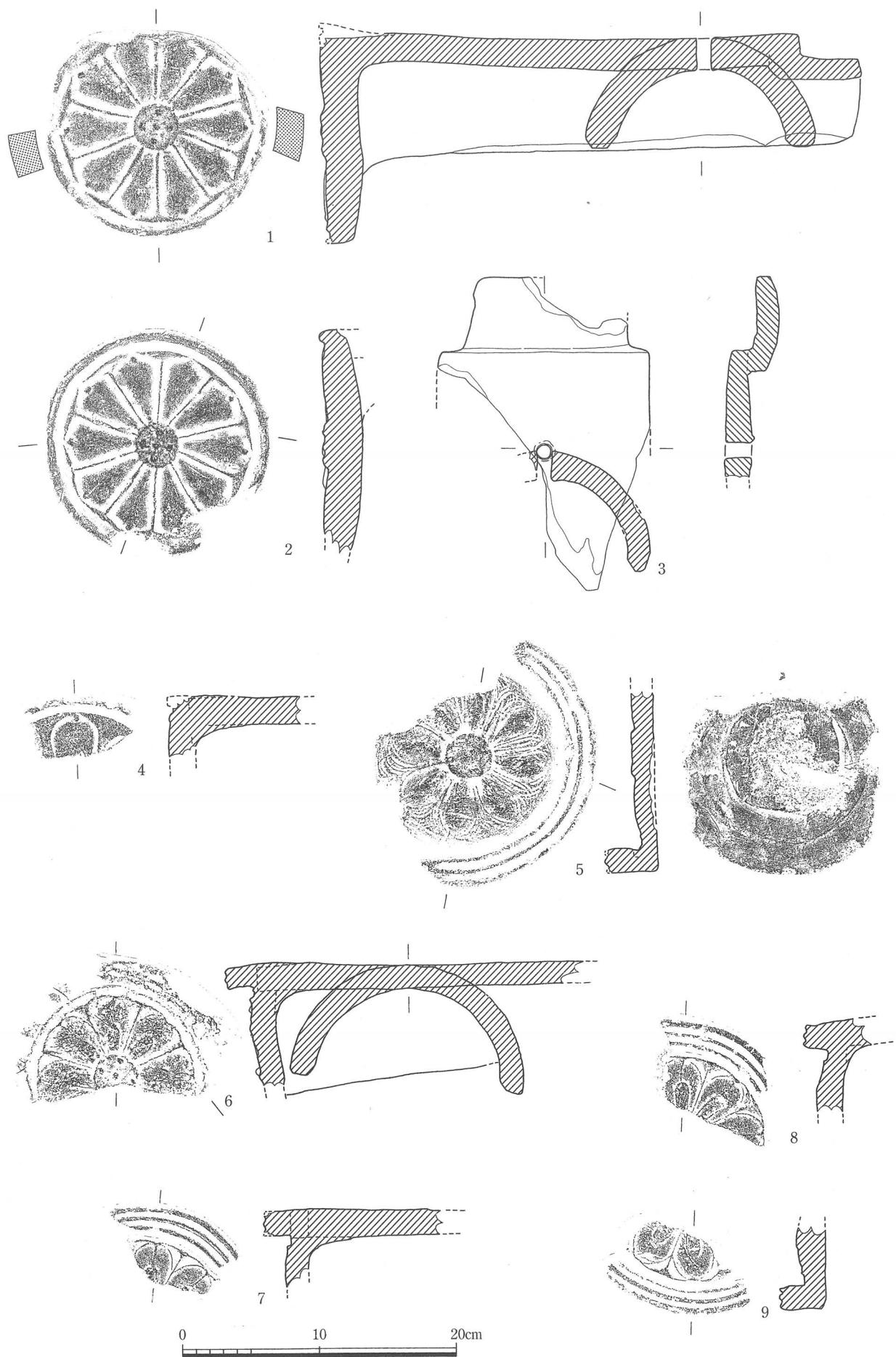
出土遺物

59年度調査では、すでに報告されているとおり瓦類を含め多量の遺物が出土した。本報告では、大阪大学の協力により、出土した遺物をすべて実見する機会を得た。必要に応じて再掲載、新資料の掲載を行った。型式および接続技法については、第4章を参照されたい。

【軒丸瓦・丸瓦】（第4図・図版71）（1～9）

IA03型式（4） 色調は灰色を呈し、胎土は長石、砂粒を含み、焼成は堅緻である。丸瓦の凸面に平行タタキが観察される。接続技法は不明である。

IA04型式（1、2）（1）は完形で出土し、接続する丸瓦は有段式である。色調は灰白色を呈し、胎土は長石と黒色砂粒を含み、焼成はやや軟質である。瓦当直径は約15cmで瓦当取り付け



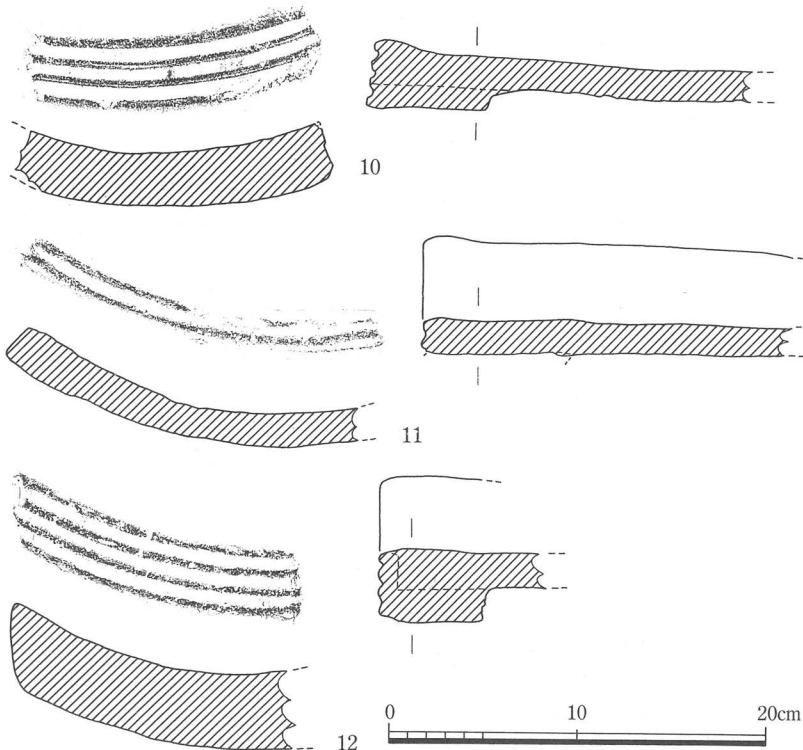
第4図 59年度調査出土軒丸瓦実測図（大阪大学保管）

位置から段部先端までが約27cmを測る。段部先端から5～7cmの位置に径約1cmの釘穴が穿たれる。丸瓦は円柱形の型木を使用し、先に型木の上に粘土紐を積み上げて段部を成形する。その後、粘土板を貼り付けて筒部を成形する。段部凹面はヘラケズリとナデが観察される。(2)の丸瓦との接続技法はg技法である。色調・胎土・焼成については(1)と同様である。丸瓦(3)は、円柱形の型木を使用するのは(1)と同様であるが、先に型木に粘土板を巻き付け、先端の粘土を折り曲げその上に段部を成形する。段部は粘土紐で積み上げて成形し、凹面はヘラケズリ、ナデが観察される。色調・胎土・焼成は(1、2)と同様である。段部先端から12cmの所に釘穴が穿たれている。

(井西)

II A 06型式(5～9) 図示した山田寺式資料はいずれもII A 06型式で、弁央軸線が不明瞭な段階のものである。(5)は紋様がぶれているため判別に苦しむが、II A 06型式と思われる。瓦当裏面に、板の木口のような工具で時計回りに回転利用の調整を施しているのが特徴的である。瓦当裏面中央はこの調整が施されずに、一段高く残されている。(6)は外縁部が破断した箇所で丸瓦の歯車加工が良好に観察される資料で、2cm幅の四角い切り欠きを1.5cmおきに入れている。丸瓦部は凹面側縁を面取りし、細かい布目を有する。(7～9)は破片であるが、外縁重圧紋の挽き型施紋の痕跡が認められる。

(堀)



第5図 59年度調査出土軒平瓦実測図（大阪大学保管）

【軒平瓦】（第5図）(10～12)

II B 01型式a (10) 色調は橙褐色を呈し、胎土には長石、石英、クサリ礫を含み焼成はやや軟質である。平瓦凸面に正格子タタキが残る。瓦当面に近い凹凸両面がやや膨らみ、凹面側の膨らみ部には布目がない。布目の残る部分との間にはわずかながらはっきりした段差が観察できることから、桶の端から若干はみ出した形で粘土板が巻き付けられた可能性がある。

II B 01型式b (11) 色調、胎土、焼成は(10)と同様である。平瓦凸面は頸接合部までタタキ目をすり消している。瓦当面に近い凹面はやはりやや膨らんでおり、その膨らみをヘラケズリす

る。凹面の側縁近くに細い分割界線が認められる。

Ⅱ B02型式 b (12) 色調は黒灰色を呈し、胎土には長石を含み、焼成はやや軟質である。瓦当面は頸の粘土板を折り返して接合していることから、粘土円筒上端で接続したものであることがわかる。頸段部と平瓦の接合面の撫で付けは粗雑である。この接合手法はきわめてまれで、新堂廃寺では現在までに確実な資料としては4点確認されているだけである。 (広瀬)

【鳴尾】 (第6、7図・図版69、70) (13~26)

(14、15) は左側面胴部の破片である。正段の最大幅は7.3cmを測る。(13、16) は焼成・厚さなどの点で(14、15) と共通する。(16) は左側面胴部にあたり、裏面には粘土紐の積み上げの痕跡が明瞭に観察できる。(13) は幅約7cmの正段を互い違いに配し、縦帯を表す。(13、16) には孔がそれぞれ2ヵ所、1ヵ所設けられているが、その用途は不明である。(13~16) の焼成は堅緻で、淡灰褐色を呈する。厚さは1.4~1.7cmと薄手であった。

(17) は腹部と鰏部を残す左側面の破片である。幅1.2~1.5cmの縦帯を削り出す。縦帯上には鰏の段とほぼ方向を同じくして沈線がヘラ書きされている。これは残存していない胴部の段の位置を規定するための下書きである可能性が高い。腹部内面はナデ調整し、工具痕が残る。鰏と腹部の取り付き部分は丁寧に指で粘土を撫で付けている。

(18) は大阪府資料(762)と接合するため第4章で後述する。(19) は幅1.2cmの断面方形の縦帯を境に胴部と鰏の段を互い違いに配す。(21) は脊稜部を含む。脊稜は突出せず、幅が広い。胴部(22) は幅3.6cmの正段が平行に走る。(17~22) は淡黄褐色を呈し、焼成は軟質である。

(23) は大阪府資料(764)と接合するため第4章で後述する。

(24) は鰏部である。厚さは2.5cm前後、幅10cm程度の正段を削り出す。腹部との取り付きの接合面が破面に沿って残り、鰏の出は10cm前後である。一部灰白色だが、須恵質を呈す。

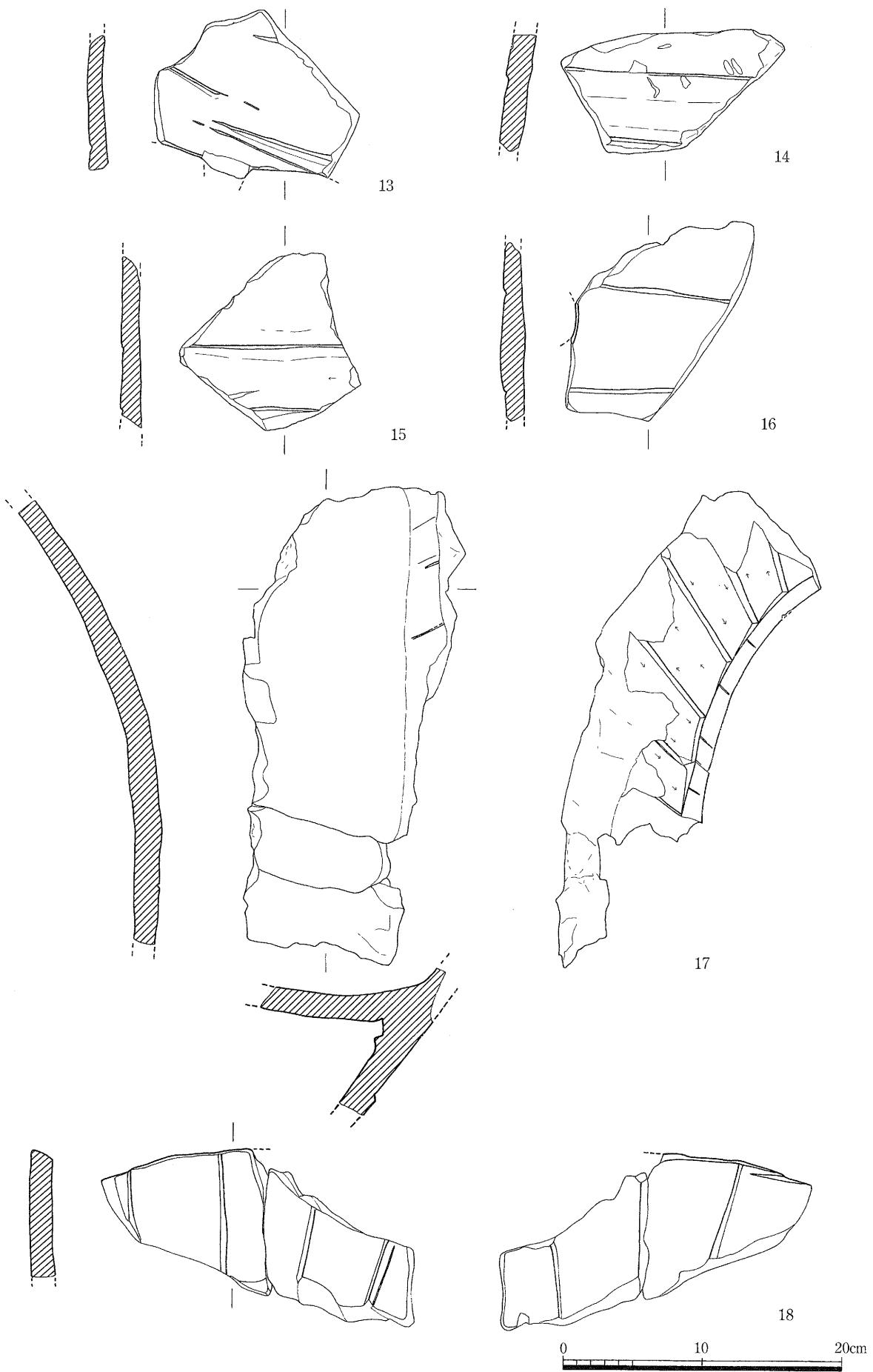
(25、26) は胴部もしくは鰏部の破片で、幅6.5~7cmの段を持つ。いずれも裏面は平坦である。胎土は長石の粗い粒子を含み、焼成も軟質である。

【鬼瓦】 (第7図) (27)

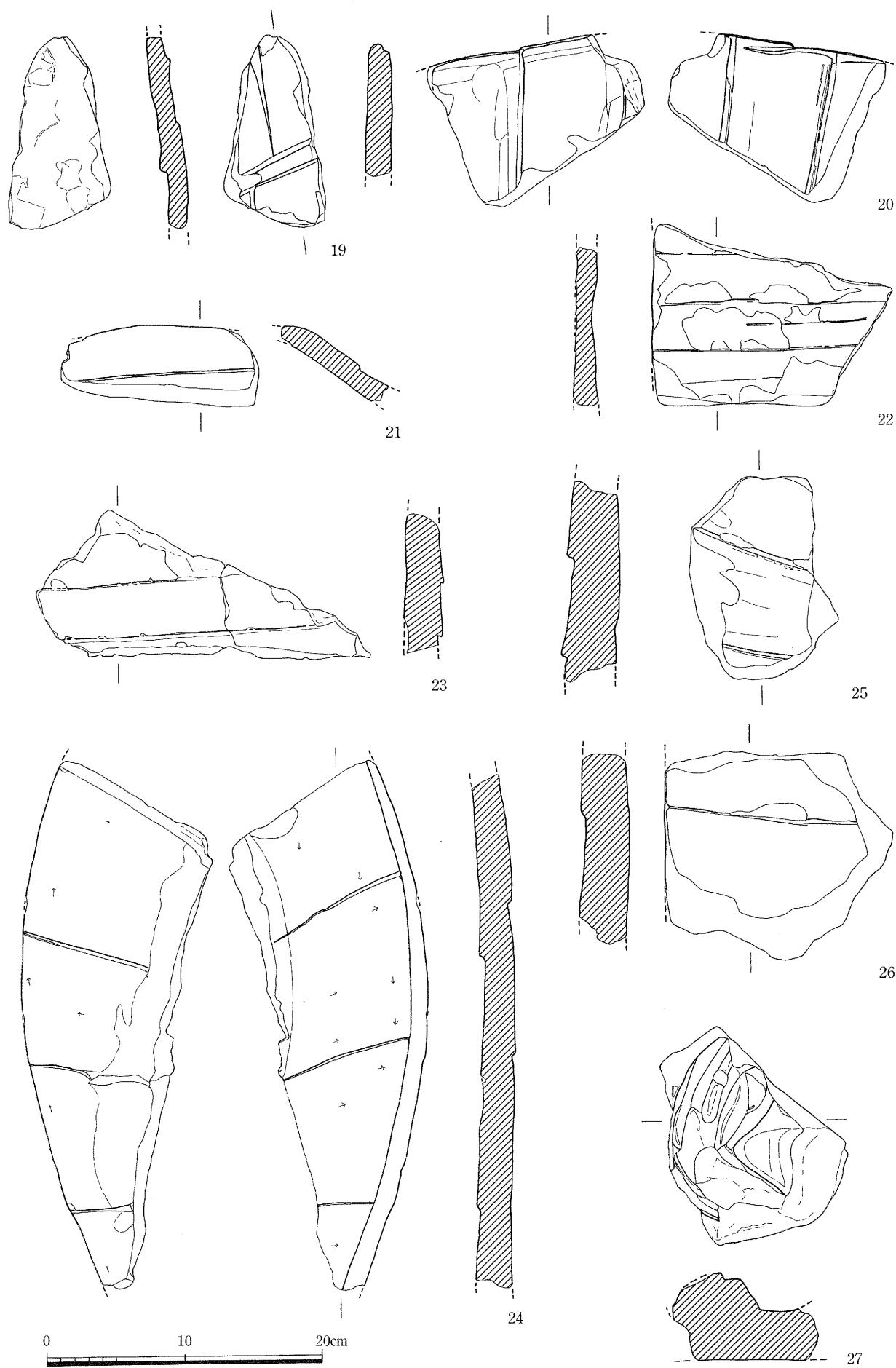
(27) は手づくねで成形される鬼瓦である。約3.5cmの厚さの盤面上に肘を含む右腕が表現される。腕はヘラ状工具で撫で付けたり、柳葉状の切り込みを入れたりすることで、筋肉を表現する。98年度府教委調査でも同型式の鬼瓦が出土している。 (岩戸)

第2節 60年度調査（主要伽藍の調査）(図版2)

前年度の予備調査の結果を受けて、瓦積基壇が発見された府営住宅用地西側約3000m²を対象に本発掘調査を実施した。調査主体は大阪府教育委員会で調査期間は1960年9月1日~10月19日である。調査組織は府文化財専門委員浅野清氏、奈良国立文化財研究所坪井清足氏、鈴木嘉吉氏、工藤圭章氏、田中琢氏、岡田茂弘氏、大阪大学北野耕平氏、府教委藤澤一夫氏、水野正好氏といった鋭々たるメンバーであった。



第6図 59年度調査出土鴉尾実測図・1 (大阪大学保管)



第7図 59年度調査出土鷦尾実測図・2 (大阪大学保管)

調査は最も明瞭な遺構である瓦積基壇から開始された。その結果、建物主軸が磁北で17° 東（座標北で21° 29' 東）に振っていることが明らかになったため、調査区をそれに合わせて設定し調査を進めた。結果的には瓦積基壇建物の東側で玉石積み基壇を有する2棟の建物跡と、凝灰岩切石による基壇外装を有すると考えられる建物1棟の計4棟の建物遺構が確認された。以下に調査結果の概略をまとめる。

第1項 遺構

西方建物 予備調査で確認された瓦積基壇建物跡である。南北27.6m、東西16.42mの規模を有し、東辺中央に階段と考えられる間口5.6m、奥行3.2mの突出部が確認された。基壇高は0.1m程度残っているだけであった。基壇外装に用いられた瓦に縄目タタキのものを含むことから、奈良時代の建築であることがわかった。さらに、この建物構築以前に同位置で北に0.4m、南に3.36m大きい基壇が存在したことが確認された。層位的には飛鳥時代の瓦のみを含む整地土の上に構築され、奈良時代建物に伴う焼土の下層であること、この基壇の外側に再建後のものとは別の焼土層があったことから、白鳳時代に建設され、奈良時代に焼失した後、基壇規模を縮小して再建されたものと推定された。

南方建物 西方建物の東方約9mの位置でわずかに残された玉石と段差により建物基壇を確認した。規模は南北13.35mで、正方形になると推定された。基壇西辺の玉石の下に重弧紋軒平瓦の破片が挟まっていたことから、白鳳時代以降のものと判断でき、基壇外方の堆積土より奈良時代の瓦が出土したことを合わせ、奈良時代の建築と推定された。また、基壇下層の地山直上に飛鳥時代の瓦堆積が存在することが確認されたが、飛鳥時代の遺構については確認できなかった。この遺構は位置的に塔と考えられたため、心礎の痕跡も入念に探索されたが、未確認であった。

中央建物 南方建物の北方7.9m、西方建物の東方7.9mの位置で玉石積み基壇を検出した。規模は南北14.1mである。予備調査時のトレーナーで確認された段差を採用すると東西は15.9mに復元できる。南方建物と同一の中軸線を持つとすれば南方建物よりやや大きい東西棟の建物になり、金堂の可能性が指摘された。この建物も層位的に奈良時代の建築とされた。また、この基壇裾を巡るように中世から江戸時代末の瓦・陶磁器を含む溝が検出されたことから、新堂廃寺がほとんど廃絶した後、鎌倉時代以降もこの中央建物の位置に仏堂が一宇のみあったと考えられた。

北方建物 中央建物の北方14.5mの位置で高さ0.25mの地山の段差が検出され、その肩にかすかな凝灰岩の据え付け痕跡が認められた。地山削り出しのこの基壇の残存状況はきわめて悪く、東西規模が23.5m程度と推測されたにとどまる。比較的残りのよかつた西辺でも回廊等の取り付きは確認できなかった。

第2項 建築的考察

浅野清氏はこれらの調査結果をもとに新堂廃寺の伽藍配置について考察している。検出された遺構が白鳳時代以降のものであることが前提にはあるが、最も可能性の高い配置として、南向きの四天王寺式伽藍配置を想定し、西方建物については東面する特殊な建物と考え、当麻寺曼陀羅堂の前身建物のようなものと推定した。また、第2の案として東向きの川原寺式伽藍配置も想定しているが、飛鳥寺式の可能性には言及していない。

第3項 瓦の考察

藤澤一夫氏は出土した瓦を分類し、編年の位置づけや系譜についても考察した。国内に所在する飛鳥時代創建の寺院跡との比較から、百濟との強いつながりを想定しており、特に寺名についても周辺のヲガンジという地名から鳥含寺と推定し、百濟扶余の北岳鳥含寺の寺名が伝わった可能性に言及している。この時の瓦の型式設定を基本として95年度調査の遺物整理の段階で新たに型式を設定し直し、以降の調査における瓦類の分析を進めてきた。(広瀬)

第3節 92年度試掘調査（寺域確認の調査）

住宅建て替え用地内に32ヵ所のトレンチを設定した。調査期間は1992年11月～1993年3月である。本遺跡は羽曳野丘陵の東縁裾部に位置し、旧地形は全体的には、東に向かって下がっている。羽曳野丘陵から派生する谷が何本も東・南に入ることにより、基本層序は地点ごとに大きく変わるので、伽藍を中心としてブロックごとに説明する。

北側・・96年度調査が実施された位置にあたるため後述する。

東側・・4ヵ所でトレンチ調査を実施した。最も北側のトレンチでは旧耕土・床土を除去すると遺構面（地山面）となり、奈良時代から中世の掘立柱穴が検出された。主要伽藍である塔（南方建物）・金堂（中央建物）に最も近い3ヵ所のトレンチでは、耕土・床土を除去すると2層の整地層が確認された。上下整地層の上面がいずれも遺構面となる。この3ヵ所のトレンチのうち、最も北側では10世紀後半には埋没したと考えられる南北溝を検出した。最終面（地山面）では遺構は検出されなかった。これらのトレンチでは、他のトレンチと比較して多量の飛鳥時代の瓦が出土した。

西側・・南北方向に谷が入り、基本層序も北・東のトレンチと大きく異なる。上層は中世以降水田として機能しており、耕土・床土が4面確認された。地山は粘土層もしくは砂層である。

南側・・98年度調査が実施された位置にあたるため後述する。

この試掘調査によって、北・南は東西方向の溝（溝間約2町）、西・東は南北方向の溝（溝間約1町）で伽藍を中心とした寺域を推定した。推定する根拠としては、回廊・築地塀などが検出されなかつたため、溝と遺物の出土量・旧地形の様相・84年度市教委調査などを参考としている。

第4節 95年度調査（主要伽藍北東部の調査）(図版3、4)

調査期間は1995年4月～1996年3月で、調査面積は約5400m²である。8世紀半ばを中心とした8世紀前半から9世紀までの掘立柱建物で構成された集落が検出された。それぞれの建物の主軸方向・切り合い関係、出土遺物等から4期の変遷が考えられる。検出した建物の中には大型の建物や主軸方向が主要伽藍の主軸と平行しているものもあり、また建物が計画的に配されていることから官衙的な集落もしくは新堂廃寺建立氏族・檀越氏族の集落の可能性を指摘した。井戸01内から、「寺」と書かれた8世紀中頃の土師器の杯が出土した。他に井戸01と大型の建物を切っている溝（溝01）から「千」と書かれた土師器・須恵器の杯が数点出土した。この調査区内では新堂廃寺の創建時期に属する遺構の検出はなかった。

第5節 96年度調査（主要伽藍東側の調査）(96067) (図版4)

下水道埋設管設置に伴う発掘調査で、調査期間は1997年1月～3月である。調査面積は約180m²で、主要伽藍の東側に位置する。府営住宅敷地の最も東側で、民間住宅との間にある南北方向の道路でトレンチ調査を実施している。

基本層序は北から98年度市教委調査で確認されている中門の位置までは、地山面がほぼT.P.+66.2～66.4mで部分的に包含層・整地土が堆積する様相を示し、中門から南へは自然河川・谷地形の堆積が確認された。98年度府教委調査において確認された中門・南門間の谷地形と同じ様相を示す。

遺構は、トレンチB区で確認された溝1が96年度調査区の溝5と同様の堆積状況を示すことから同一の溝と考えられ、集落を画する溝が約50m南に延びていることが確認された。またトレンチD区では方向が座標北で約27° 東に振る、深さ約0.25mの東への落ちを確認した。落ちの覆土からは奈良時代の平瓦が出土している。トレンチを拡張できなかつたため延長が確認できなかつたことと、西側の平坦面の状況が未調査であるため遺構の性格を確定するのは難しいが、トレンチB区と96年度調査で集落を画すると考えられる溝がこの落ちから西約1.5mで検出されていることから考えると寺域を画する可能性も推測できる。

(井西)

第6節 98年度府教委調査（南門・主要伽藍南側の調査）(98021) (図版5)

98年度調査の主要な遺構の概要についてはすでに報告している（概要Ⅲ）。調査は府営住宅第Ⅱ期建て替え用地の本発掘調査と、保存区域南限を確定することを目的とした確認調査で、確認調査は富田林市教育委員会の調査区に隣接したトレンチを設定し、土層、遺構等を相互に検討しあいながら進めた共同調査的性格のものであった。

遺構については概要Ⅲに報告したものもあるが、同書には未掲載のもの、再整理したものも合わせて報告する。変更した遺構番号については凡例に示しているので参照されたい。遺物の詳細については観察表を参照されたい。

第1項 概観

概要Ⅲに報告した内容を再度簡単に整理しておく。第Ⅱ期住宅建て替え用地のG区については後に詳しく報告することとし、ここでは確認調査の結果を市教委調査も含め再整理するにとどめる。まず、中門基壇が確認された98年度市教委調査区の概要をまとめておく。

《市教委確認調査》

中門・南面回廊 98年度市教委調査区では、調査区南端から北へ約4mの位置でほぼ東西方向に延びる埋没谷の肩が検出された。谷の幅は98年度府教委調査区B区にかけて約38mである。創建時の中門基壇はこの谷の埋積土上面を肩口から約3.5mの範囲まで整地した後、谷肩口の地山南側に築成土を継ぎ足して形成されたものと考えられるが、その基壇築成土はほとんど残っていなかった。ただ、基壇基盤層の上面で回廊からの突出部の延長上に微妙な色調・土質の違う範囲が確認されたことにより、回廊からの中門基壇の出は約3m、基壇幅は13.4mと推定された。調査区東寄りでは回廊基壇の取り付きを確認した。取り付け部は地山を直角に削り出して成形している。中門ともに雨落ち溝などは検出されていない。周辺からは飛鳥・白鳳時代の瓦とともに凝灰岩の細片や人頭大の礫が出土している。前述の基盤整地範囲より南側は中門建設後も埋没後の谷地形を整地しておらず、湿地の様相を示していると報告した。

基壇築成土が失われたのがいつの時点であったかは明確になっていない。その上層は若干の焼土と多量の瓦を含む土層が堆積しており、これは後述する南門整備前に行われた整地と一連のものと考えられている。

この整地土上面では、参道側溝と考えられた2条の平行する南北溝（溝5～13）が一部検出され、この両溝の北端と中門基壇の間に一部貼り足した粘土層が確認できたことから、ここを中門の階段裾の位置と推定した。

《府教委確認調査》

60年度調査の結果府営住宅内の公園として保存された区域の南側で、60年度報告に示された遺構図と建て替え前の現況測量図を参考に伽藍中軸線を推定復元して設定し、まずその線を中心とした範囲の確認から着手した。推定中軸線上に設定した幅5mのトレント（B・C区）は98年度市教委調査区の南に連続する形で、延長は約55mである。この調査区で遺構検出につとめた結果、大形の掘立柱建物が検出されたC区については東西を拡張して南門と築地及び南門南側で宝幢遺構を、さらに南門下層で南門建設以前の寺域南限を区画する東西溝（溝53）を確認した。溝は地山に掘り込まれたものであるが、後述する中門と溝53の間は北西から南東方向の谷地形が入り込んでおり、南門を建設する段階でその谷を埋め立て整地していることが判明した。B区では整地土上面で平行する2条の南北溝を検出し、参道側溝（溝5～13）と考えた。また、築地と溝53の延長を確認するため、C区の西方と東方に設定したE・F区では築地の痕跡は確認できなかったものの、溝53の続きを確認できた。この時点で、溝53が84年度市教委調査で検出された南北溝及び92年度試掘調査で寺域西側で検出された南北溝と関連する可能性が考えられたため、溝53と南

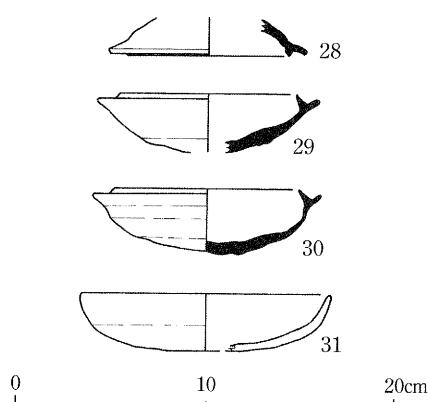
北溝が交差すると考えられる地点から北に延長した位置にD区を設定したが、中軸線に沿った区域より地山が深く、谷地形の埋積土と後世の耕作土の累重であることが判明し、溝等の遺構はなかった。このことから、寺地の西側には築地あるいは溝のような連続した区画施設はなかったとも考えられる。

先述の市教委調査区においては創建時に遡ると考えられる中門基壇と南面回廊が確認されたため、南面回廊の延長を確認することを目的に市教委調査区東側にA区を設定した。ここではB・C区に見られた南門建設時の整地土と同じ整地土の上面で奈良時代の瓦を主とする瓦溜が検出され、その整地土の下層で回廊基壇を確認した。

第2項 A～F区の基本層序（第9図）

中門以南、南門地区にかけての層序は新堂廃寺建立に伴う改変等でG区の層序とは大きく異なっている。98年度府教委調査の概要Ⅲで中門・南門間整地土と報告した層より上層の第1層から第5層については現代の盛土から中世耕作土なので説明を省略する。

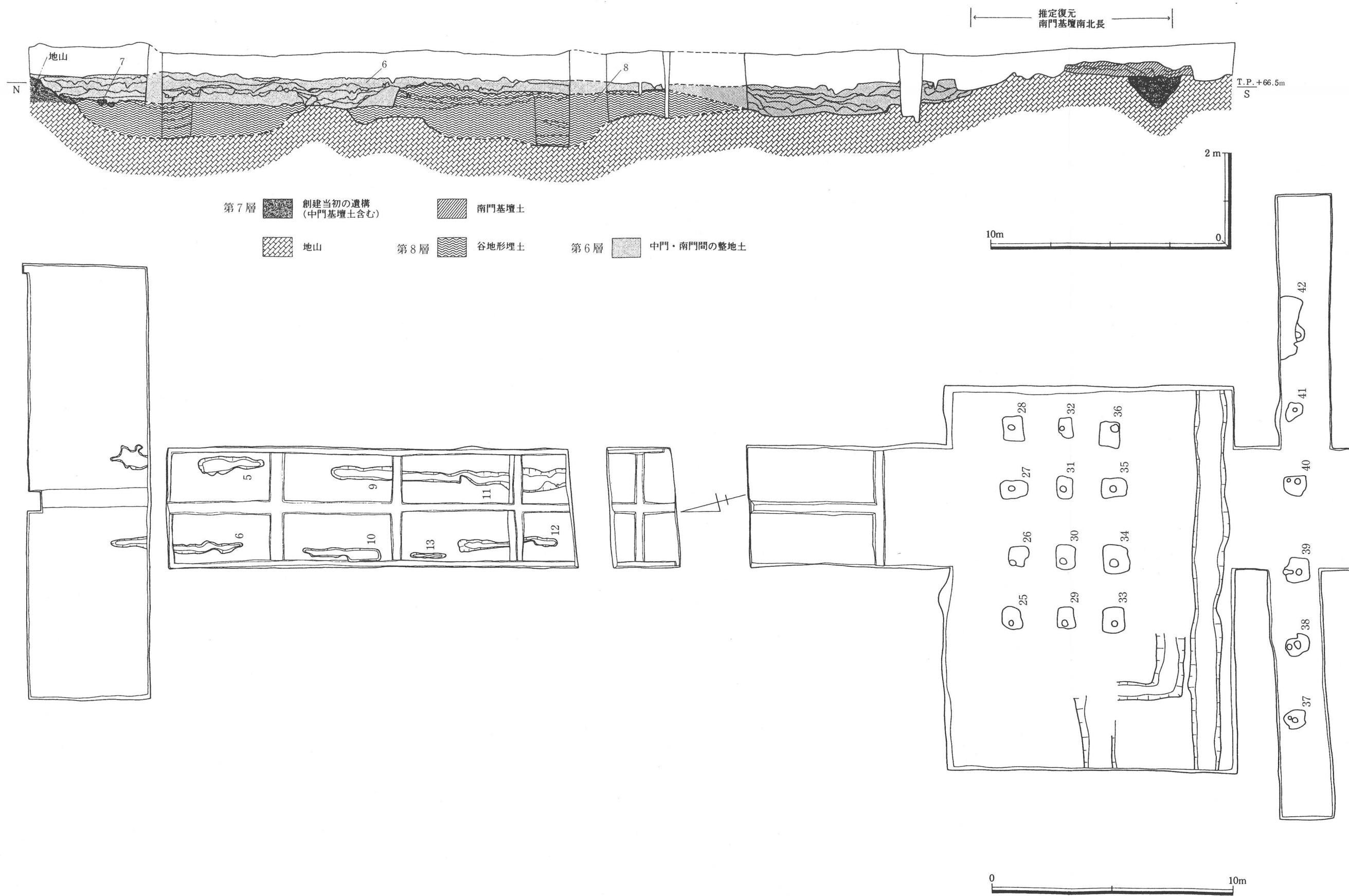
第6層 中南門間整地土（第8図・図版20） B区北寄りとC区北寄りではやや厚く、その間では比較的薄く積まれている。細分は可能であるが、基本的には灰色粘土・粘質土、黒褐色粘質土、黄褐色粘質土の順に積んでいる。中・南門間の谷地形は北肩から10m付近で一旦地山が高くなり、再度南に向かって落ち込み、南門付近で立ち上がる。北肩から15m付近でこの谷の埋積土が北に向かって0.4mほど斜めに落ち込む部分があり、中門付近の地山までT.P.+66.1m前後の平坦面を形成している。B区北半の整地土はこの段差を埋め立てるよう北側と南側から積まれているようである。C区北半ではT.P.+59.9m付近に地山の平坦面があり、その上をやはり北側と南側から埋め立てて整地している。北肩から15m以南は谷の埋積土上面がT.P.+66.3～66.5mほどあり、その上に整地土を積んでいる。98年度市教委調査区では、この層からかなり多量の瓦が出土している。時期は飛鳥～白鳳時代のものが大半を占めるため、整地の時期については白鳳時代の可能性が高いと考えていたが、本報告に向けて全ての遺物を整理した結果、B区北半で小片な



第8図 B区、整地土出土遺物
実測図（98021）

がら縄タタキ目を有する奈良時代の瓦片が確認されたことから奈良時代以降の整地であることが確認された。他に奈良時代の土師器の皿（31）、古墳時代後期の須恵器の杯蓋・杯身（28～30）が出土している。時期のわかる資料は少ないが、おおむね6～7世紀代のものと、少量ではあるが、8世紀代の遺物が含まれる。中に1点だけ瓦器の細片があるが混入と考えている。

第7層 創建時整地土 98年度市教委調査区の南半で確認した。谷埋積土である砂層上面に砂混り粘質土による整地を施したもので、中門基壇築成の基盤層を形成している。



第9図 A～C区、遺構全体図・断面図 (98021)

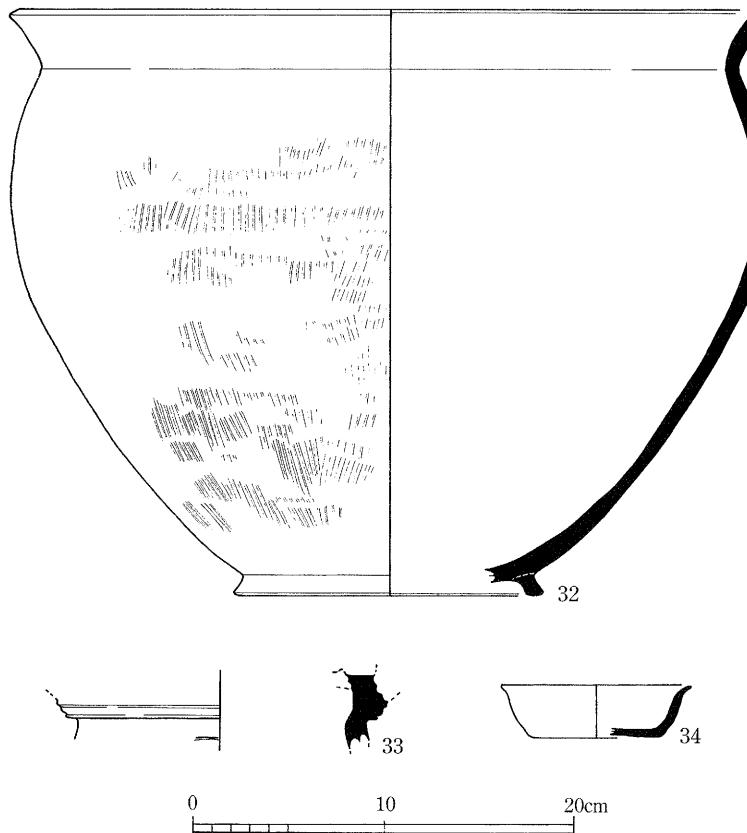
北肩から15m以南の谷埋積土上層が、植物遺体を含む軟弱な粘土であることを考慮すると、北肩から10mの段差以北の平坦面は、中門建設以前に谷の軟弱な粘土層を一定範囲除去し、下層の砂層を露出させるために人為的に行われた地業である可能性がある。この層の上面からは飛鳥～白鳳時代のものと考えられる瓦片が、層中からも瓦片や土師器、須恵器の細片が少量出土しているが、明確な時期のわかる資料はない。ただ、奈良時代に下るものはないといえる。

第8層 谷地形埋積土 谷の最下部までは確認できていないが、下層は砂と砂質土で、一定の流水堆積を示し、上層は禾本科の植物遺体を多く含む粘土層で、滯水した湿地の堆積を示す。ただ、創建時の中門以南が概要Ⅲの段階で考えていたようにその後もぬかるみのような状態であったかどうかは疑問が残る。北肩から15m付近の谷地形埋積土の段差による高低差を考えると、当然それ以北には湿地堆積が見られるはずであるがそれがない。創建時中門基壇の基盤面は谷地形埋積土下層の砂層上面の平坦面とほぼ同レベルであるから、奈良時代の整地直前に中門基壇もろとも湿地堆積を除去した可能性もあると考えられるが、そうだとするとそれ以南のわずかな距離の湿地堆積をなぜ除去しなかったのか理解に苦しむところである。中門建設とほぼ同時期に、寺域南限を区画する東西溝53やG区の南北溝67を開削し、あまり時を経ずに中門以南の湿地堆積を除去し、中門以南がある程度安定した状態になっていたと考えることも可能であると思われる。

第3項 A区（第9図）

南面回廊（図版6、7） この調査区では創建時の南面回廊基壇を検出した。基壇基部はT.P.+66.5m付近の緩やかに南に向かって傾斜する黄褐色粘質土の地山で、数層の粘質土、シルトを版築状に積み上げた後、削り出して成形したものと考えられる。残存高は最も残りのよいところで0.4mを測る。南側に幅0.7～1.0mの犬走りと考えられる平坦面が伴っており、犬走りと地山面の段差は0.12mほどである。地山は南に向かって傾斜するが、調査区内では雨落ち溝と考えられるような肩は検出していないため、自然排水と考えた。東に寄るほど基壇の残存状態はよくないが、中門基壇東辺から約18m付近で基壇土がとぎれる部分がある。この東側には南北方向にのびる比高差0.36mの地山を掘りこんだ段差があり、そこを埋め立てている土層が中門・南門間の整地土と同様であることから、ここを回廊の東南角と推定した。

瓦溜（第10図・図版7、20） 創建時回廊の南側は整地土によって埋め立てられている。その上面でおびただしい量の瓦溜を検出した。回廊倒壊に伴って転落したような状態ではなく、一定程度片づけられたような出土状態であったが、位置的に見て回廊所用瓦であろうと考えられる。軒瓦を見ると白鳳～奈良時代のものなどが混在しているが、丸・平瓦は奈良時代のものがやや多い。飛鳥時代の瓦はあまり含まれていないが、白鳳時代の丸・平瓦は若干含まれており、瓦の再利用が想定される。また、後述するようにこの瓦溜の特徴として、奈良時代の丸瓦の大半が無段式であるという点が挙げられる。このことから考えると、創建時の回廊が行基葺きであったものの差し替え瓦という可能性も考えられる。他に須恵器の甕（32）、杯身（34）、硯（33）が出土した。

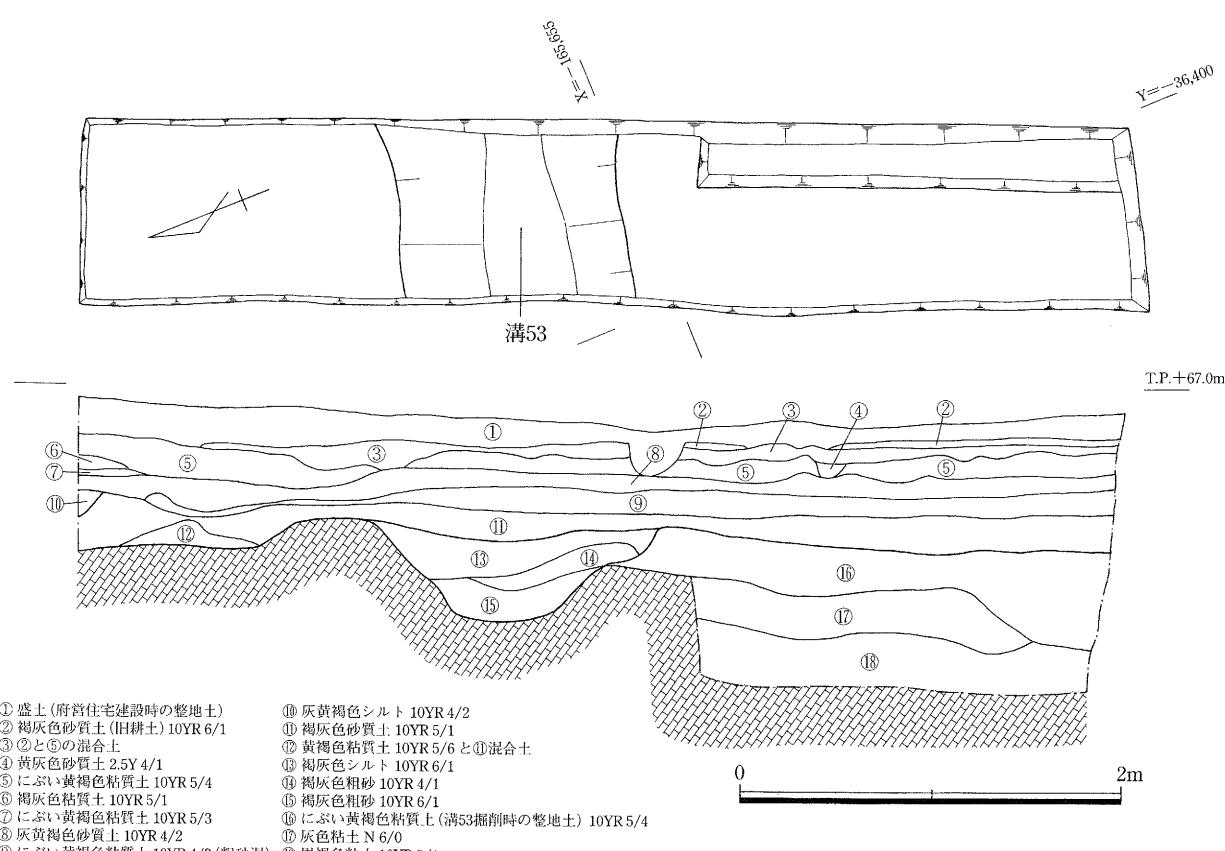


第10図 A区、瓦溜出土遺物実測図（98021）

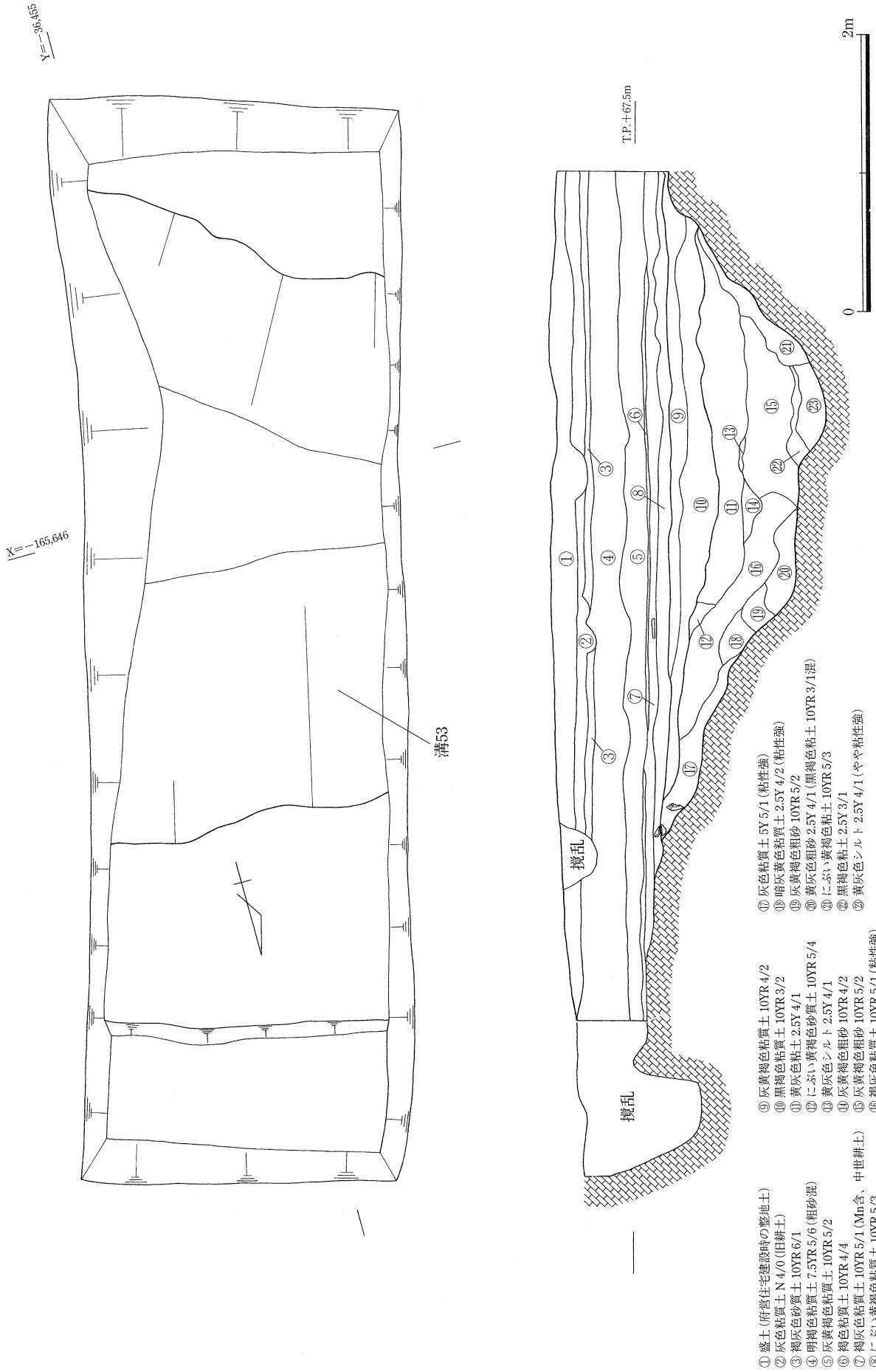
ただ、創建時の回廊が廃絶時まで存続していたのか、再建されたのかについては現段階の資料からは証明できない。

第4項 B・C・E・F区

第1項で述べた98年度市教委調査区の南側に続くトレンチ及びその東西に設定したトレンチである。中門下層で確認された埋没谷は一旦上がるが、またすぐに南へ落ち込み、C区まで続く。谷埋積土の上層は禾本科の植物遺体が多く含まれた粘土層で、本来は常に滯水した湿地であったことを示している。

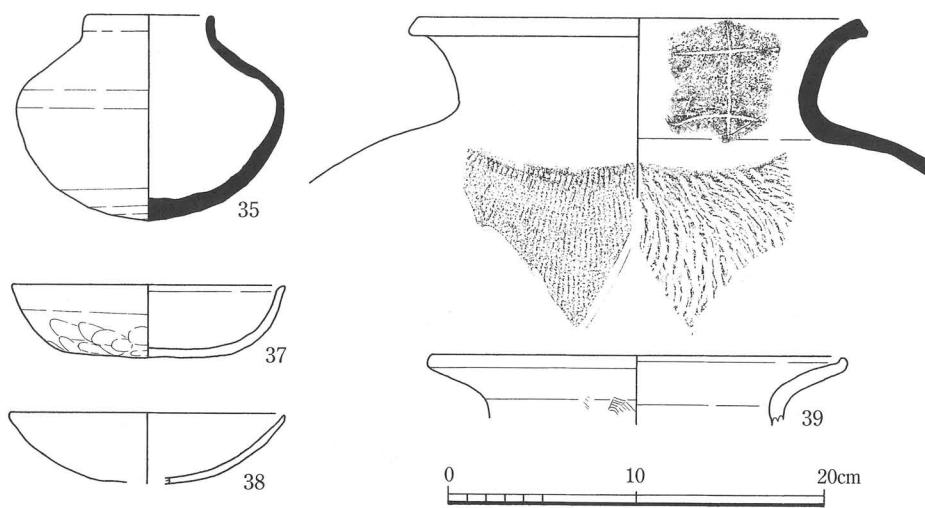


第11図 F区、遺構平面図・断面図（98021）



第12図 E区、遺構平面図・断面図 (98021)

溝53（第11～13図・付図1・図版8、9、21）埋没谷の南肩は北肩から36m付近で、以南はT.P.+67m前後の地山の平坦面が広がる。その位置で比較的規模の大きい東西方向の溝を検出した。C区では幅約2m、深さ約0.7mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土下層は粗砂とシルトの互層で流水と滯水の繰り返しを示すが、上層は人為的に埋められた土層と考えられる。E・F区でもこの溝の続きが確認されており、東西の延長は60m以上である。E区では幅5m以上、深さ1.2mを測り、F区では幅1.5m、深さ0.6mとなる。もともと南東方向に傾斜していた地形が後世の水田化に伴う段造成により削平された結果であろう。最下層から7世紀中頃に位置づけられる土師器杯（37、38）と須恵器無頸壺（35）が出土した。上層からは須恵器の甕（36）土師器の甕（39）が出土した。（39）は長胴な体部をもつものと思われる。また、埋没後の窪みと考え



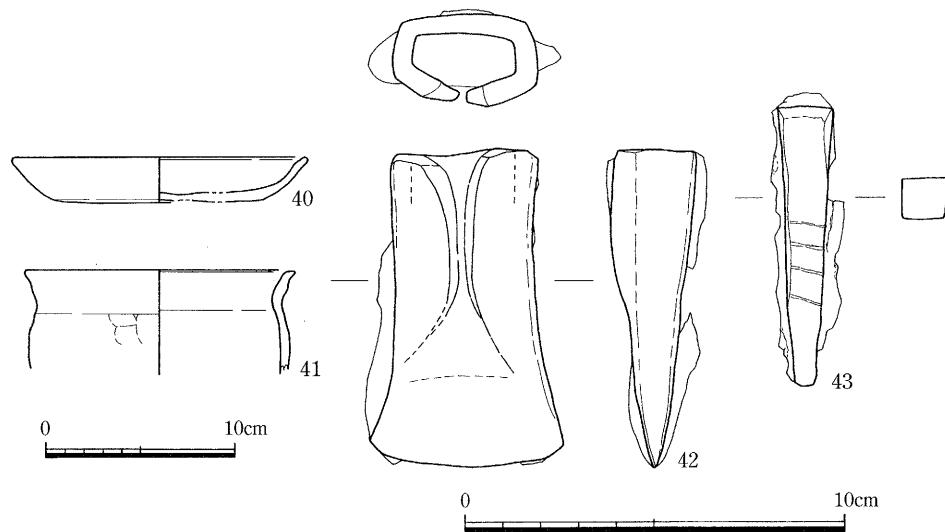
第13図 溝53出土遺物実測図（98021）

られる最上層からは奈良時代の瓦片が出土していることから、7世紀中頃以前を大きく降らない時期に開削され、あらかた埋没した後、奈良時代に整地して平坦面を造成したものであろう。

南門（第14図・付図1・図版10～12、20、35）溝53が埋没した後、この溝の上層を整地して南門が建設される。南門基壇は上面がかなり削平されている。門は掘立柱建物で、桁行3間、梁間2間の東西棟である。柱間寸法は桁行中央間が3.0m、両脇間が2.4m、梁行は2.1m等間で、それぞれ天平尺の10尺、8尺、7尺に復元される。柱穴は隅丸方形、長方形、不整四辺形など多様な平面形の掘方を有する。掘方は1辺が0.6～1.3mと不揃いであるが、柱痕跡から推定される柱径は25cm前後でほぼ一定している。中央間を構成する6本の柱穴には、ちょうど柱の下に当たる部分に鷗尾の破片や平瓦の破片を敷いている。礎盤あるいは根固めの機能を有するものと考えられ、柱間寸法の広い中央間の構造強化を図ったものと推定された。

基壇築成土は版築といえるほど強固なものではないが、地山由来の黄褐色粘質土と黒褐色粘質土が交互に積まれている。残存高は0.25mであるが、残された柱穴の深さからさらに0.5m以上の高さがあったものと推定される。基壇南西角で雨落ち溝55を確認したことにより、基壇規模は東西13.4m、南北8.2mと推定された。また、南西角付近からは多量の瓦が出土した。出土状態は丸・平瓦、熨斗瓦などが折り重なっており、屋根から転落した状況を示している。出土位置は軒の出に近いと思われ、南門倒壊以前に転落したと考えられる。出土した瓦のうち、川原寺式（II A 09

型式・溝52出土) の軒丸瓦が1点出土しているが、大多数は奈良時代のものである。出土した丸・平瓦、熨斗瓦はほぼプライマリーな状況と考えられるが、先のⅡ A09型式を除くと軒瓦の出土が見られない。また平瓦の凸面に朱線が残る資料が3点確認されたことにより、軒先に軒瓦が葺かれていた可能性も推測できる。しかし、中世の耕作に伴い整理された、出土位置から見て南門所用瓦の可能性が高いと思われる南門の北側で出土した多量の瓦の中にⅣ A12型式の軒丸瓦とⅣ B03型式の軒平瓦が含まれており、その資料を重視すれば、軒瓦が葺かれていた可能性もある。また、南面回廊と異なり丸瓦のほとんどが有段式であるといった特徴がある。他に、土師器の皿(40)、甕(41)、袋状鉄斧(42)、釘(43)が出土した。袋状鉄斧は刃部幅5.1cm、長さ8.4cmを測り、断面形がやや膨れた長方形の袋部を有する。釘は長さ7.8cmで断面は方形、頭部は半球状を呈する。木質の痕跡が見られる。

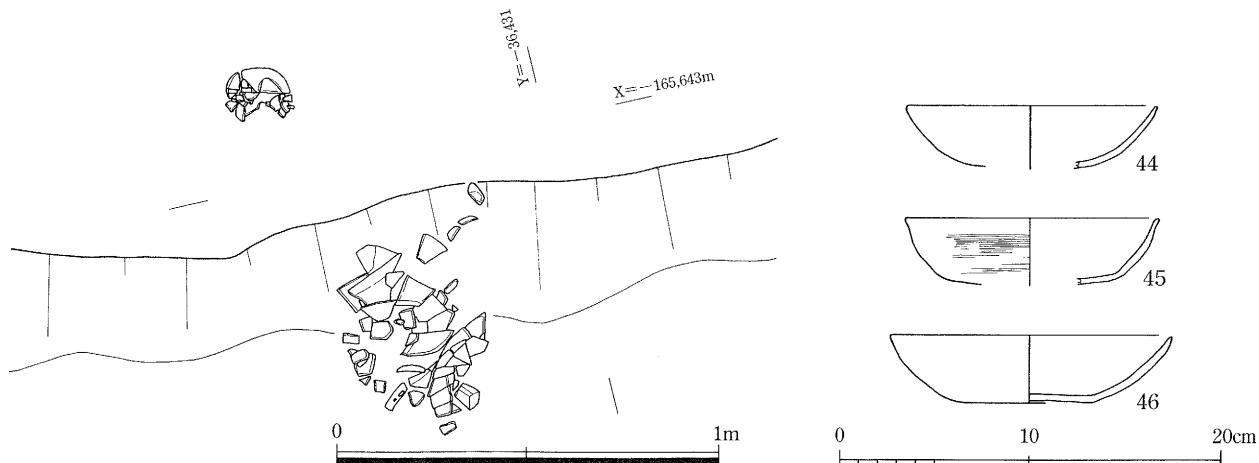


第14図 C区、南門瓦落ち出土遺物実測図（98021）

築地49（第15、16図・付図1・図版10、11、13、20） 南門基壇西辺中央に接続する築地基壇の一部を検出した。積み土は南門基壇と同様で、構築の同時性を示している。残存高は0.2mほどで、幅は2.1m程度と推定される。上面では柱穴等は検出されなかったため築垣ではなく築地塀であったと推定する。基壇土中から土師器杯3点（44～46）が重なった状態で出土した。出土状態から見て一種の地鎮と考えられる。なお、E区及びF区では築地は検出されなかった。削平のために失われたものか南門の東西の一部のみに築地があったのかは不明である。

宝幢遺構（付図1・図版10） 南門南側柱筋から約7.4m南で東西に並ぶ6基の掘立柱穴を検出した。柱間寸法は3.3m等間で、天平尺の11尺に復元できる。掘方は1辺0.5～0.9mの隅丸方形や不整形で、掘方埋土は南門ほど堅固ではない。遺存状態のよかつた4基の掘方には覆土の違う2個の柱痕跡を有する。これ以上東西に等間隔には延びないことが確認されていることから、宝幢柱穴であると考えられる。2個の柱痕跡は幢竿と添え柱であろう。黄褐色砂質～粘質土を覆土とする柱痕跡は径30cm前後、灰褐色粘質土を覆土とする柱痕跡は径20cm前後で揃っている。また、中央の柱間の中軸線上に径0.4m、深さ0.3mの小穴を検出した。他の柱穴とは規模が異なり、柱

痕跡も確認していないが、宝幢は本来四神（玄武、白虎、朱雀、青龍）、日像、月像、銅鳥の7本で構成されるものであることを考えると、この穴も宝幢遺構の一部である可能性がある。いずれの柱穴にも抜き取り穴や立て直しの痕跡はない。

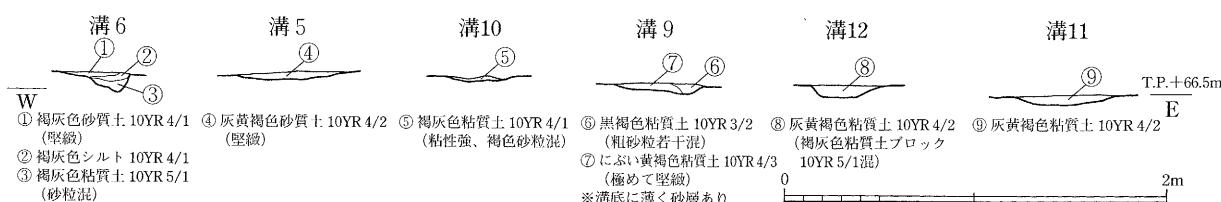


第15図 C区、築地49遺物出土状態 (98021)

第16図 C区、築地49出土遺物実測図 (98021)

溝5～13（参道側溝）（第9、17図・図版14） 南門以北は南門北側柱通りから約12.5mの間が中世の耕作により大きく削られているようである。調査区中央で南北に連なる瓦溜が検出されたが、これは耕作の障害となる瓦をあぜ道の下に集積したものと思われる。B区で、参道側溝（概要Ⅲ）とした2条の平行する南北溝5～13を検出した。ともに幅0.3～0.4m、深さ0.02～0.1mを測る浅いものである。両溝の間隔は心々で2.5～3.0mで、参道であれば8～10尺幅を意識している。溝の残りがきわめて浅いが、掘り込み面は第6層（整地土）からであり、中世の耕作による削平で奈良時代の旧地表面は失われているものと思われるため、浅いことに問題はないと考えられる。遺物整理の段階で両溝の出土遺物に瓦器が含まれていることを確認したが、上層からの遺構も同時に検出したため、混入の可能性もあるものと思われる。

なお、C区南端で南に下がる東西方向の落ち込みが検出されたが、南側のG区では地山面が一段南に向かって低くなっている。



第17図 B区、溝5・6・9～12(参道側溝)断面図 (98021)

溝52（第18図・付図1・図版11、20、35） C区南端で検出した東西溝で延長約17m以上を測る。東西ともに調査区外に延びる。幅約1.8m、深さはやや深い北側で0.3m、南側では0.2mを測る。断面形は浅い皿形で、北側は楕円形を呈している。埋土は1層で黄灰色砂質土である。埋土から須恵器の杯身（47、48）、土師器のミニチュア高杯（50）、鉄釘（51）が出土した。（49）は黒色土器の碗で、埋没の下限が10世紀代に求められる資料である。釘（51）は長さ16.3cmで断面は方形、

頭部はやや丸みを帯びる。木質の痕跡が見られる。

包含層（築地南辺付近）出土土器（第19図・図版20）

築地に近接する位置で土師器の甕（52、53）が出土した。いずれも奈良時代の資料である。

小結

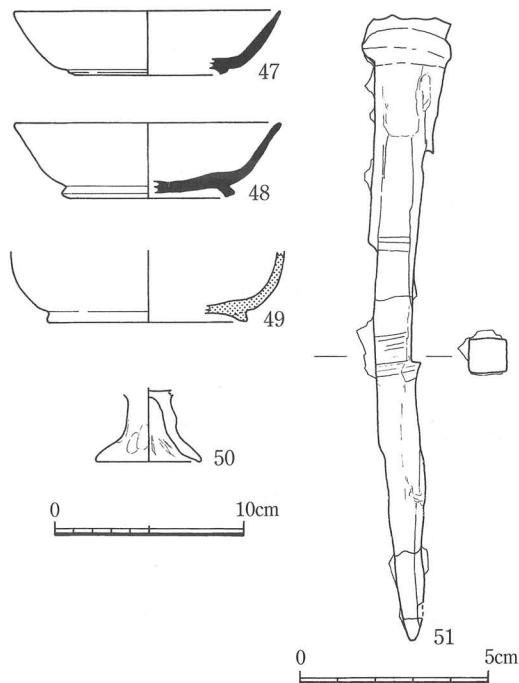
A～F区の確認調査では市教委の範囲確認調査とあわせて、新堂廃寺の主要伽藍を構成する中門、南面回廊、南門、築地、宝幢柱穴、参道などが確認され、また、寺院の造営過程や変遷についても一定の資料を提示できるようになるなど、大きな成果が上がった。しかし、未だ解明できない問題や今後の調査にゆだねなければならない問題も多々ある。以下に簡単にまとめておく。

① 回廊について

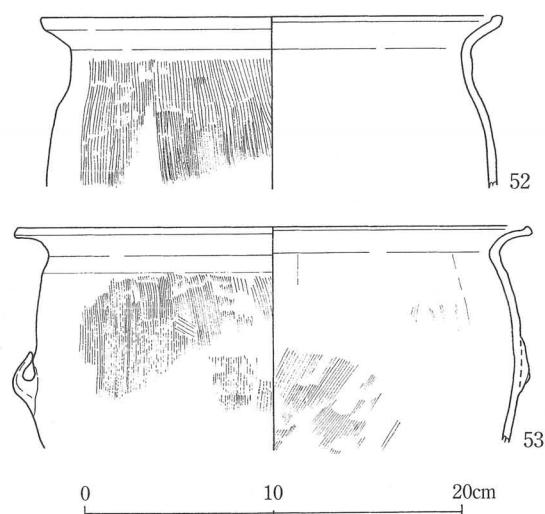
今回の調査では、中門基壇東辺から約18m東の位置に南東角を推定した。しかし、創建時の伽藍配置を四天王寺式と考えても、塔、金堂、塔の建物規模に比して東西回廊の間がかなり狭くなる。また、この付近は搅乱が著しく、追認が必要と考えられたため、00年度市教委調査ではA区北側に東西トレーニングを設定し、東面回廊の検出を試みた。註9文献では東面回廊基壇を検出したとされているが、平面図、断面図の掲載がなく、根拠は不明確である。現地で説明を受けた限りでは、「積み土」とされた土層は層厚10数cmの古代以前の整地土と考えられる土層で、A区で検出した回廊基壇築成土とは異なっている。回廊基壇西側の落ちとされた南北方向のわずかな段差については、断面を見る限り、上層は現代の床土と同じ形状で覆っていることから、古く考えても中世の耕作に伴う段差であろう。東側については搅乱が著しく、基壇の存在を示すようなものは認められない。したがって、東面回廊の位置を証明するデータはなく、回廊の東西幅は未だ確定していない状況であるといえる。

② 溝53の機能と時期について

この溝の機能については概報Ⅲで、創建段階で南門建設も視野に入れた計画が決定されており、その計画線として寺域の南限を区画し、かつ寺域北西からの雨水を排水する機能を有していたも



第18図 C区、溝52出土遺物
実測図（98021）



第19図 C区、包含層（築地南辺付近）
出土遺物実測図（98021）

のと考えた。この溝に排水機能を持たせた目的として、後に中門以南の湿地を整地するための準備工として寺域の地盤を安定させる意味があった。この考えは基本的に修正の必要はない。

溝の開削と埋没時期については埋没時期を7世紀中葉に求めているが、遺物整理の結果を踏まえて修正しておく。覆土中・下層の遺物は7世紀中頃までで収まるものであり、開削時期はそれ以前に求めることができるが、最上層からは繩タタキ目を有する奈良時代の瓦片がかなりの点数出土している。この層は南門基壇築成土とは異なるものであるが、溝53埋没後の窪みを整地した土層と考えられる。南門建設の時期を奈良時代に求める所以である。

③ 南門の建設時期について

概報Ⅲでは、1. 参道下層整地土（6層）の出土遺物が7世紀後葉までのものであること、2. 溝53出土遺物が7世紀中葉までのものであること、3. 築地基壇出土の地鎮土器の年代観が7世紀末葉であること、4. 南門柱穴の礎盤に転用された鷦尾が7世紀中葉のものであること、5. 南門南側で検出した東西溝52（南辺溝）から軒丸瓦ⅡA09型式が出土したこと、などの根拠を挙げて、南門建設時期について7世紀末葉以後大きく隔たらない時期としているが、遺物整理の結果修正を要するであろうとの予察も示している。

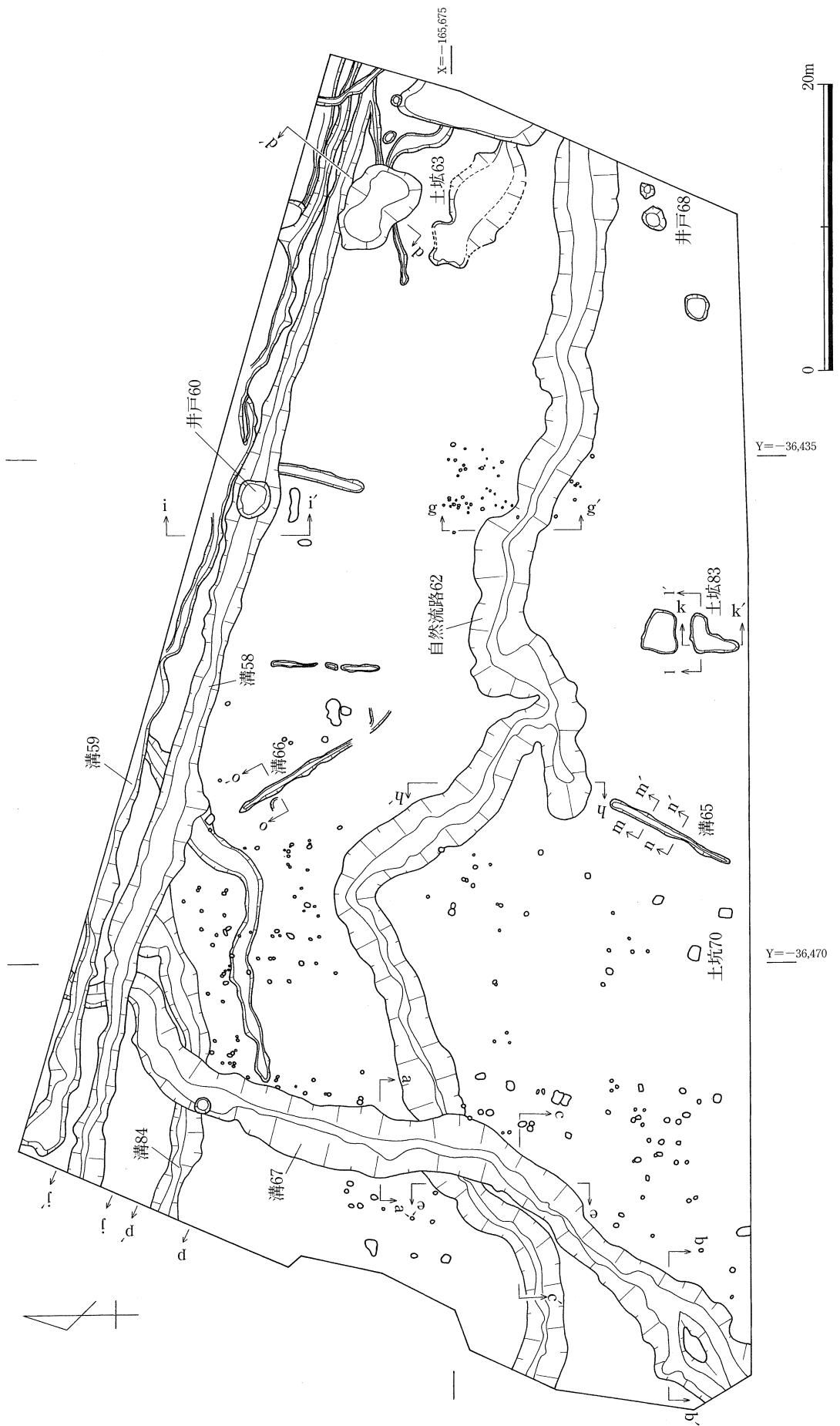
本報告作成にあたって全ての遺物を観察した結果、1. 6層出土遺物に少量ではあるが繩タタキ目を有する奈良時代の平瓦が含まれている、2. 前述のごとく溝53上層の整地土にも奈良時代の瓦が含まれている、3. 接合・実測の結果、築地地鎮土器の年代は8世紀前半と考えられる、4. 南門柱穴の掘方埋土出土遺物に軒平瓦ⅣB03型式を含む奈良時代の瓦片が含まれている、等のことが明らかになったため、南門建設時期は奈良時代初頭頃に位置づけるのが妥当と考えられる。

なお、南門の廃絶時期については、差し替え瓦が見られないと掘立柱建物であることを理由に8世紀末葉頃までと推定していた。周辺の遺構出土の遺物を整理した結果、溝52からは10世紀ごろの黒色土器が出土しているが、奈良時代末から平安時代初頭の遺物は見あたらず、廃絶時期は未だ推定の域を出ていないといえる。

④ 宝幢遺構について

宝幢遺構と推定した東西の柱列については、掘方埋土や柱痕跡覆土が南門のそれとは異なっており、構築に時間差があることは確実であるが、掘方埋土には南門基壇築成に伴う整地土と同じ土が含まれていることから大きな隔たりはないと考えられる。層位、遺物等から前後関係を判断することはできない。抜き取り穴がないことから概報Ⅲでは一種の柵である可能性も考慮している。構築が南門建築以前であれば仮の区画施設としての柵の可能性も考えられる。南門建築以後であれば、南門基壇裾からほんの数歩のところに柵を設ける必然性はないと思われ、宝幢の可能性が高くなる。ここでは、①基本的に2本の柱痕跡を有すること、②構築時期が南門建設に近接していることから、前であっても後であっても仮の区画施設は必要ないと考えられること、③数が6ないし7本で、南門前面だけで収まる等の理由から、宝幢である可能性がより高いものとし

第20図 G区、遺構全體図 (98021)



ておく。幢竿を建て直した痕跡がないため、使用は一度限りであった可能性が高く、南門南側に宝幢を設ける行事としては落慶法要などが考えられる。

第5項 G区（第20図・図版15）

C区の宝幢遺構より南では寺院に関連すると考えられる建物等は全く検出されていない。井戸土坑、溝、自然流路等が検出されたが、寺院に関連すると考えられる遺構は東西溝と南北溝があるだけである。

層序（第21、22図・図版18）

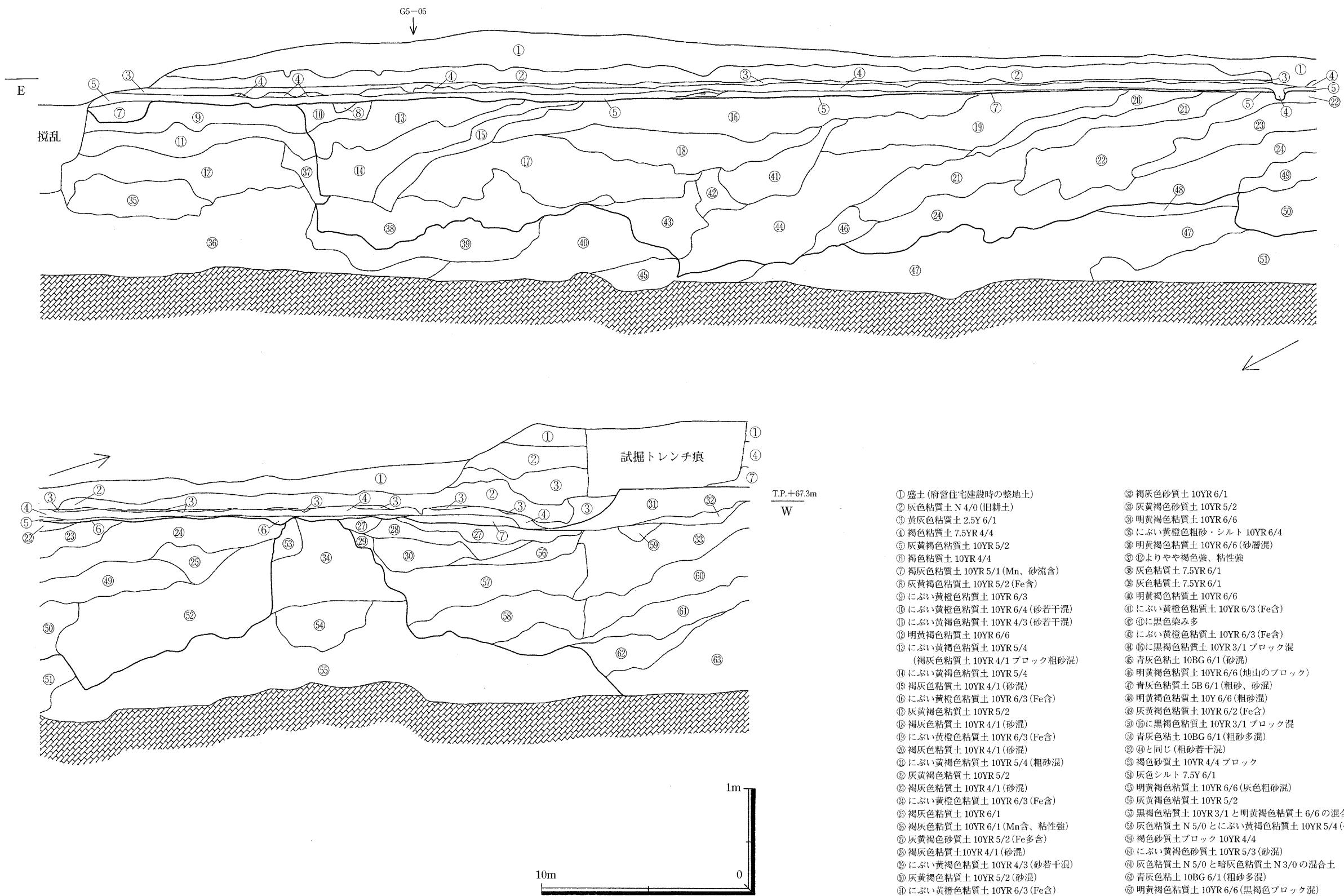
調査区の現況地形は北西から南東方向に傾斜しており、地表面の高低差は調査区北東隅と南東隅では2.5m近くある。遺構覆土を除く層序を以下に説明する。

- 1 1960年の府営住宅建設時の造成盛土 厚さは部分的に1mを越えるところもある。
- 2 灰色粘質土（N 4／0） 府営住宅建設以前の旧耕土
- 3 黄灰色粘質土（2.5Y 6／1） 床土
- 4 褐色粘質土（7.5Y R 4／4） 近世床土
- 5 4+黄褐色粘質土ブロック 近世耕土
- 6 褐灰色粘質土（10Y R 5／1） 中世耕作土
- 7 褐灰色粘質土（10Y R 4／1） 中世耕作土 マンガンノジュールを多量に含む。
- 8 灰黄褐色粘質土（10Y R 4／2） 中世耕作土の一部を構成するが、ラミナが見られることから流水堆積である。
- 9 灰黄褐色シルト（10Y R 5／2） 中世耕作土 耕地整備のための整地土の可能性がある。
- 10 褐灰色粘質土（10Y R 5／1） 整地土 地山の黄褐色粘質土ブロックを多く含む。
- 11 にぶい黄褐色粘質土（10Y R 5／4） 中世整地土 46の地山に由来する客土。13世紀代の遺物を含む。
- 38 にぶい黄褐色粘質土（10Y R 5／4） 地山
- 46 黄褐色粘質土（10Y R 5／6） 地山

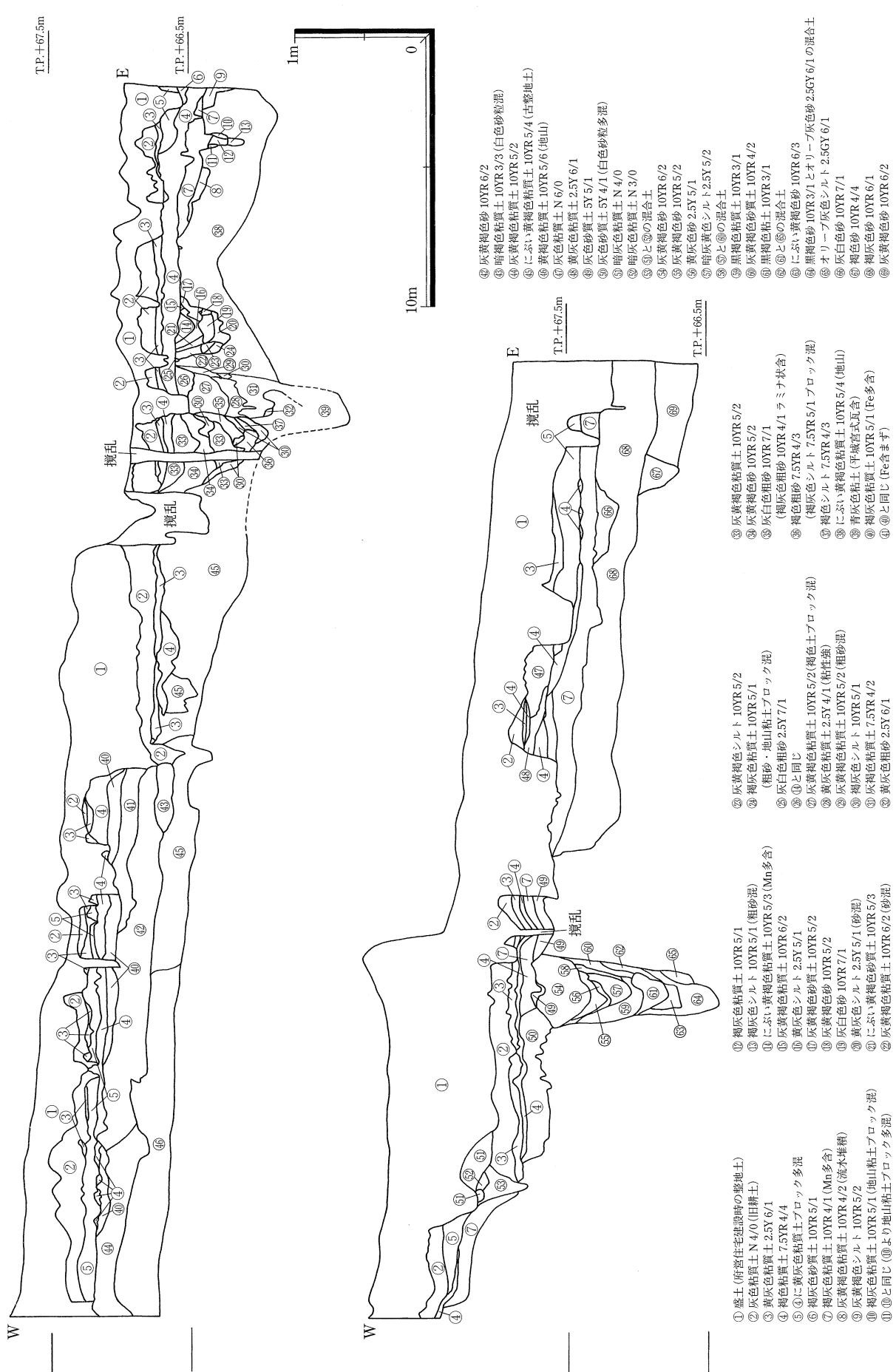
なお、G区南端西よりでは南に落ちる大きな谷が検出されており、45層に続く大規模な整地が施されている。

遺構と遺物

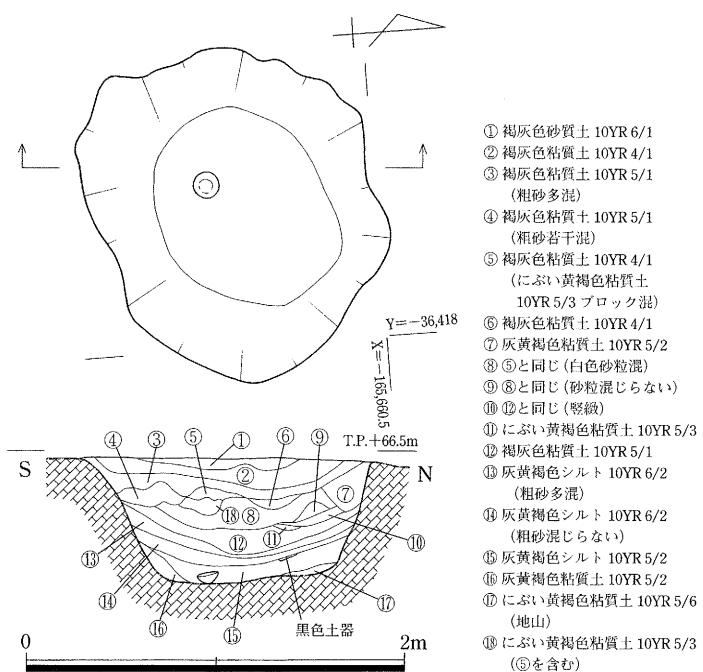
井戸60 E 6-6-G 5-g 4区、東西溝58の覆土掘削中に検出した。平面形は2.6×2.1mの楕円形で、正確な掘り込み面は不明であるが、深さは1.1m以上と推定され、断面形は逆台形を呈する。覆土は砂質土であった。完形に近い奈良時代の軒平瓦など瓦類が比較的多量に出土したことから寺院廃絶以降のものと思われるが、明確な時期を示す土器は出土していない。



第21図 G区、南壁断面図 (98021)



第22図 G区、北壁断面図 (98021)

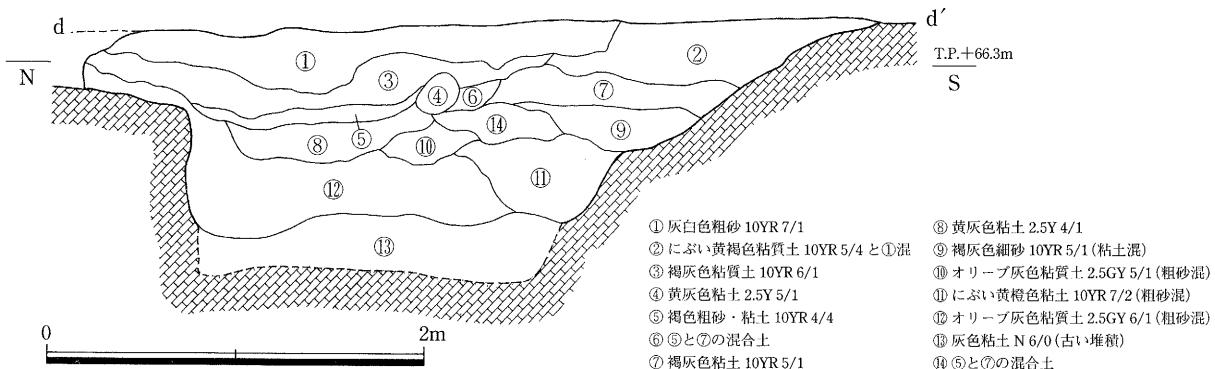


第23図 G区、井戸68平面図・断面図 (98021)

井戸68 (第23図・図版15) E 6 -

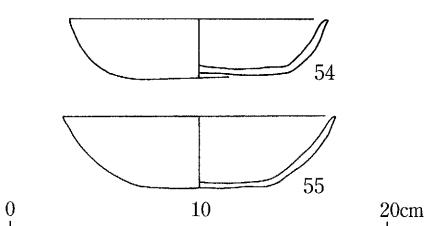
6 - G 5 - j 2区で検出した。平面形は 1.8×1.5 mの不整円形で、深さ0.7mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は18層に細分できる。下層から黒色土器が出土した。

土坑63 (第24図) E 6 - 6 - G 5 - h 2区で検出した。平面形は 7.1×4.4 mの瓢形に近い長円形で、深さ1.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は14層に分層できるが、最上層は東西溝58のオーバーフローの影響と考えられる砂層である。奈良時代の瓦片が出土したが、明確な時期、性格は不明である。



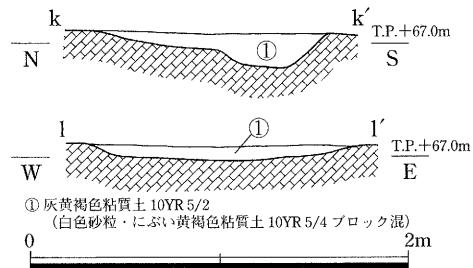
第24図 G区、土坑63断面図 (98021)

土坑70 (第25、26図・図版16、20) E 6 - 6 - G 5 - j 7区で検出した。平面形は 1.1×0.9 mの隅丸長方形で深さ0.4mを測り、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、四隅に柱穴がある。柱穴は径0.12~0.14mの円形の掘方を有し、柱痕跡から推定される柱径は6cm程度である。覆土は5層に分層できる。底面に接して土師器杯2点(54、55)が重なった状態で出土した。南側の壁がやや崩れたような形状を示しており、4層はその流入土と考えられる。2・3層は人為的な埋土と考えられる。掘り込みが湧水層まで達していないこと、平面形が長方形であることなどから、井戸ではなく墓であると推定する。4層の流入状態から一定程度の期間棺のような空間があったものと推測される。遺物の時期から10世紀代に属すると考えられる。

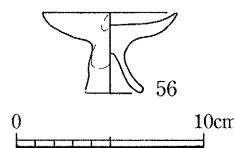


第25図 G区、土坑70出土遺物
実測図 (98021)

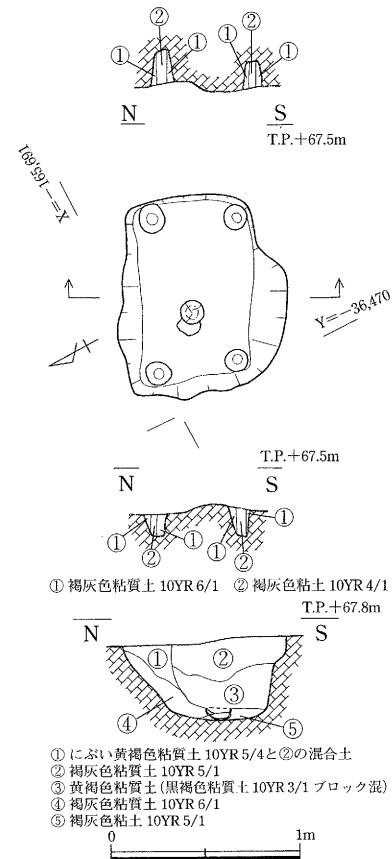
土坑83（第27、28図・図版20） E 6 - 6 - G 5 - g 4 区で検出した。平面形は4.0×4.2mの逆L字形で、2つの土坑が重複しているように見えるが、覆土は1層である。深さは0.15～0.4mで浅い皿状である。土師器のミニチュア高杯（56）が出土した。



第27図 G区、土坑83断面図
(98021)

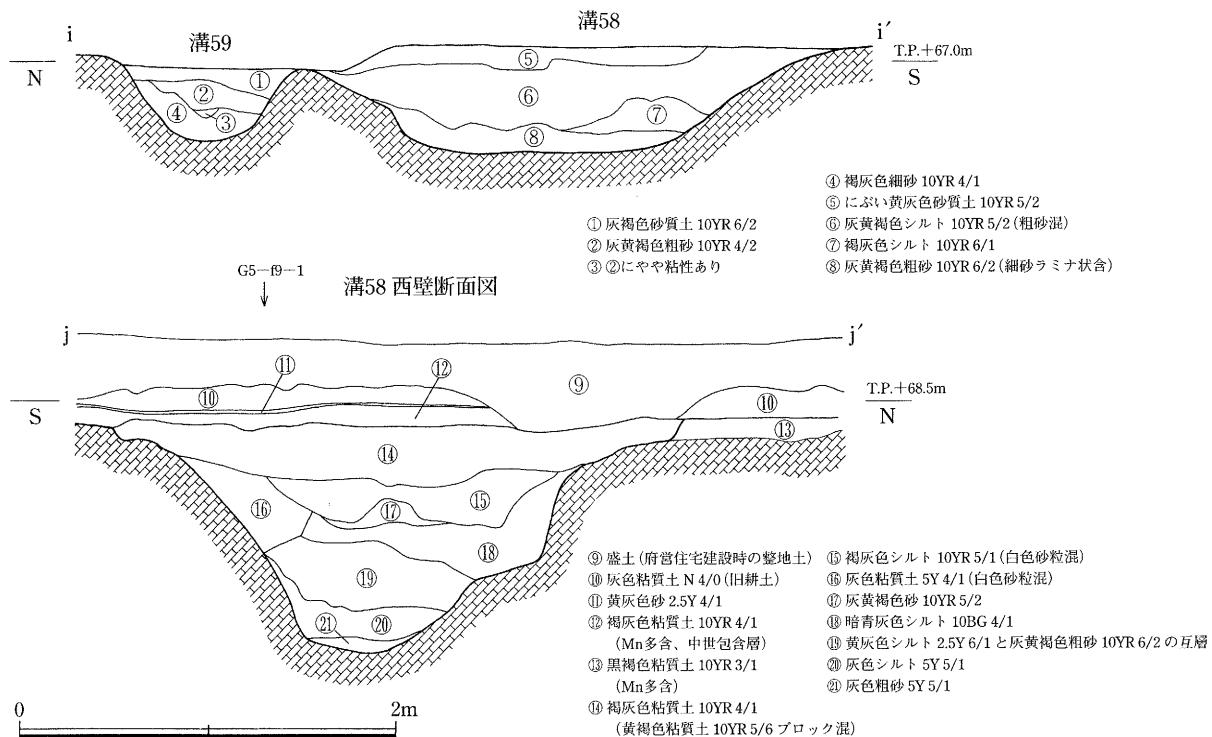


第28図
G区、土坑83出土遺物
実測図 (98021)

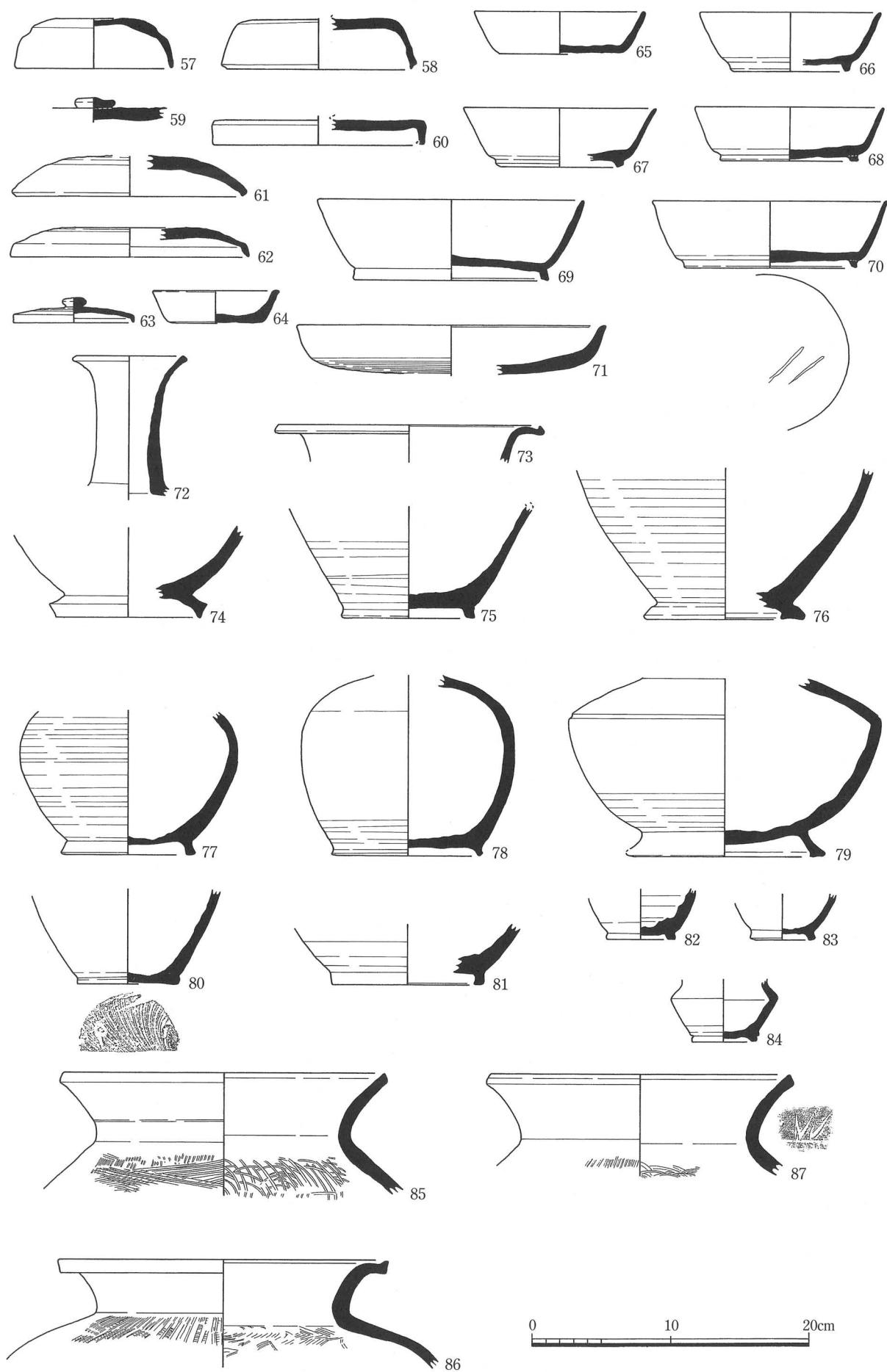


第26図 G区、土坑70
平面図・断面図 (98021)

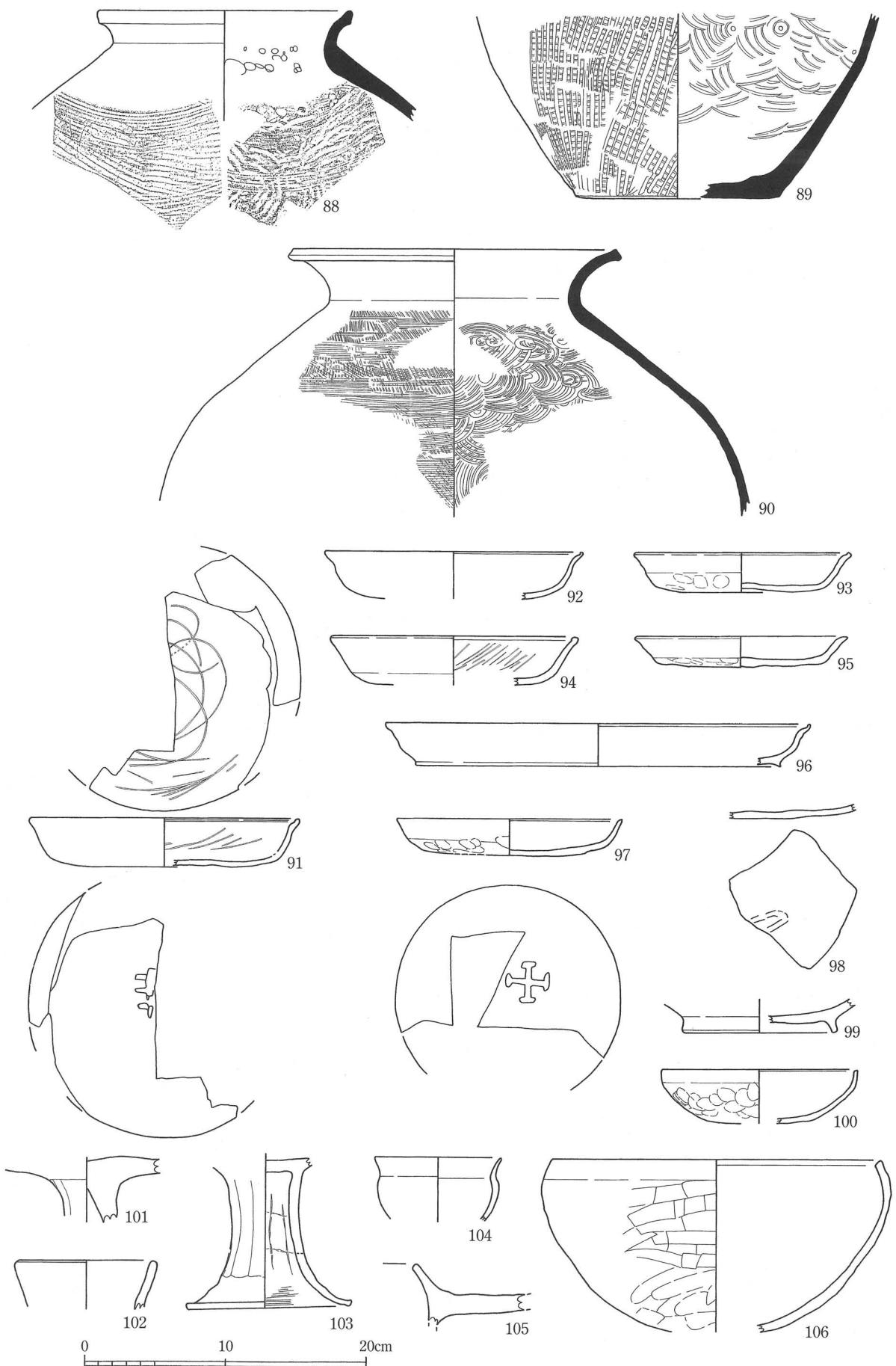
東西溝58・59（第29～33図・図版16、21～24）溝58はE 6 - 6 - G 5 - g 3 ~ f 9 区で検出した。主軸方向はE 17° Nで、新堂廃寺の主軸に直行してほぼ一直線に伸びる溝である。幅1.5～3.0m、深さ0.6～1.2mを測り、断面形は逆台形ないしV字形を呈する。検出延長は約80mある。覆土は8層に分層できるが、粗砂とシルト・粘質土の互層である。



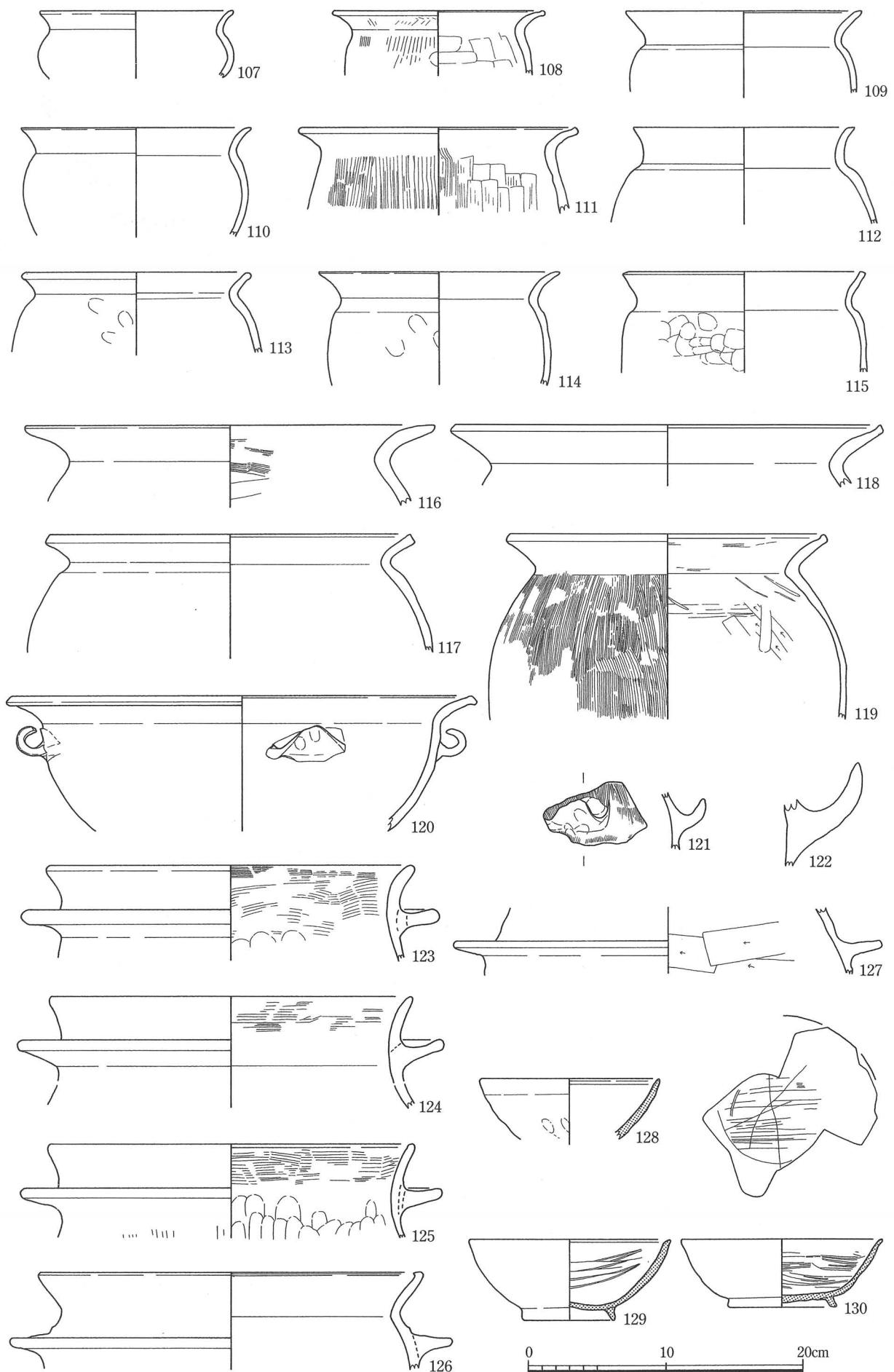
第29図 G区、溝58・59断面図 (98021)



第30図 G区、溝58出土遺物実測図・1 (98021)



第31図 G区、溝58出土遺物実測図・2 (98021)



第32図 G区、溝58出土遺物実測図・3 (98021)

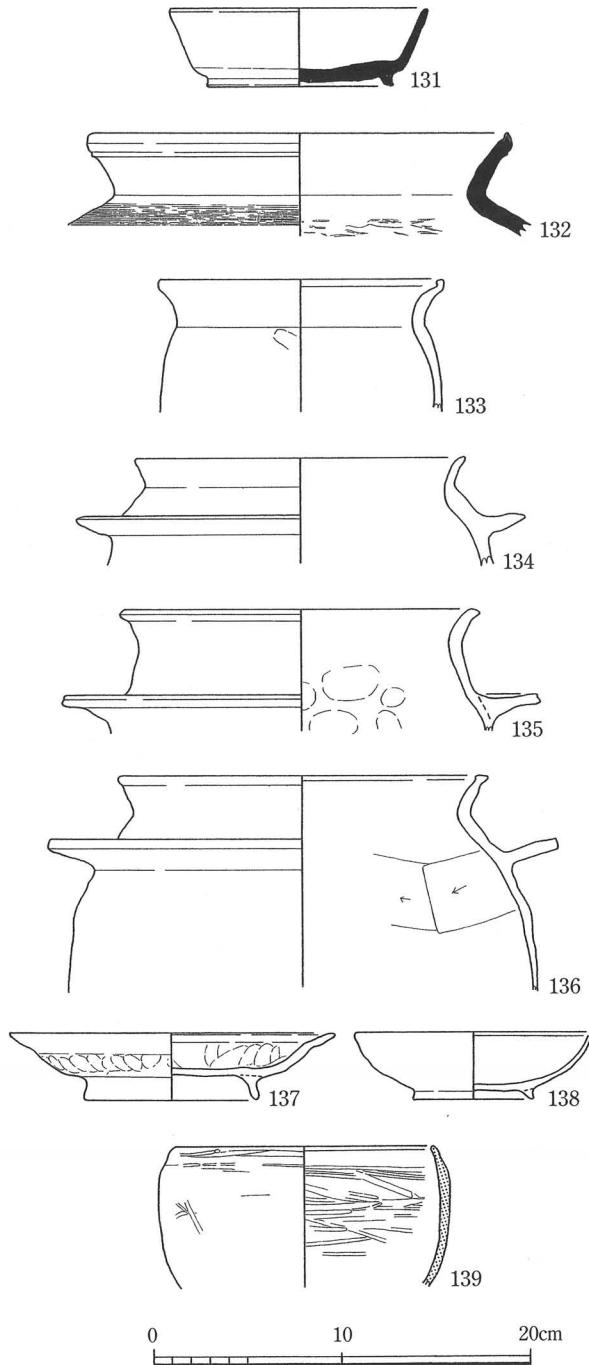
り、流水と滯水の繰り返しを示している。粗砂層には地山の粘質土に由来する偽礫が多く含まれており、水流の強さを物語っている。多量の瓦、土師器、須恵器、黒色土器等が出土した。北側に平行して規模の小さい東西溝59があるが、溝58との新旧関係は明確ではない。溝59は幅1.0~2.5m、深さ0.4mを測り、断面形はU字形を呈する。出土遺物は溝58と同様である。

出土遺物から見てこれらの溝は寺院に関する構造と考えられる。埋没時期は平安時代に求められる。開削時期は確実ではないが、南門整備前に寺の南限を区画し、寺域西側からの排水機能を持っていたと考えられる東西溝53が埋め立て整地されており、その代替施設として開削された可能性は充分考えられる。溝58覆土からは須恵器(57~90)、土師器(91~127)が多量に出土し、黒色土器(128~130)も出土した。土師器の皿(91、97、98)は底部に墨書が記されている。溝59は溝58に比べ遺物の出土量が少ないが、須恵器(131、132)、土師器(133~138)とともに黒色土器碗(139)も出土した。

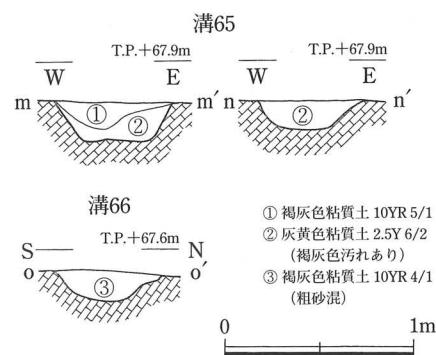
溝65(第34、35図・図版24) E 6-6-

G 5-j 6・7区で検出した、主軸方向はN21°Eで、ほぼ直線に延びる細い溝である。幅0.6~1.0m、深さ0.15~0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。検出延長は約9mである。覆土は1ないし2層で、土師器高壇の脚部(140)が出土した。性格は不明である。

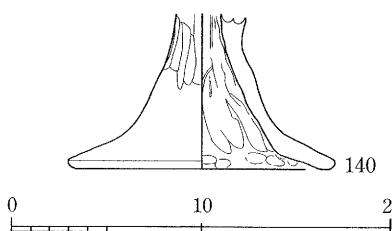
溝66(第34、36図・図版24) E 6-6-G 5-j-h区で検出した。主軸方向はN31°Wでほぼ直線に延びる細い溝である。幅0.3~1.0m、深さ0.15mを測り、断面形は逆台形を呈する。検出延長は約12mである。



第33図 G区、溝59出土遺物実測図 (98021)



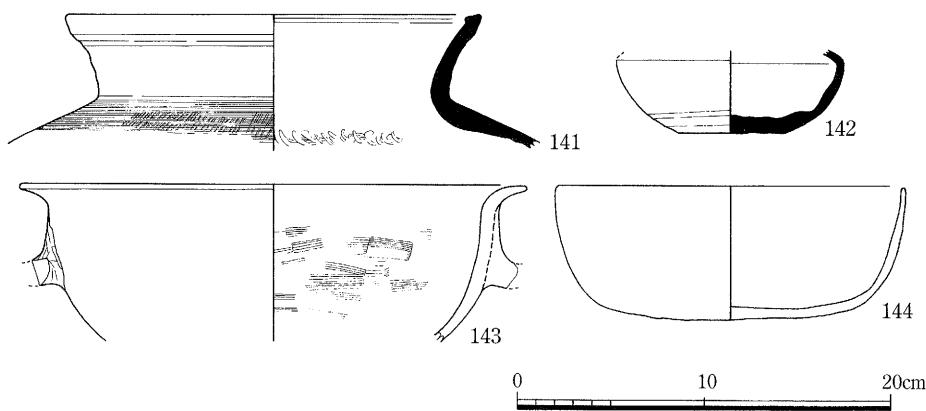
第34図 G区、溝65・66断面図 (98021)



第35図 G区、溝65出土遺物
実測図 (98021)

覆土は1層で、若干の土師器（143、144）、須恵器（141、142）が出土した。性格は不明である。

溝65・66ともに遺物の時期は飛鳥時代で収まるもので、新堂廃寺創建直前までの遺構と考えられる。遺物は出土していないものの、これらの小溝と同様の遺構は他にもあった。



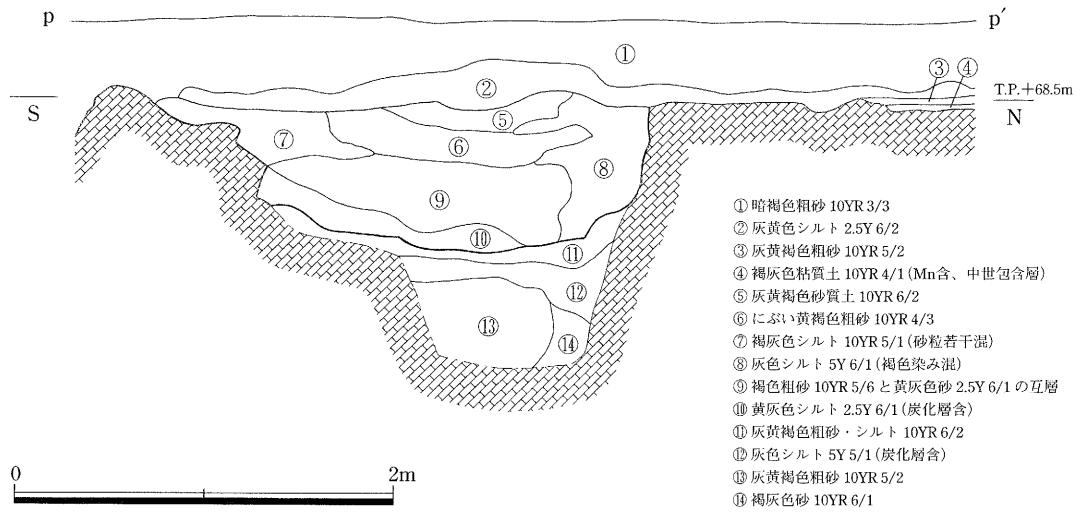
第36図 G区、溝66出土遺物実測図 (98021)

溝67（第38～43図・図版17、24～30） E 6-6-G 5-f 8-j 10区にかけて検出した、北北東から南南西に向かって蛇行しながら流れる溝である。幅2.0～5.0m、深さ1.2～1.8mを測り、断面形は逆台形ないしV字形を呈する。覆土は断面の位置によって複雑な堆積状況を示すが、最下層には粗砂が堆積しており、開削当初はかなり強い流水があったものと思われる。覆土から多量の瓦、須恵器（145～197）、土師器（198～243）、製塩土器（244～249）、轍の羽口（250）が出土した。（187）は須恵器の甕の体部片を硯として転用したものである。土師器皿（198）の底部には「寺」の墨書が記されていた。

この溝は重複関係から前述の東西溝58・59よりも古いことが明らかで、出土遺物も飛鳥時代のものを中心に奈良時代までの時期で収まることから、寺創建時に存在していた可能性がある。

溝84（第37図・図版17） E 6-6-G 5-f 7-g 9区にかけて検出した、北東から西に向かって弧状に流れる溝である。幅1.5～2.5m、深さ1.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は14層に分層できる。粗砂、砂質土、シルトが交互に堆積しており、基本的に流水による堆積である。断面の形状等から人工の溝と考えられるが、遺物が出土していないことから自然流路の可能性もある。時期はわからないが、層位的には溝67よりも古い。

自然流路62（第44、45図・図版17、18、30） E 6-6-G 5-h 2-i 10区にかけて蛇行しながらほぼ東西に流れる。調査区中央で大きく蛇行する部分がある。幅3.0～4.8m、深さ1.9～2.3mを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。覆土は粗砂、砂質土、シルトの互層で、流水堆

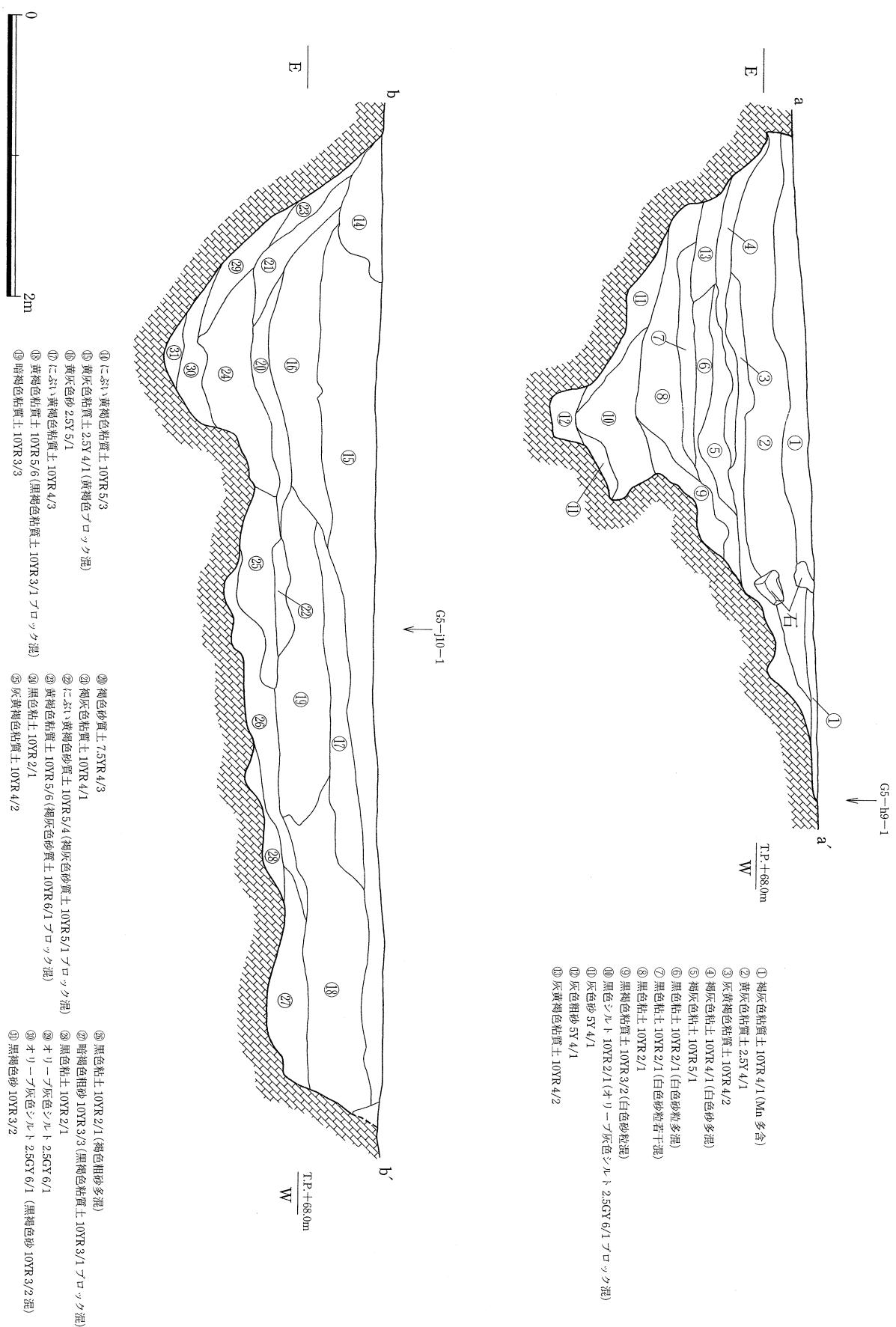


第37図 G区、溝84断面図 (98021)

積を示す。幅に比して深い浸食の鋭さは、きわめて短期間の流路であったことを示している。縄紋時代晚期の甕 (251)、弥生時代中期の土器片 (252、253) やサヌカイト製の石器などが出土した。

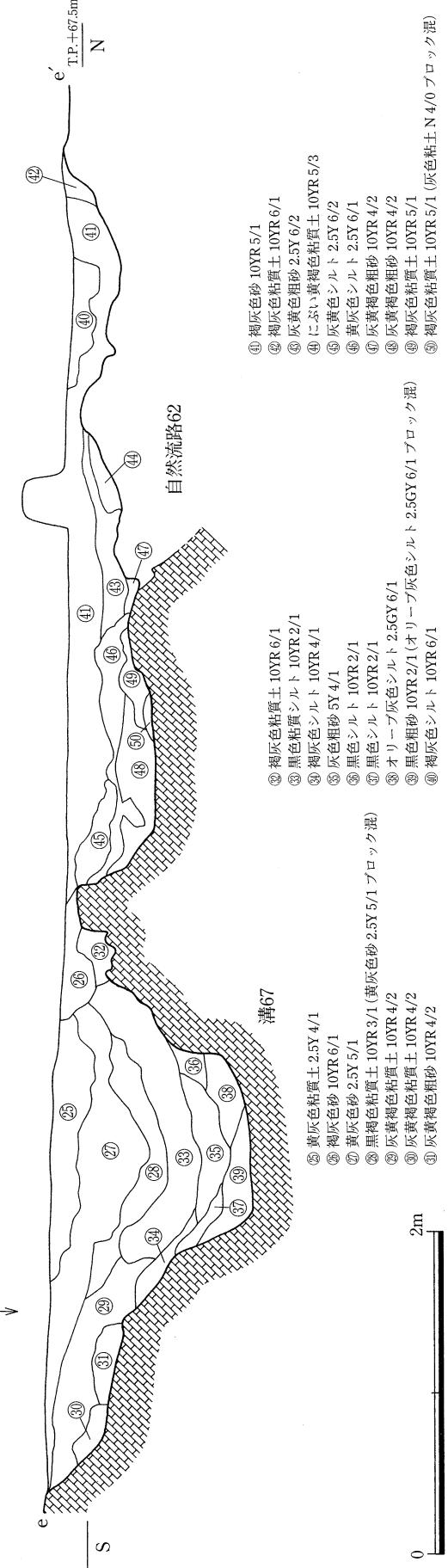
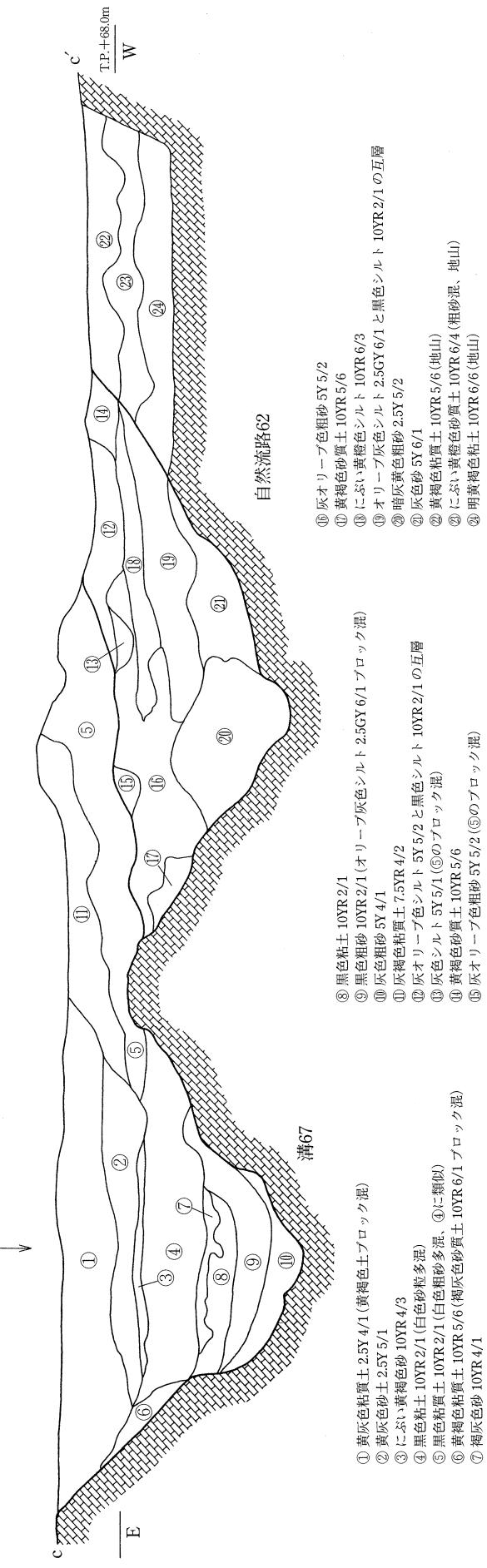
硯・漆容器 (第46図・図版30、31、35) (254) は須恵器の硯で蹄脚円面硯になるものと思われる。(255~257) は内面に漆が付着している。(258) は付着物が淡い褐色を呈しており、光沢もないことから、漆である可能性もある。

石製品・土製品 (第47~51図・図版31~34) 包含層・自然流路62から多量の石製品が出土した。(259) は石製の巡方で、縦3cm、横3.8cm、厚み0.6cmを測る。4カ所のくぐり穴を有する。(260) は、石製穂積み具片である。(261、262) は一列三体二段の六尊連立壇仏になるものと考えられ、新堂廃寺からは本型式のみの出土がみられる。(263) は螺髪で、2次的に火熱を受けている。(264) は半球形の有孔土製品であるが、用途は不明である。(265) は土製の舟形模造品かと思われる。(266) は須恵器の甕の体部を円盤状に打ち欠いたものである。(267) は須恵質で色調は灰白色を呈し、胎土は精良で焼成は堅緻である。残存高5.0cm、最大径9.0cmを測る。上部が一段くびれており、その部分の高さは1.5cmである。全体の高さは2寸、上部の高さは5分で、最大径3寸に復元できる。中央に方形の釘穴が抜けている。下部にはヘラ押しであたかも蓮華の蕾のような紋様を表している。藤澤一夫氏より扉板に装飾として打ち付ける饅頭金物形の土製品であろうとの御教示を得た。また、富山県大門町小杉流通団地No.16遺跡出土の土製錘と報告されているものは花弁のような紋様を刻んだ点や中心に孔が穿たれている点など類似点が多い。(註10・11)(268) は縄紋時代草創期の有舌尖頭器である。(269) は縄紋時代の石匙、(274、275) は石鎌である。(270~273) は弥生時代の石鎌である。(276、278) は不定形刃器、(277) は石槍の未製品

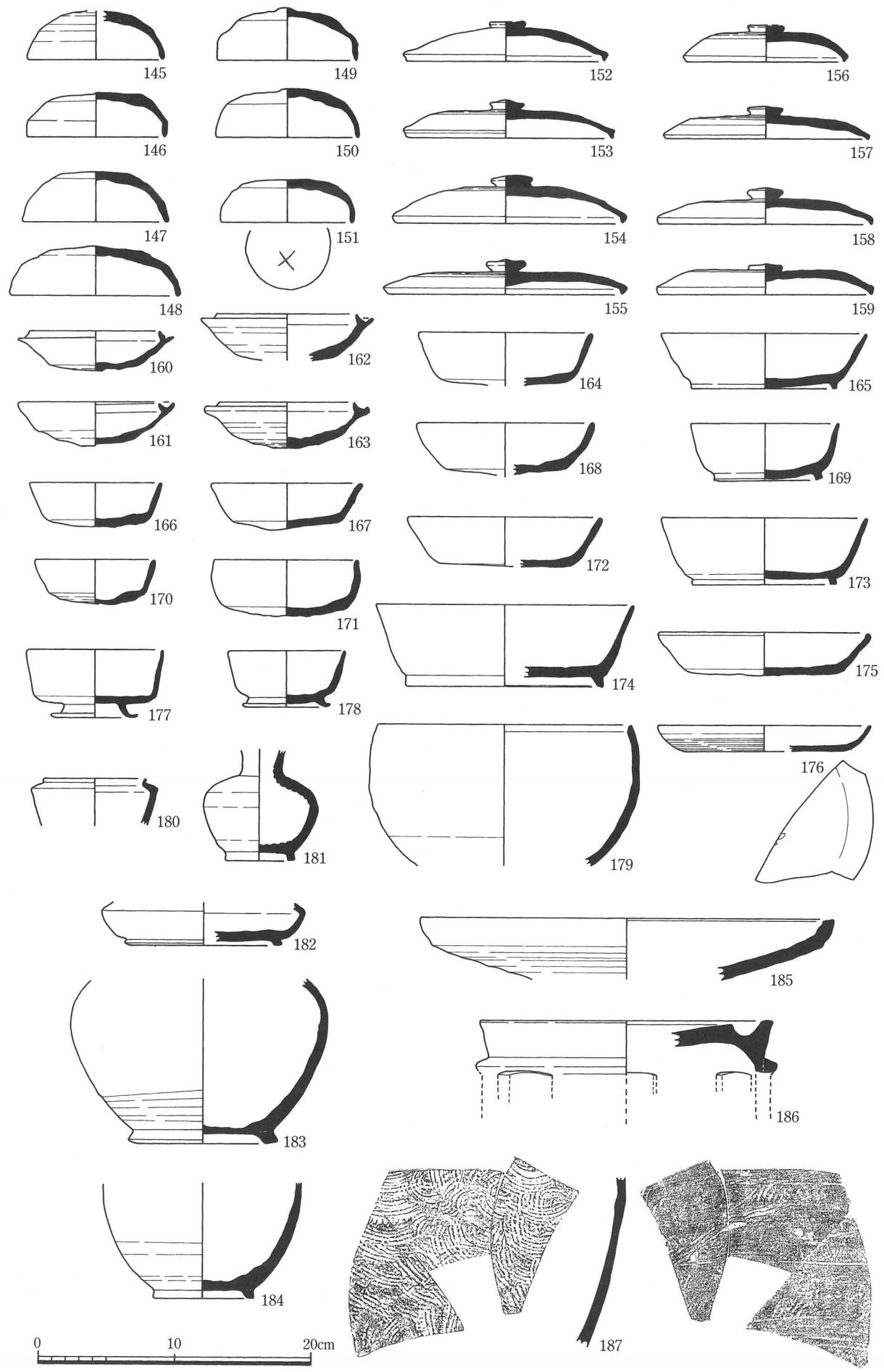


第38図 G区、溝67断面図・1 (98021)

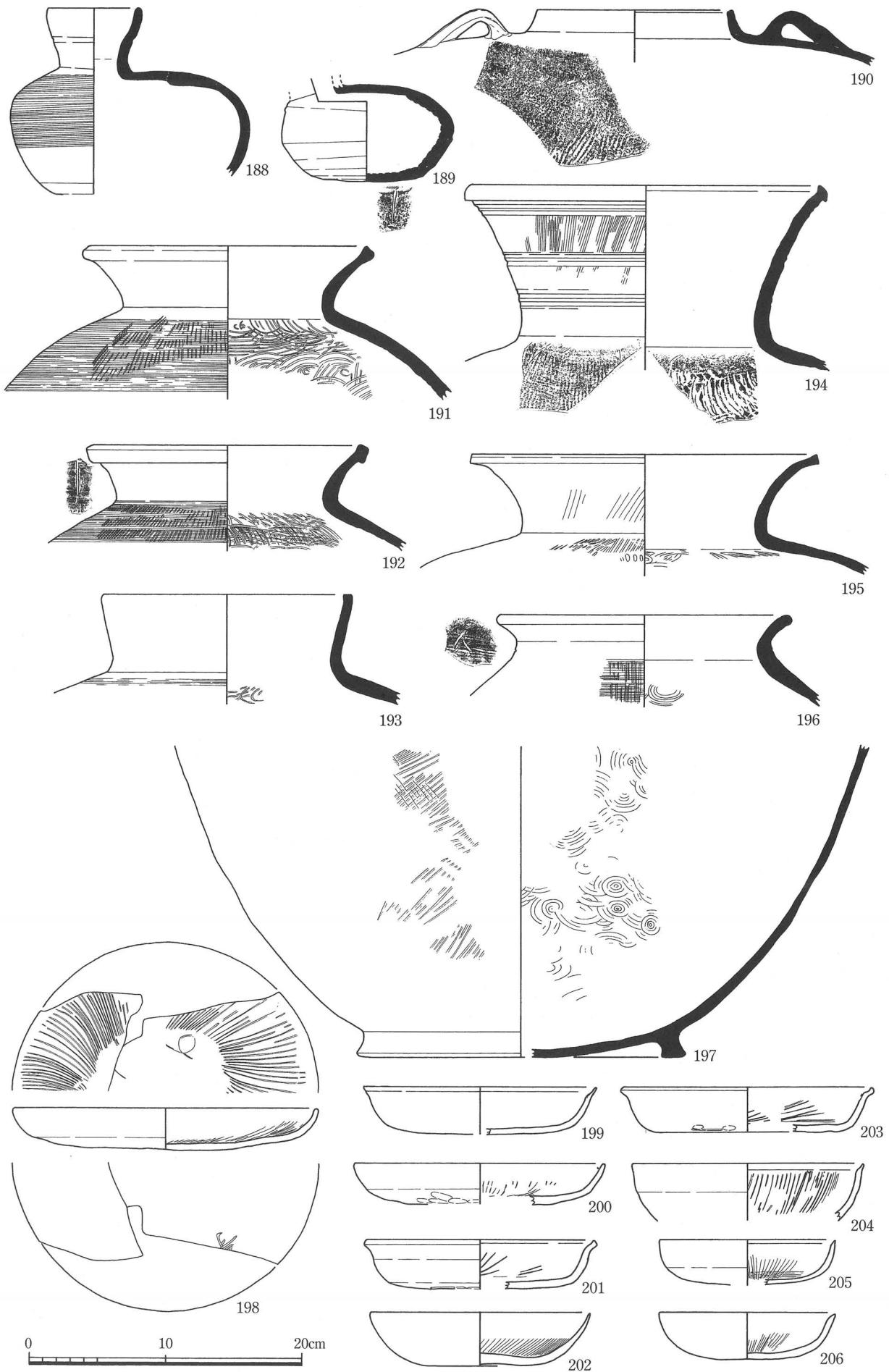
G5-19-1



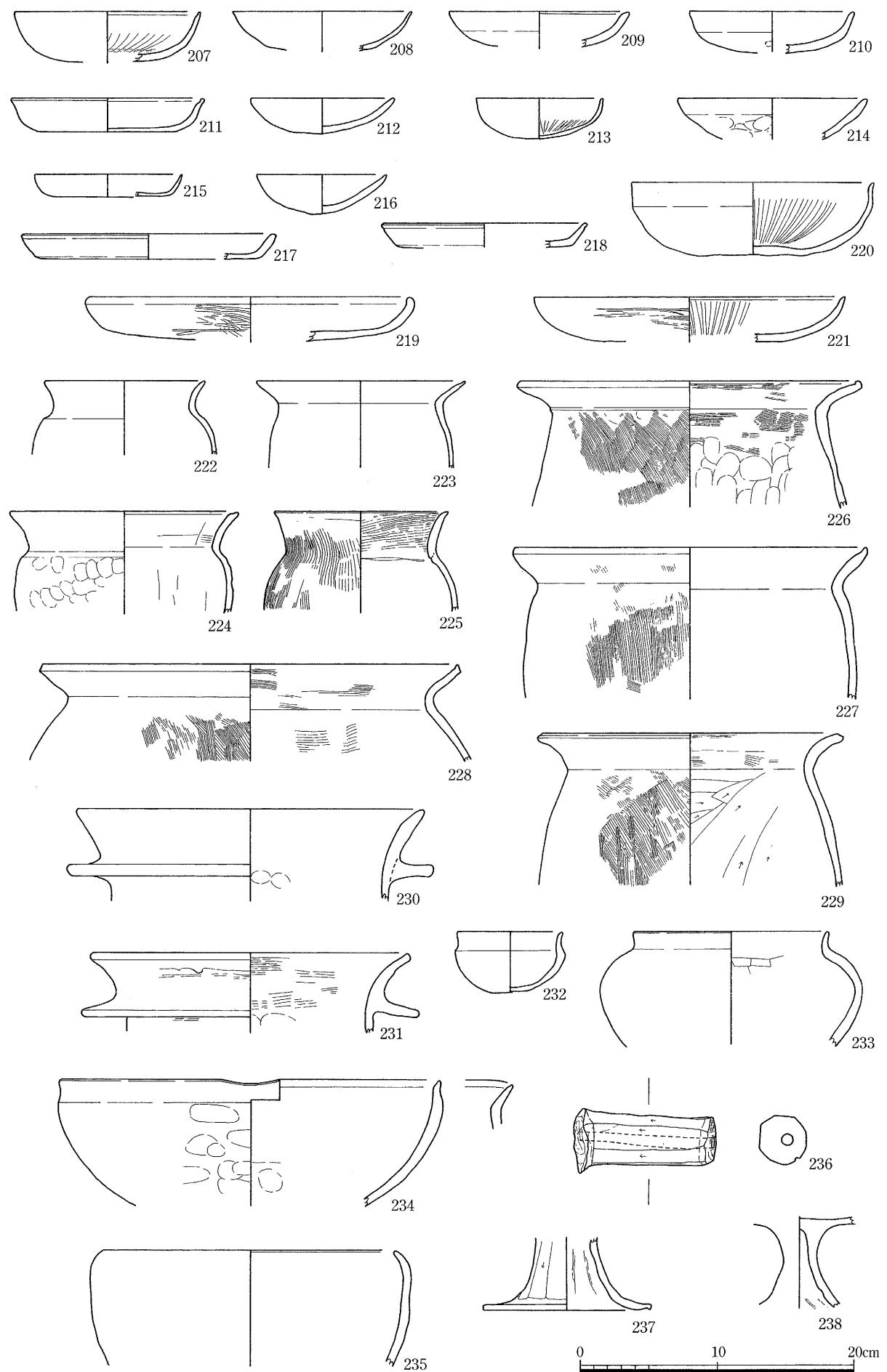
第39図 G区、溝67断面図・2 (98021)



第40図 G区、溝67出土遺物実測図・1 (98021)



第41図 G区、溝67出土遺物実測図・2 (98021)



第42図 G区、溝67出土遺物実測図・3 (98021)

であると思われる。(279) はサヌカイト片である。

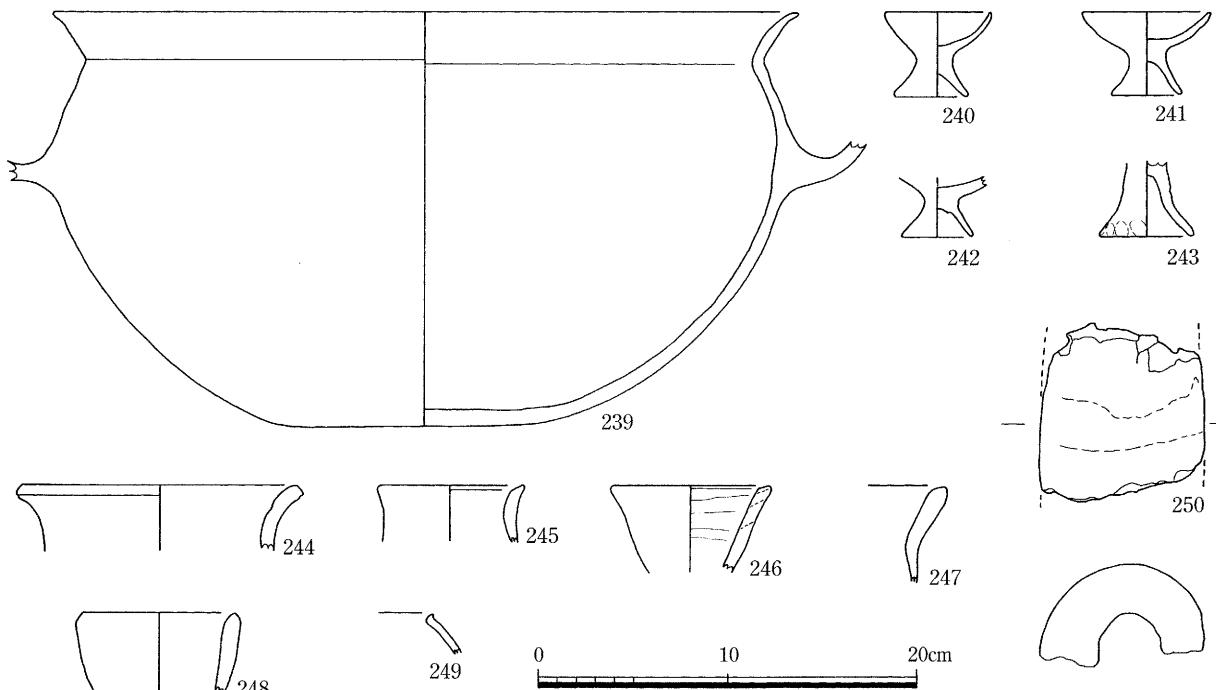
(280～283) は時期は不明であるがタタキ石である。

(284～287) は磨石、(288～295) は砥石である。

木製品（第51図・図版35）（296）は曲物の小型桶もしくは柄杓の桶部であると思われる。

註10 岡本淳一郎2001「古代の錘」『富山県埋蔵文化財センター所報』第68号

註11 宮本佐知子1999「おもりの形態についての一考察」『郵政考古紀要』大阪・郵政考古学会

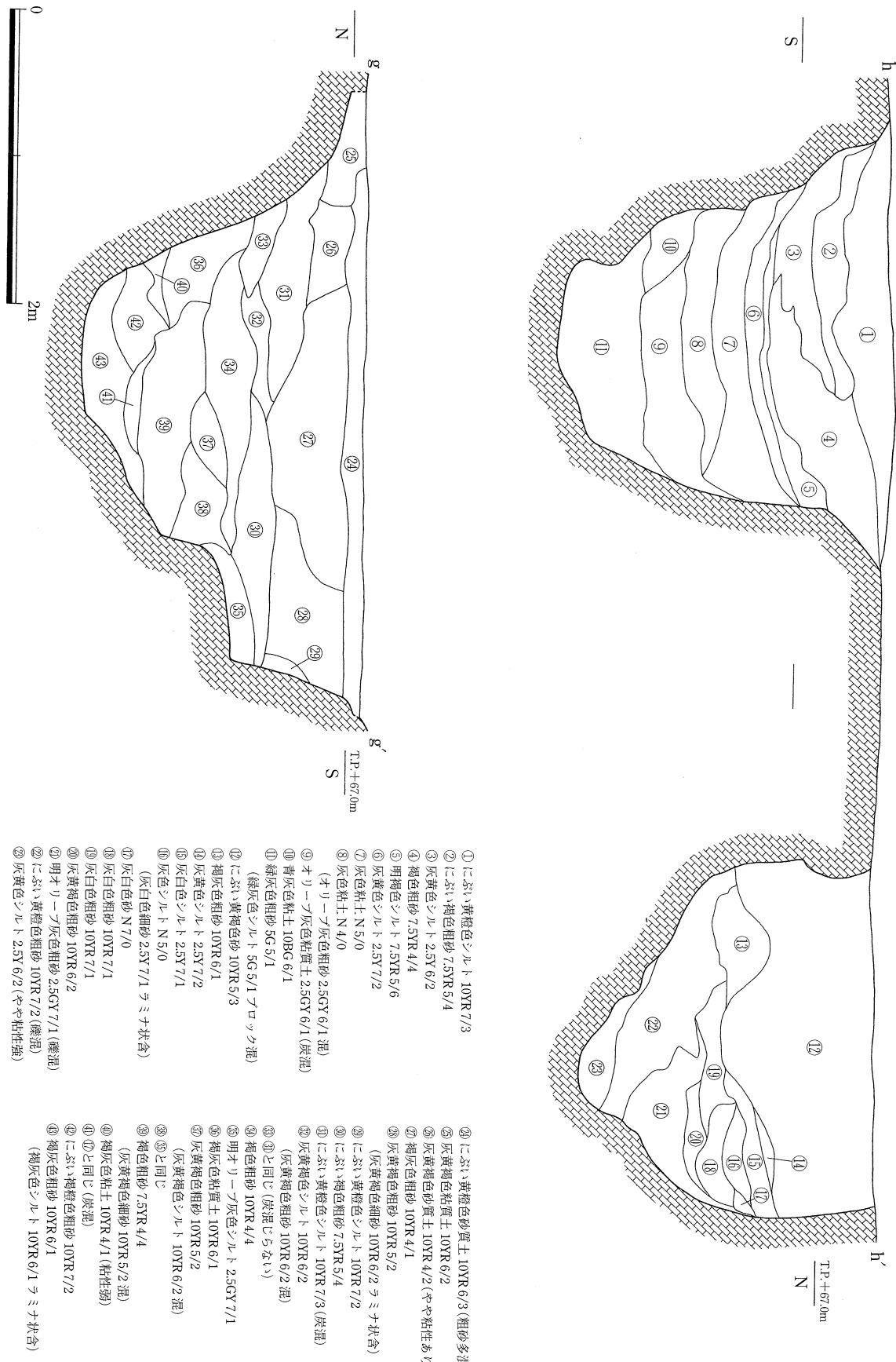


第43図 G区、溝67出土遺物実測図・4 (98021)

小結

G区は、新堂廃寺創建以前は北西から南東方向の2条の谷に挟まれた台地であった。弥生時代の一時期、その中央をほぼ東西に貫流する自然流路62が流れたが、その埋没後は安定した地形であったと考えられる。しかし、長期にわたって人間の生活の痕跡はなく、新堂廃寺創建前後になつて初めて開発の鍬が入ったのであろう。溝84が最初の施設である。C区ではほぼ同時期に溝53が開削されたものと思われるから、早ければ寺域整備の計画段階に設けられたものかも知れない。B・C区の谷はその頃にはあらかた埋没し、湿地の様相を呈していたものと考えられるが、G区南側の規模の大きな谷は残っていた。奈良時代初頭以降に南門の完成によって寺院全体の整備が終了した頃に東西溝58・59が開削される。方位、出土遺物から見てこれらの溝は寺院と密接に関係する遺構と考えられ、埋没時期は平安時代に求められる。開削時期は確実ではないが、南門整備時に寺院の南限を区画し、寺域西側からの排水機能を持っていたと考えられる東西溝53が埋め立て整地されており、その代替施設として開削された可能性は充分考えられる。

寺院廃絶後の状況はよくわかっていないが、A区で廃絶後の瓦堆積を切る浅い井戸状遺構が検



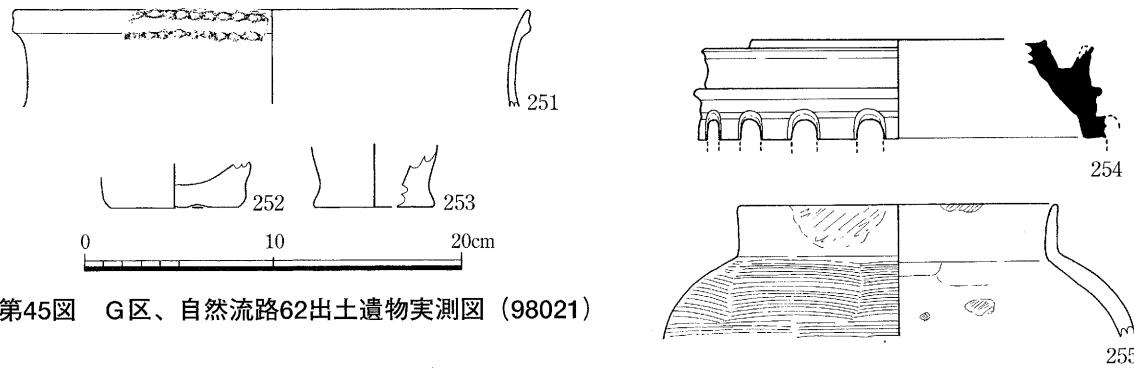
第44図 G区、自然流路62断面図 (98021)

出されていることから、寺院としての姿は急速に失われていったのではないかと思われる。平安時代以降のものらしい柱穴と考えられる小穴も若干検出されているが、建物が群在するような状況ではないので、主に耕地として利用されたのであろう。92年度の試掘調査では、伽藍南西方で平安時代の遺物が比較的多く出土していることから、そのあたりに当該期以降の集落が展開する可能性がある。

鎌倉時代には南の谷も埋め立て整地が行われ、耕地が拡大している。奈良時代以前の溝がかなりの流水堆積を示していることから考えると、この耕地拡大は大規模な用水・排水工事を伴う一大土木事業であったことは想像に難くない。鎌倉時代には新堂廃寺金堂跡に1宇の仏堂らしきものがあったことがわかっており、ヲガンジ池の築造時期をこの頃に求めることができるかもしれない。ただ、耕地の地割りは周辺の条里地割りに比して南北軸がやや東に振っており、地形に制約されたものとなっている。

耕地としての土地利用は1960年の府営住宅建設まで続けられた。

(広瀬・井西)



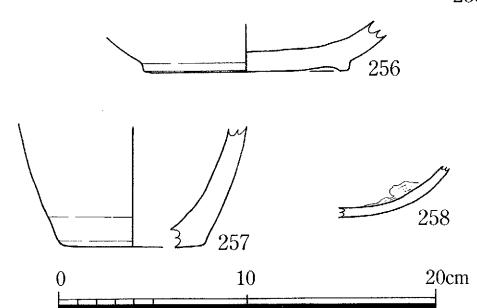
第45図 G区、自然流路62出土遺物実測図 (98021)

第7節 00年度府教委調査（主要伽藍北側の調査）(00031)（第52図・図版19）

主要伽藍の北側で、集会所建設に伴う発掘調査を実施した。調査は10月2日～31日まで実施し、調査面積は60m²である。

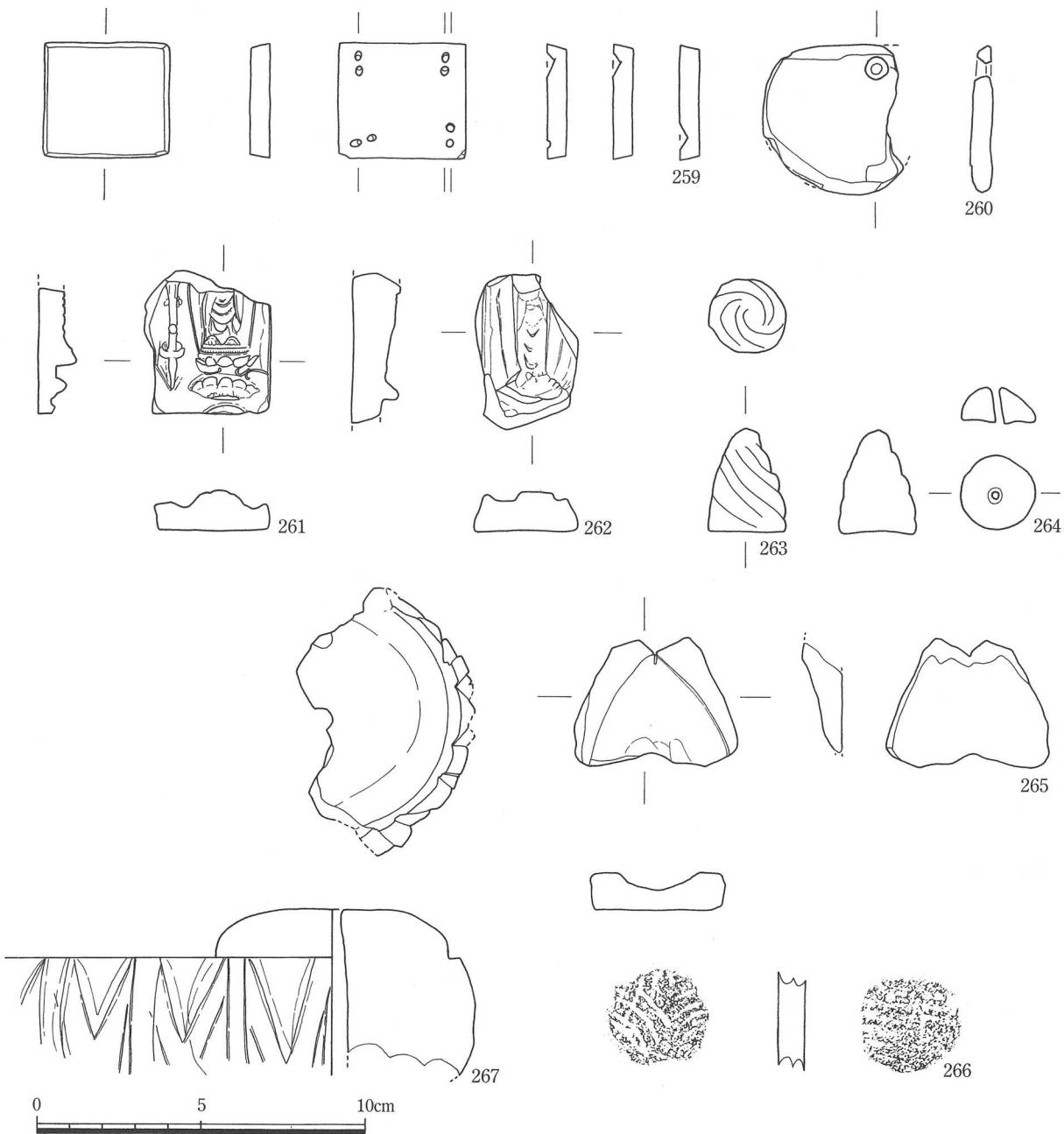
A トレンチ 基本層序は、盛土1m、包含層（飛鳥から奈良時代）約0.2mで地山層となる。遺構面は1面で、掘立柱穴を1基検出した。

B トレンチ 府営住宅建設における搅乱が著しく、包含層は確認できなかった。遺構面は地山面1面である。遺構は溝、柱穴を検出した。遺構内から遺物の出土がなかったため時期は不明である。

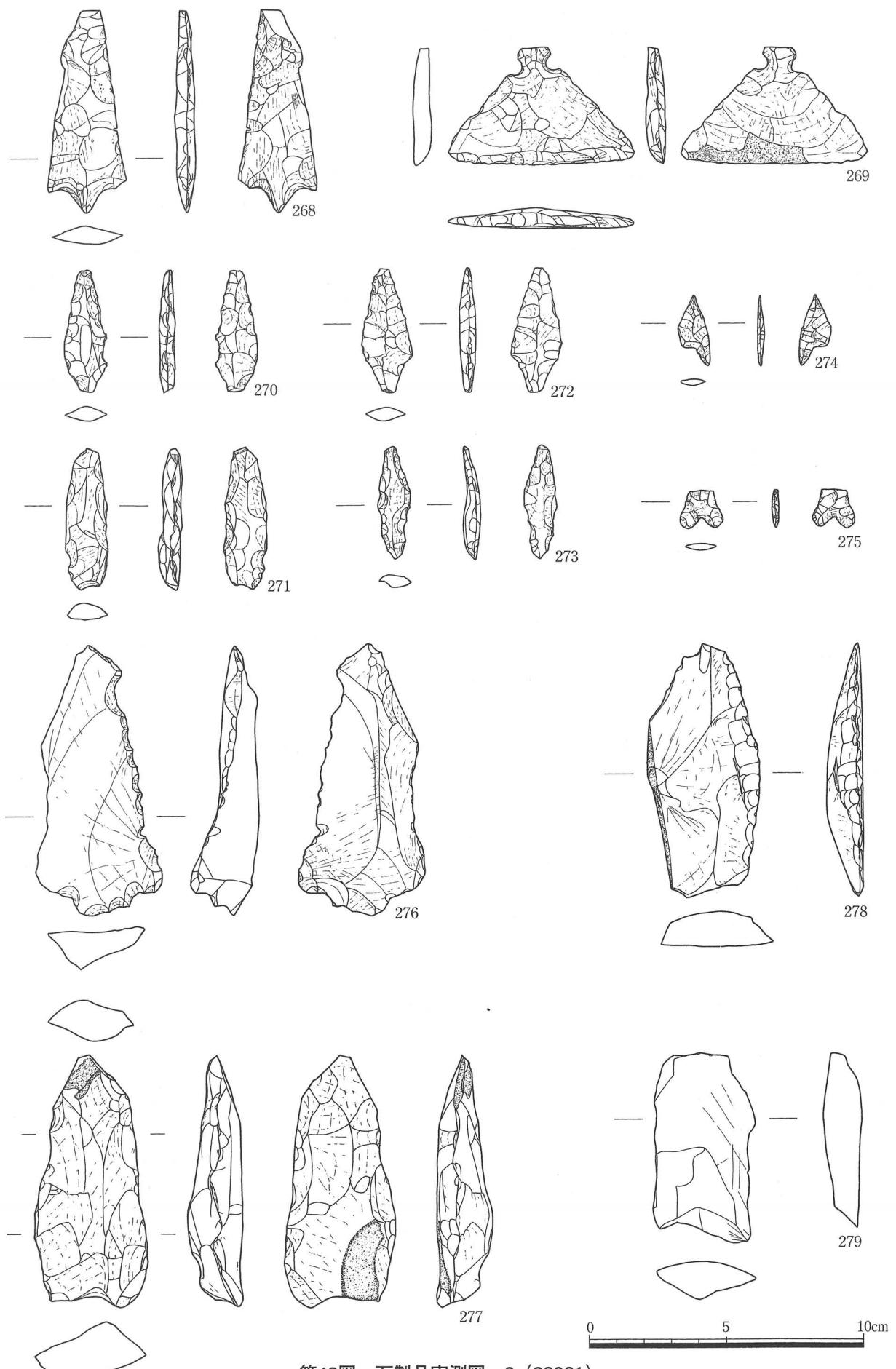


第46図 G区、硯・漆容器実測図 (98021)

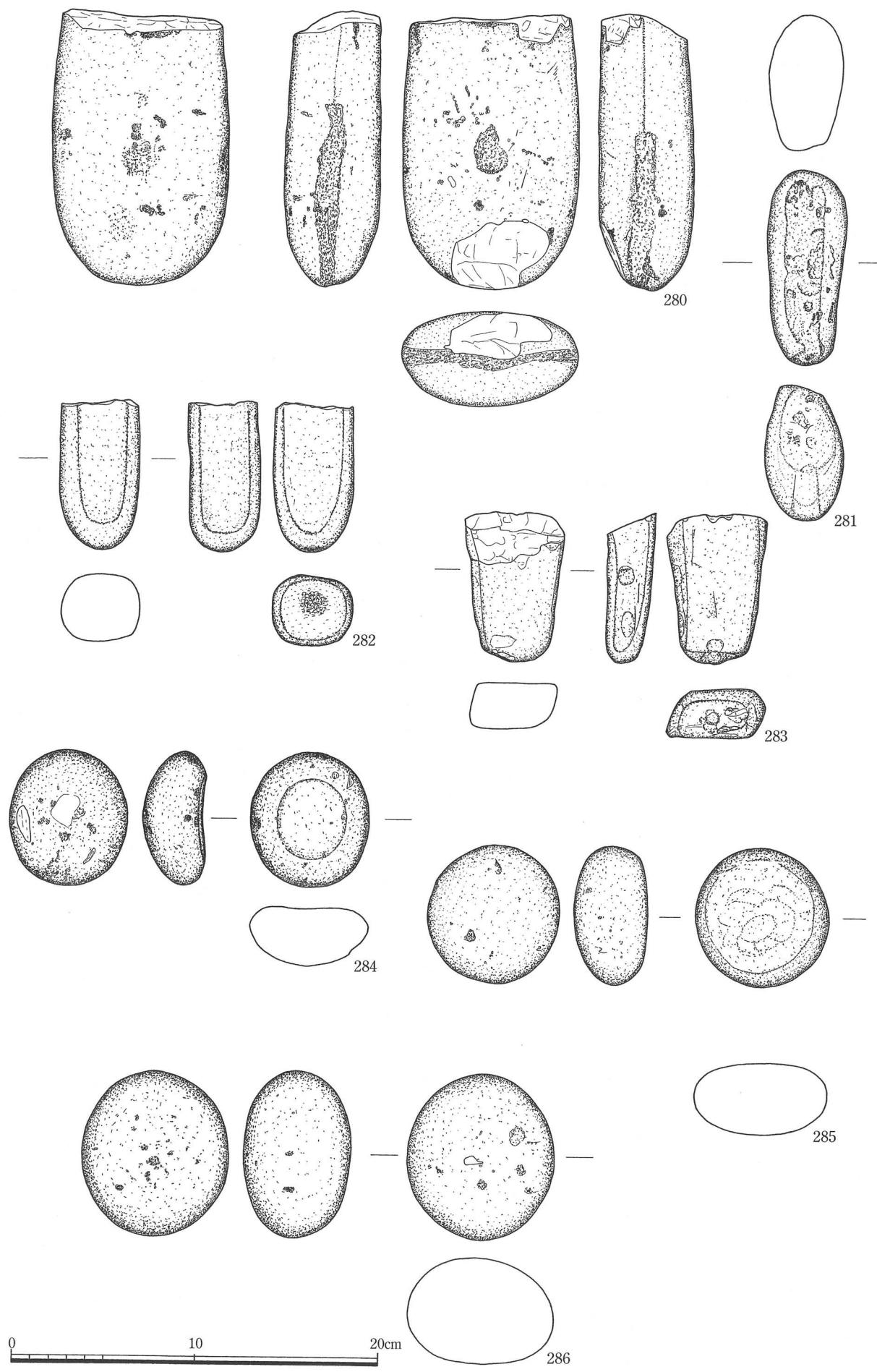
(井西)



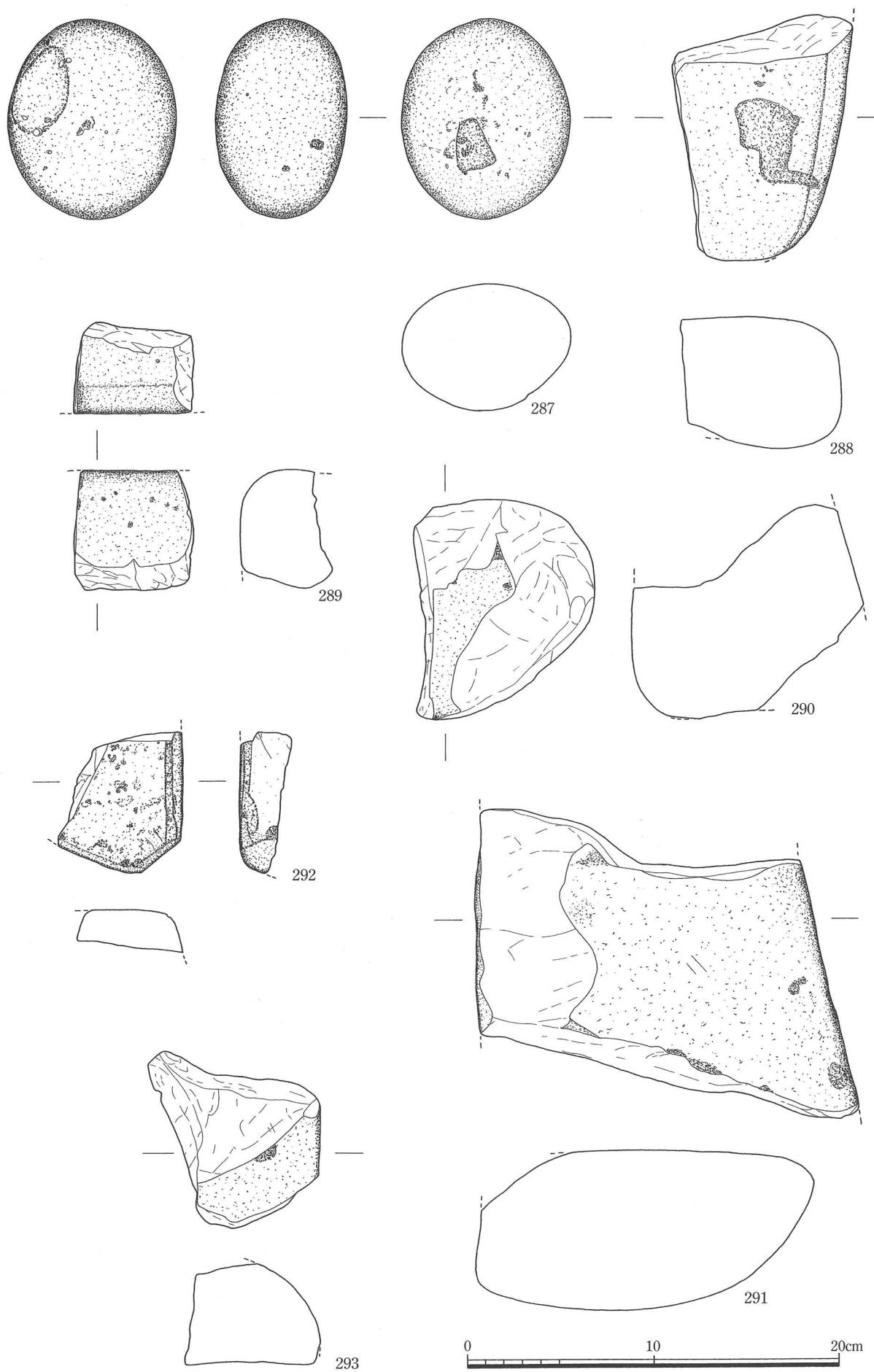
第47図 石製品実測図・1、土製品実測図 (98021)



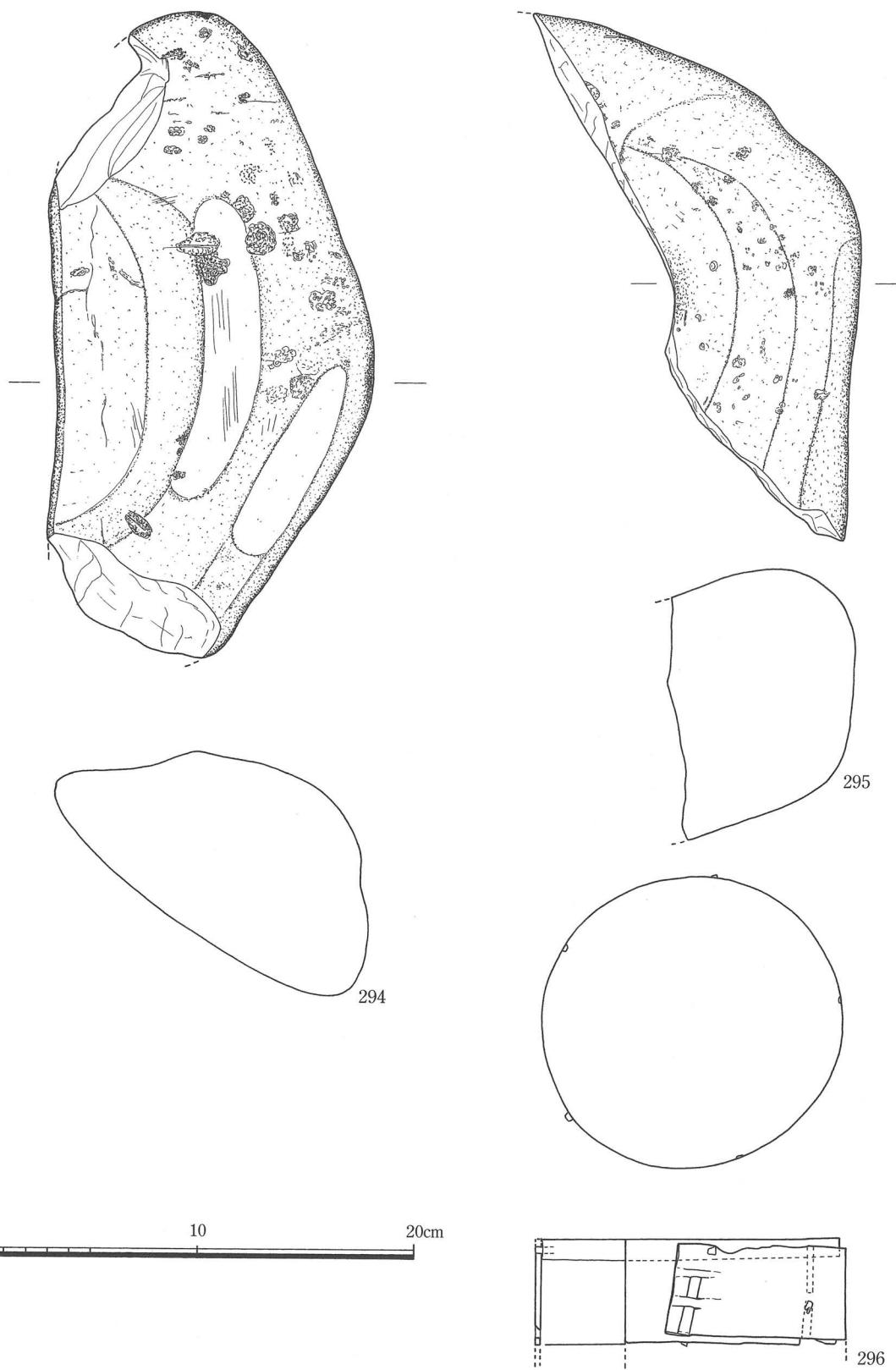
第48図 石製品実測図・2 (98021)



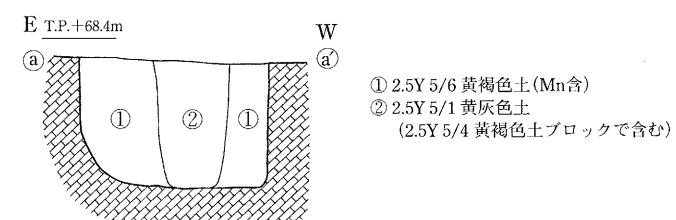
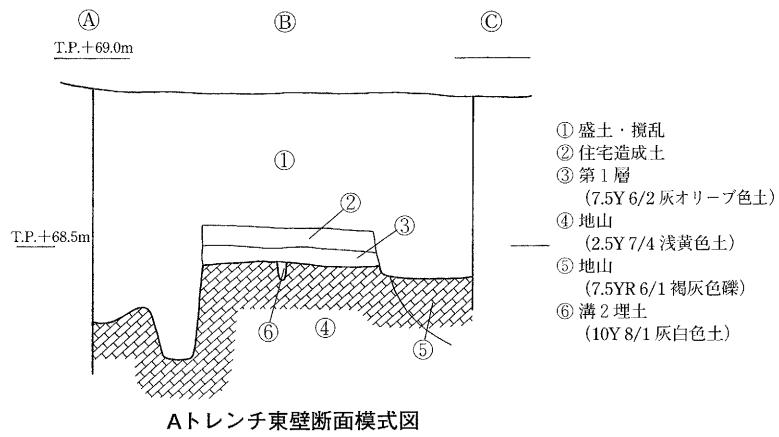
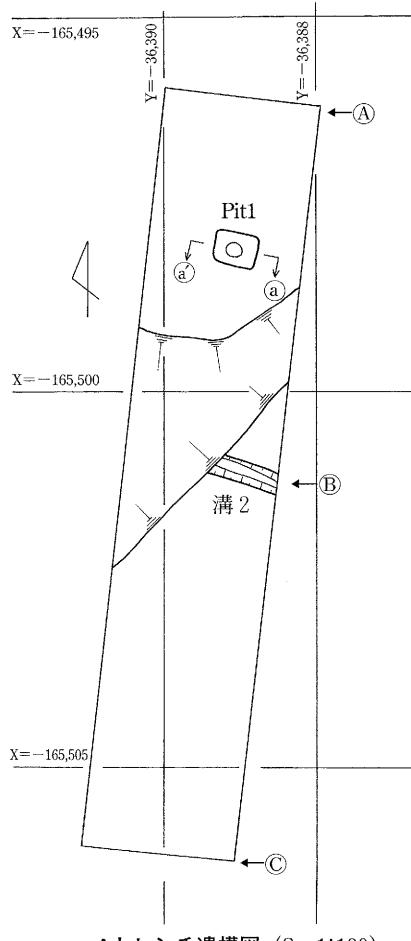
第49図 石製品実測図・3 (98021)



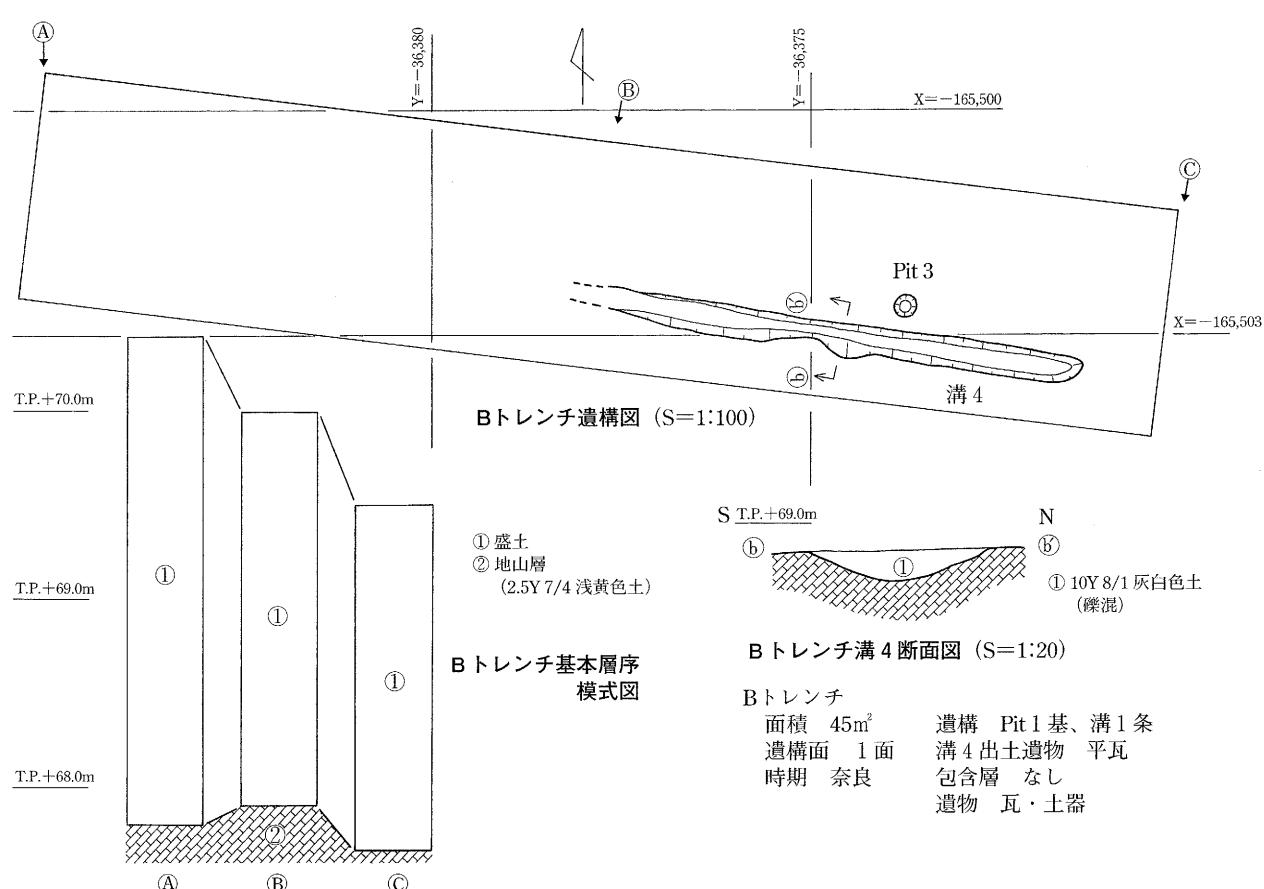
第50図 石製品実測図・4 (98021)



第51図 石製品実測図・5、木製品実測図（98021）



A トレンチ
面積 20m²
遺構面 1面
時期 奈良
遺構 Pit 1基、溝1条
包含層 1層 飛鳥～白鳳の瓦を包含する。
遺物 瓦



第52図 00年度調査平面図・断面図 (00031)

第4章 瓦類

第1節 軒丸瓦・軒平瓦の型式設定について

軒丸瓦・軒平瓦の型式については、概要Ⅱで一度試みたが、概要Ⅲでは、軒丸瓦については丸瓦の接続技法を分類し、記号で示した。今回の報告にあたり再度詳細に検討し、従前からの検討結果も踏まえた上で若干の変更を行った。しかし、型式名などを大きく変更すると従前の報告との混乱をきたす可能性があるため、変更は最小限にとどめた。

以下、変更点と、軒丸瓦における丸瓦の接続技法と製作技法について新たに分類し記号化したものについて記載する。軒平瓦については、重弧紋の挽き型施紋原体によって型式を再設定しているため、それについて記載する。

【軒丸瓦】（第53図）

① 型式名について

型式名の頭につくローマ数字は時代を示すものとしていたが、一般に白鳳時代に位置づけられる川原寺式の瓦当紋様をもつ瓦（従前のⅡ A 11）が、範傷の進行や製作技法を検討した結果、奈良時代に下ることが明らかになったため、ローマ数字で時代を示すことは不適当となってしまった。従って本報告では瓦当紋様を紋様様式と捉え、ローマ数字は瓦当紋様様式を表すものとし、以下のように改める。

I = 飛鳥様式 II = 白鳳様式(山田寺式・川原寺式) III = 藤原宮様式 IV = 平城宮様式。

② Ⅱ A 08型式について

再検討の結果、Ⅱ A 06型式と同範であることが確定したため、Ⅱ A 08型式としてきたものは、今後Ⅱ A 06型式に含め、Ⅱ A 08型式を欠番とする。

③ Ⅱ A 11型式について

新資料を検討した結果、Ⅱ A 10型式と同範であることが確定したため、今後はⅡ A 11型式をⅡ A 10型式に含め、Ⅱ A 11型式を欠番とする。また、従来のⅡ A 11型式は中房とその外側で瓦当範が分かれていることから、中房とその外側で瓦当紋様のずれが生じている。そのパターンが3通り確認されていたので、枝番としてa、b、cを付記していたが、今回は接続技法を枝番として付記することにしたため、それとの混乱を避けるためⅡ A 11型式に付記していた従来の枝番号は削除することとした。

④ Ⅳ A 12型式について

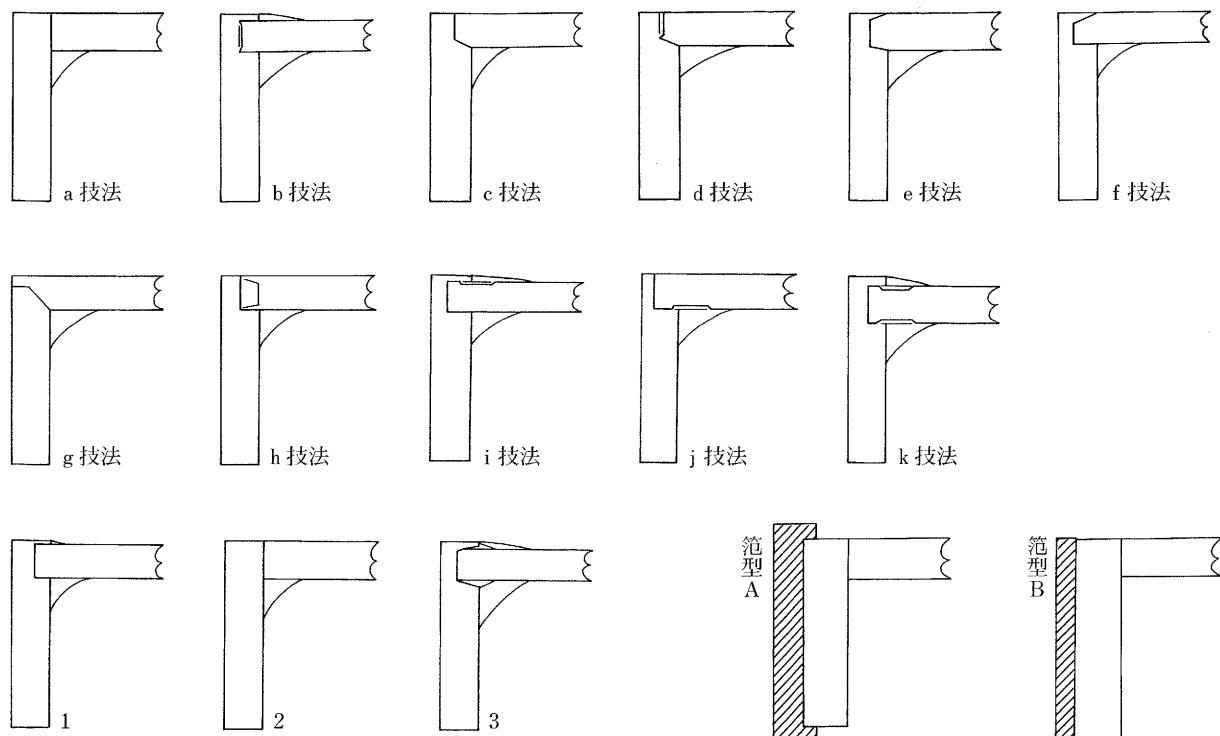
この型式の枝番についても、Ⅱ A 11型式と同様に削除することとした。範傷の進行については、別途第1段階、第2段階…と表記する。

⑤ 96年概要では、瓦当と丸瓦との接続技法について文章で記述してきたが、今回の報告では予め接続技法を分類し記号化した。記号化した接続技法については、型式の後ろにアルファベット

の枝番として表記した。技法の分類は基本的には丸瓦部先端に施される加工によって行った。瓦当裏面に施されるものや成形に由来するものについては、アラビア数字の枝番で補った。

- a 丸瓦の先端を加工せずに接続する。
 - b 丸瓦先端に刻みを入れる。
 - c 丸瓦の凹面側をカットする。
 - d 丸瓦の凹面側をカットした上で、先端に刻みを入れる。
 - e 丸瓦の凹凸両面をカットする。
 - f 丸瓦の凸面側をカットする。
 - g 丸瓦の先端を片ほどぞ状にカットする。
 - h 丸瓦の先端を歯車状にカットする。
 - i 丸瓦の凸面側に数条の沈線を入れる。
 - j 丸瓦の凹面側に数条の沈線を入れる。
 - k 丸瓦の凹凸両面に数条の沈線を入れる。
 - l 横置式一本造り
- 1 瓦当範に粘土を詰め込む途中で、丸瓦を差し込む。(印籠継ぎ法)
 - 2 瓦当部を作り上げてから、丸瓦を接着させる。(接着法)
 - 3 瓦当部に丸瓦接続のための溝を彫る、あるいは溝を彫らずに食い込ませるものも含める。

(井西)



第53図 軒丸瓦接続技法・瓦当範模式図

【軒平瓦】

軒平瓦の型式設定について

重弧紋軒平瓦については、従来Ⅱ B 01とⅡ B 02に分類していたが、重弧の形態、製作技法等を検討し直した結果、以下のように再設定する。いずれも四重弧紋、段頸で、桶巻き作りであり、分割前に重弧を施紋する。重弧は型押しではなく押し挽きによる施紋であることが、弧線及び凹線に観察される砂粒や粘土の動きにより確認できる。凹凸両面の端部近くに挽き型の当たりの段差が観察されるものが多い。技法的には、頸の側縁を分割前にV字形に切り込むものと、頸の側縁に分割破面が残るもの、頸の接合技法として、平瓦凸面に格子タタキを施すもの、平行ヘラ押しを施すものなど細分は可能であるが、本書では挽き型の形態を重視することとした。詳細については本文中に述べる。

Ⅱ B 01型式：重弧の弧線の幅に比して凹線の幅が狭いもの。この型式は挽き型の摩滅、あるいは挽きの強弱によって、弧線の頂部が平坦なものをⅡ B 01型式 a、弧線の頂部が丸みを帯びているものをⅡ B 01型式 b に細分する。

Ⅱ B 02型式：従来のⅡ B 01型式と基本的に同じ。弧線と凹線の幅がほぼ等しい。円筒形桶を使用したものをⅡ B 02型式 a とする。

また、重弧の形態は同じであるが、成形に截頭円錐形桶を使用し、製作技法が著しく異なっているものがある。別の型式を設定する必要があるかもしれないが、本書では細分型式としてⅡ B 02型式 b とする。

Ⅱ B 05型式：重弧の弧線の幅に比して凹線の幅が広いもの。弧線の断面形はやや尖った印象を与える。

なお、従来施紋の浅いものと深いもので分類したことがあるが、ごく浅く施紋されたものにも上記の型式差は確認可能なので、観察の結果明らかになった型式名を与えることとした。

60年度調査と98年度府教委調査で出土した重弧紋軒平瓦は小片も含めると274点で、Ⅱ B 01型式 a が101点、Ⅱ B 01型式 b が63点、Ⅱ B 02型式 a が56点、Ⅱ B 02型式 b が3点、Ⅱ B 05型式が51点である。

Ⅳ B 06型式：興福寺式軒平瓦は60年度の調査で1点出土したのみで、その後の調査では出土していないことから型式名を与えていなかったが、本書では60年度調査資料も取り扱うため、型式名を付す。

(広瀬)

第2節 軒丸瓦

I A01型式

本型式は概要Ⅱで報告した個体のみで（概要Ⅱ：第25図717）、その後の調査でも資料は増えていない。今回の報告にあたり再度資料を検討してみた。貫通しない釘穴については、範そのものに釘穴を貫通させるため目印となる突起状のものがついていたのではと思ったが、釘穴内で砂

粒の動きが確認できるため範からはずした後にあけたものと思われる。しかし、瓦当裏面に観察される丸瓦との接続部と考えた部分については同様に右回りの砂粒の動きが観察されるため、丸瓦との接続痕跡ではない可能性が高い。垂木先瓦として使用する事は釘穴が貫通していない以上不可能であるが、軒先に使用されたという積極的な根拠も見いだせない。現段階では I A 01型式と同範であることは間違いないが、穿孔不良の垂木先瓦が誤って焼成された可能性が高いようである。窯付近で出土したものではなく、消費地で出土していることが気にかかるが、新資料の増加を待ちたい。

I A 02型式 (第54、55図・図版36) (297~315)

60年度調査以降、破片も含め64個体出土した。8葉の素弁で弁端はやや尖っているが、幅広部分は緩やかに曲線を描いている。蓮子配置は1+4で、外側の蓮子は中房の外周近くに配される。弁端に珠紋を点じる。瓦当紋様の特徴は、中房の周囲に圈線を巡らせ、その周囲に凸線が巡ることである。中房の周囲の周溝内で確認される範傷の有無により2段階存在する。瓦当範は範型の当たりが瓦当側面から約0.5cmの所で確認される個体があるので範型A(註12)である。瓦当直径は約16cm、瓦当厚は約3cmである。色調は黄褐色系のものと灰色を呈するものとに分類されるが、胎土はほぼ同じで長石粒が多量に含まれる。焼成はやや軟質である。成形段階の特徴は、瓦当裏面下半外周に強くユビナデが施されることである(297、298)。ユビナデは裏面と側面に沿って施されているため裏面は幅約0.8cm、深さ約0.2cm外周に沿って窪み、側面の断面形は弧状になっている。(307)は瓦当裏面下半にユビオサエとナデが施され、周縁に沿ったナデは施されない。丸瓦との接続は大きくは4種確認できるがc技法についてはさらに細分される。接続する丸瓦は無段式である。

I A 02-a-2 (302、306)

I A 02-a-3 (308)

I A 02-c (297、298、299、301、303、304) (301)は丸瓦の凹面側端面すべてをカットするのではなく、丸瓦端面の中央部付近だけをカットしている。

I A 02-e (307)

I A 02-f (300) (300)は丸瓦の凸面側端面すべてをカットするのではなく、側縁から約4cm程度中央部に向けてカットしている。

(315)は色調と胎土の類似性からI A 02型式に接続されていた丸瓦と考えられる。先端凹面側をカットしている。

I A 03型式 (第56図・図版36) (316~329)

60年度調査以降、破片も含め23個体出土した。瓦当紋様はI A 02型式と酷似しているが、瓦当紋様を観察した限りでは、改範の根拠は見いだせないため、別範であると考える。I A 02型式同様に、8葉の素弁で弁端はやや尖っているが、幅広部分は緩やかに曲線を描いている。蓮子配置は1+4で、外側の蓮子は中房の外周近くに配される。弁端に珠紋を点じる。蓮弁はI A 02型式

ほど膨らまず、範傷もほとんど確認できない。瓦当裏面は不定方向のナデを施し平坦に仕上げている。瓦当裏面は I A 02型式と同様のナデは観察されないが、側面外周はユビナデを施し断面形が弧状になるものがある（概要Ⅱ：第24図674、317、322、323）。瓦当直径は約15cm、瓦当厚は約2.5cmである。色調は黄褐色系のものと灰色を呈するものとに分類されるが、胎土は、いずれの資料もほぼ同じで長石粒が多量に含まれる。焼成は堅緻である。丸瓦との接続は3種確認できる。接続する丸瓦は無段式である。富田林市保管資料の中に、丸瓦の先端を菌車状にカットして接合する（h 技法）資料が確認されている。製作技法は、瓦当範に厚めに粘土を詰め、先端を菌車状にカットした丸瓦を今回の分類でいう—1 技法で接続し、補強粘土を詰める。

I A 03-a-2 . . . (316~320、324、325)

I A 03-c . . . (322、323)

I A 03-e . . . (321) (321) は丸瓦部の瓦当部から約4cmの位置の丸瓦部に、径約1cmの釘穴を穿っている。

I A 04型式（第57、58図・図版36、37）(330~338)

60年度調査以降、破片も含め21個体出土した。全く範傷の確認されないものと外縁と蓮弁との間の周溝（337）に範傷の確認されるものがある。10葉の素弁で弁端と幅広部分は尖っている。蓮子配置は1+4である。弁端に珠紋を点じる。瓦当直径は約16cm、瓦当厚は約2.5cmである。色調はいずれも灰色を呈し、胎土は黒色砂粒と長石粒を含む。胎土は I A 02型式・I A 03型式とは若干違いが看取される。焼成は堅緻なものと軟質のものが確認される。現段階では瓦当側面に範の当たりが観察されるものが全くないので範型Bと考えられる。瓦当裏面は回転台を利用して回転ナデを施し、中高に作るもの（330、331、333、337、338）と不定方向にナデを施し平坦に仕上げているものとがある（335、336）。接続技法は3種確認される。大阪大学保管資料（1）では完形で出土した資料があり、接続する丸瓦は有段式である。

I A 04-a-2 . . . (332)

I A 04-c . . . (331、335、336、338)

I A 04-g . . . (330、333)

I A 05型式（第58図・図版37）(339~346)

60年度調査以降、破片も含め21個体出土した。範傷の確認されるものは出土していない。10葉の素弁で弁端は尖り、幅広部分の尖りは I A 04型式に比してやや鈍くなっている。弁端に珠紋を点じる。蓮子配置は1+4である。色調は橙褐色系か灰色系を呈する。胎土は I A 02型式・I A 03型式と同様に長石粒を多く含み焼成はやや軟質である。現段階では瓦当側面に範の当たりが確認されないので範型Bであると考えられる。直径は約16cmで瓦当厚は約2.5cmである。瓦当裏面下半にユビナデを施すが、I A 02型式で施されるユビナデのように側面と下半を指で挟んでナデを施すものではなく、裏面下半と側面は別々にナデが施される。瓦当裏面に不定方向のユビナデを施し平坦に仕上げているものもある。丸瓦との接続技法は2種確認される。

I A 05—a··· (339、340、343、344)

I A 05—c··· (341、342)

I A13型式 (第58図) (347)

60年度調査以降、破片も含め3点しか確認されていない。紋様はI A 05型式と酷似している。I A 05型式に比して、中房直径が大きいことと、蓮弁の幅広部分の尖りがより緩やかになっていることが相違点である。10葉の素弁で弁端は尖り、幅広部分の尖りはI A 04型式に比してやや鈍くなっている。弁端に珠紋を点じる。蓮子配置は1+4である。直径は約18cm、瓦当厚は約2.5cmである。色調は橙褐色系を呈し、胎土は長石粒を含む。焼成はやや軟質である。丸瓦との接続技法は確認されるものが少ないが、(347)はa—2技法で接続されている。

I C 01型式 (第58図・図版37) (348、349)

60年度調査以降、破片も含め15点出土した。10葉の素弁である。98年度調査では(348、349)が出土した。(348)の色調は褐色を呈し、胎土は長石等の砂粒を含む。(349)の色調は灰色を呈し、胎土は精良である。

I C 02型式 (第58図) (350)

60年度調査以降、破片も含め4点出土した。8葉の素弁である。(350)の色調は黄褐色を呈し、胎土は精良である。

I C 04型式 (第58図・図版37) (351)

98年度調査で新たに確認された資料である。I A 02・03型式の中房の周囲に周溝が巡らない紋様で中房と間弁の一部が確認された。直径は復元できなかったが、中房と裏面の厚みは約2cmである。中房に蓮子は観察されず中心には焼成前に釘穴が穿たれている。新型式とする。(井西)

II A 06型式 (第59、60図・図版37) (352~361、377)

先述の通り、今回の再検討に伴いII A 06型式とII A 08型式が同范であることを確認したため、旧II A 08をII A 06に含め、II A 08を欠番とする。60年度調査以降、破片も含め35点出土した。瓦当直径は15~16cm、中房から裏面までの厚さは約3cmと比較的薄手の作りである。8葉で中房の蓮子配置は1+4、外縁には三重圈紋を飾る。例外的な個体だが、瓦当側面にも四重弧紋を飾るもののが存在する(註8)。弁と子葉にはそれぞれ輪郭線が巡り、隣り合う弁は基部で接するためにその部分で輪郭線を共有する。子葉先端と弁先端の間の弁央には軸線が表されるが、この軸線は范の摩耗によって不明瞭になっていく。色調が黒色で胎土に砂粒の目立つものと、灰白色で精良な胎土のものとに大別でき、後者はもっぱら弁央軸線が不明瞭となった段階のものである。なお、特記すべき事項として、外縁の三重圈紋を范によらずに型挽きで施紋していることがあるが、これについては第5章で詳述する。丸瓦部との接合技法には以下の4種類が確認できる。これら4種類の先後関係をすべて明らかにはし難いが、h技法を探るものは弁央軸線の不明瞭な灰白色のものに限られており、II A 06型式におけるh技法の後出性を示している。

II A 06—a··· (354、357) a—1が主であるが、a—2のものもあるようである。

II A 06—b . . . キザミは丸瓦凹面にヨコ方向に施される。

II A 06—e . . . (353、358、359) 丸瓦先端の形状が破断面で確認できるもので e 技法の存在を確認し、瓦当側の剥離面に凹面側カットの転写だけが確認できるものもこれに含めている。つまり、後者は c 技法である可能性もある。

II A 06—h . . . (356、360、361、377) 丸瓦への切り込みは三角形または台形を呈する。

II A 07型式 (第60、61図・図版37) (362~376、378~388)

60年度調査以降、破片も含め32点出土した。文様構成は II A 06型式と同一であるが、間弁の切り込みが浅く弁端形状が半円形に近いことと、弁端の反転をほとんどもたないこと、子葉の輪郭線が表されないことで区別される。わずかな違いではあるが、これらの点からは II A 06型式より後出的であると考えられる。概して色調は暗黄褐色を呈し、胎土は多くの砂粒を含む。焼成もやや軟質のものが多い。II A 06型式とは相違する特徴として、外縁の破断面に外傾した接合線がほぼ例外なく観察されることが挙げられ、かつ外縁の内側に現れた接合線は調整せずに放置されている。そのため多くの個体においてここで外縁が剥離し、失われている。外縁の三重圏紋は、II A 06型式同様、型挽きで施紋している可能性が高い。丸瓦との接続技法は3種類を確認した。

II A 07—a—2 . . . (382)

II A 07—b—2 . . . (378、379) 瓦当裏面に残る剥離痕から、丸瓦広端面に斜格子状または平行線状のキザミを密に入れていることが分かる。

II A 07—h . . . (380、381) 接続技法の確認できる個体のほとんどを占める。丸瓦への切り込みは三角形または台形を呈する。

なお、60年度報告ではこれら3種類の他に、丸瓦広端面に「打型の細格文」を施すものがあると述べられているが、確認できない。あるいは II A 07—b を指しているものかと思われる。

II C 03型式 (第61図) (389)

楕円形の垂木先瓦で、単弁10葉である。蓮子と外縁は付けられていない。色調・胎土は II A 07型式と共通する。60年度報告で述べられているとおり、扇垂木用だとすれば長短径比の異なる資料が出土するはずであるから、地面に対して「垂直あるいは鈍角に切られ」た平行垂木の先に使用されたものと考えられる。

(堀)

II A 09型式 (第62~64図・図版38) (390~416)

60年度調査以降、破片も含め102点出土した。複弁8葉で、蓮子は1+5+10である。直径が約18cm、中房の直径が約7cm、瓦当厚が約2.5cmである。面違鋸歯紋は中心からみて右下がりで、外縁の内側に凸線が巡る。瓦当側面中央部左右ほぼ同じ位置に瓦当面に対して直角に稜線が観察される。瓦当側面は丁寧にナデ調整されており、2分割の枷型を使用した場合に生じるバリ状の突起を丁寧に2次調整のナデで消しているようにも観察される。しかし、1点もバリ状の突起が観察されないことから、瓦当面の調整が上下で変わる変換点の可能性も考えられる。色調は灰白色を呈し胎土は長石粒を含む。接続技法は2種確認されるが、基本的には h 技法で接続される。

丸瓦の先端の歯車加工は上端幅1.0cm、下端幅1.8cmの台形を等間隔で切り込むものと不規則に切り込むものがある。全体的には等間隔のものが多い。出土した資料の中で（393）だけがa技法で接続した後に瓦当部と丸瓦部の接続面を上から棒状のもので押さえつけて接着を強くしようとしている。丸瓦の先端を切り込んでいないために、焼成後に剥離する可能性を考え、丸瓦との接着面を強く押さえつけたのかもしれない。細井廃寺・龍泉寺と同范である。（註13）

II A 10型式（第65図・図版39）（417～427）

60年度調査以降、破片も含め24点出土した。複弁8葉で、蓮子は1+5+9である。新資料が確認され、従前にII A 11型式に分類していたものと同范であることが確認されたので、従前のII A 11型式をII A 10型式に含めた。II A 09型式との差異は直径が約14.5cmと小さく、面違鋸歯紋が中心から見て左下がりで、鋸歯紋の内側には凸線ではなく平坦面が巡ることである。瓦当側面に范の当たりが確認されないので、范型Bである。本型式は范傷の進行が確認されるため、かなり長期間使用されていたようである。また、製作技法及び丸瓦との接続技法にも変化が見られる。（詳細は第5章 第3節を参照されたい。）

従前にII A 11型式としていたものは、II A 10型式の范型の中房がすり減ってきたための改范である。しかし范型の現状を彫り直したのではなく、中房をすっかり削り抜いて、同じ蓮子配置に彫り直した范をはめ込んだものと考えられ、中房の外周に沿ってバリ状の突起が観察される。よってII A 10型式の范型を本型式のオリジナルと認識する。中房とその外側は何個体かを製作することにはめ直されていたようである。中房部とその外側の固定パターンによる同紋の瓦群をグループピングしII A 10型式①、II A 10型式②として、製作技法・范傷の進行等について説明する。

II A 10型式①・・・（417～419、概要Ⅱ：第28図780） 従前からのII A 10型式がこれにあたり、改范前のものである。瓦当直径は約15cm、瓦当厚は約2cmである。中房がかなりすり減っており、いずれの個体も蓮子がはっきりとしない。色調は白灰色で胎土は精良である。焼成は堅緻である。（419）で范傷Aが観察される。その他の范傷は確認されない。丸瓦との接続技法はh技法で接続する。II A 09型式のh技法に比べ、丸瓦先端の加工の幅が上端で約0.7cm、下端で約1cmと小さく、加工の間隔も狭い。接続技法はh技法1種のみである。

II A 10型式②・・・（420～423、425） 瓦当直径は約15cm、瓦当厚は約3cmである。色調は黒灰色を呈し、胎土は非常に精良で、焼成はやや軟質であるものと、色調は黒灰色を呈し胎土に大量の砂粒を含むものとに分かれる。胎土の差異は製作技法・范傷の差異とも合致し、この段階で范型が移動した可能性が推測される。范傷A・B・Cが観察される。このグループで新たに観察される范傷は、まずBが確認され范傷Cについては（420）で薄く観察されるが明瞭ではなく、（425）でははっきりと確認される。まず范傷Bのみが観察される資料では、（421、423）がa-3技法、（422）がh-3技法で丸瓦と接続する。范傷Cが明瞭に観察される（425）の製作技法はl技法である。

II A 10型式③・・・（424、426、概要Ⅱ：第28図785、788、第29図791～794） 范傷A～Fが確

認される。色調は灰色から青灰色を呈し胎土は砂粒を含む。焼成は堅緻である。製作技法はすべて ℓ 技法である。**II A 10型式④**において明瞭に確認される範傷Eが(424)では薄く確認される。**II A 10型式④**・・・(427、概要Ⅱ：第28図783)範傷A～Eが確認される。製作技法はすべて ℓ 技法である。

以上述べてきたように本型式は、範傷の進行から時期差が看取され、**II A 10型式①**から**II A 10型式④**へと時期が下る。**II A 10型式②**の範傷Cが確認される段階から ℓ 技法での製作が確認されii技法で製作されたものと思われる。(横置式を使用することについては同様であるが、製作工程が異なりiとiiに分類した。技法の詳細については第5章 第3節を参照されたい)

IV A 12型式 (第66～70図・図版40～42) (428～477)

本型式では、60年度調査以降、破片も含め178点出土した。複弁8葉で、蓮子は1+6である。範傷の進行により3段階の時間差が看取されるが、段階ごとの数量については後述する。平城宮の6304型式の紋様である。概要Ⅱにおいて同範と記載したが珠紋と鋸歯紋の位置関係が一致せず、別範である。本型式は10単位の鋸歯と16個の珠紋が弁央と間弁の延長上にぴたりと合っており、むしろ平城宮6304型式よりも整美な印象を受ける。範型の当たりが瓦当側面に観察されるのでA型範である。範傷の確認されないものから、やや木目が立ってきており珠紋に範傷が確認される段階、二つに割れ接合した範傷が確認される段階と大きく3段階に分類される。それぞれの段階ごとに説明する。

第1段階・・・個体数は、10点確認された。範傷の確認されない段階である。色調が灰白色を呈し胎土に砂粒を含むものと色調が黒灰色を呈し胎土が精良なものとに分かれる。後者は、**II A 10型式②**において範傷Cが確認されない段階のものと酷似する。製作技法は2種確認された。**II A 10型式**と酷似する色調・胎土・焼成の資料(430、432～436)については、 ℓ 技法によって製作されたものは、確認されなかった。

IV A 12-a-2・・・(428、435)は瓦当裏面の加工をせずに接合。

IV A 12-a-3・・・(429、432～434、概要Ⅱ：第29図795)

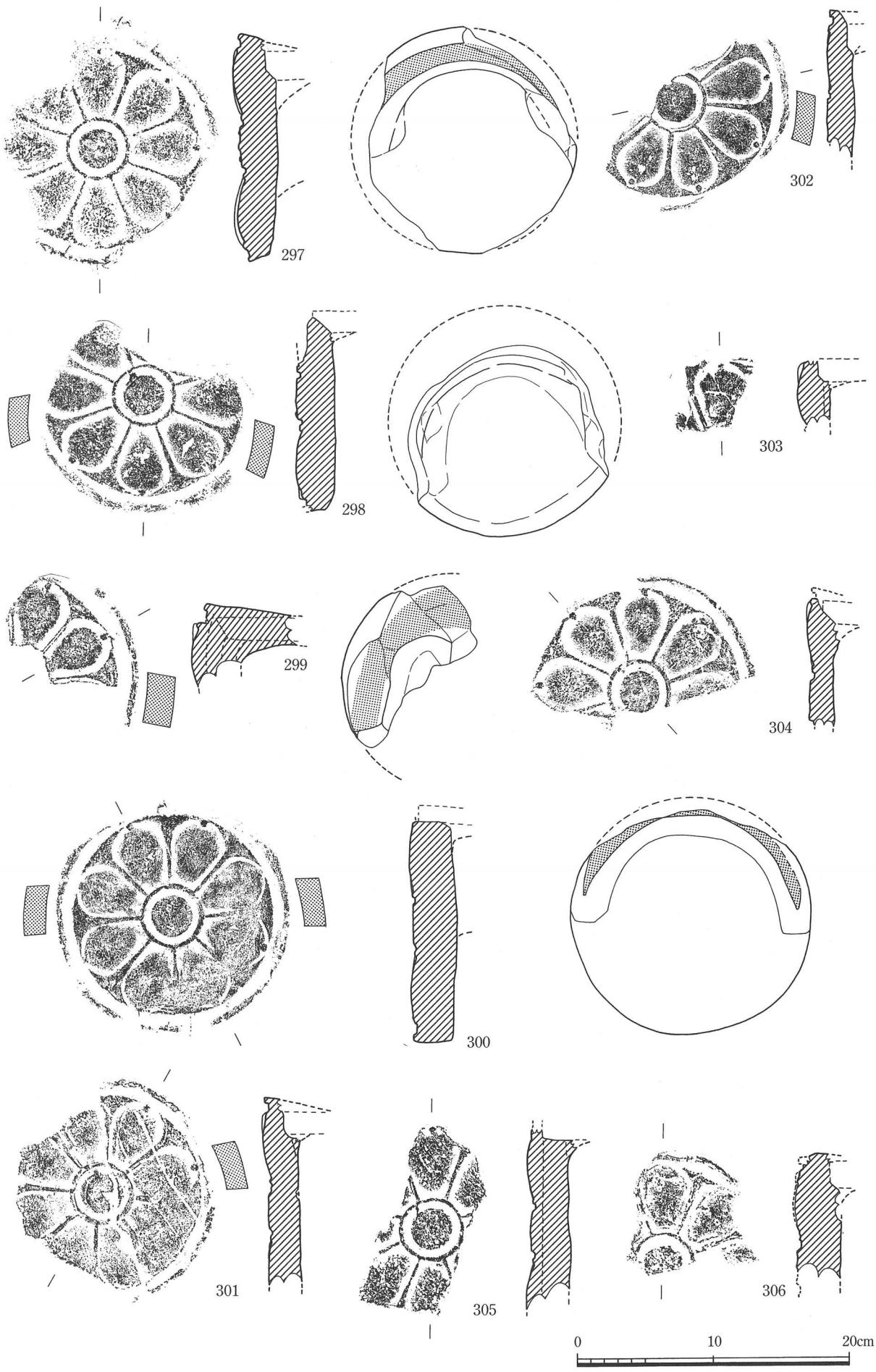
IV A 12-h・・・(430、436)(430)は丸瓦の先端の切り込みの幅は約0.5cmと狭く、切り込む間隔もかなり広い。(436)は切り込みの幅は約1cmであるが、密に切り込みを入れている。

第2段階・・・個体数は28点確認された。範傷が蓮子と珠紋に確認される段階である。色調は灰色系のものと橙褐色を呈するものに分類されるが、胎土はいずれも長石粒を含み酷似している。接続技法は3種確認される。

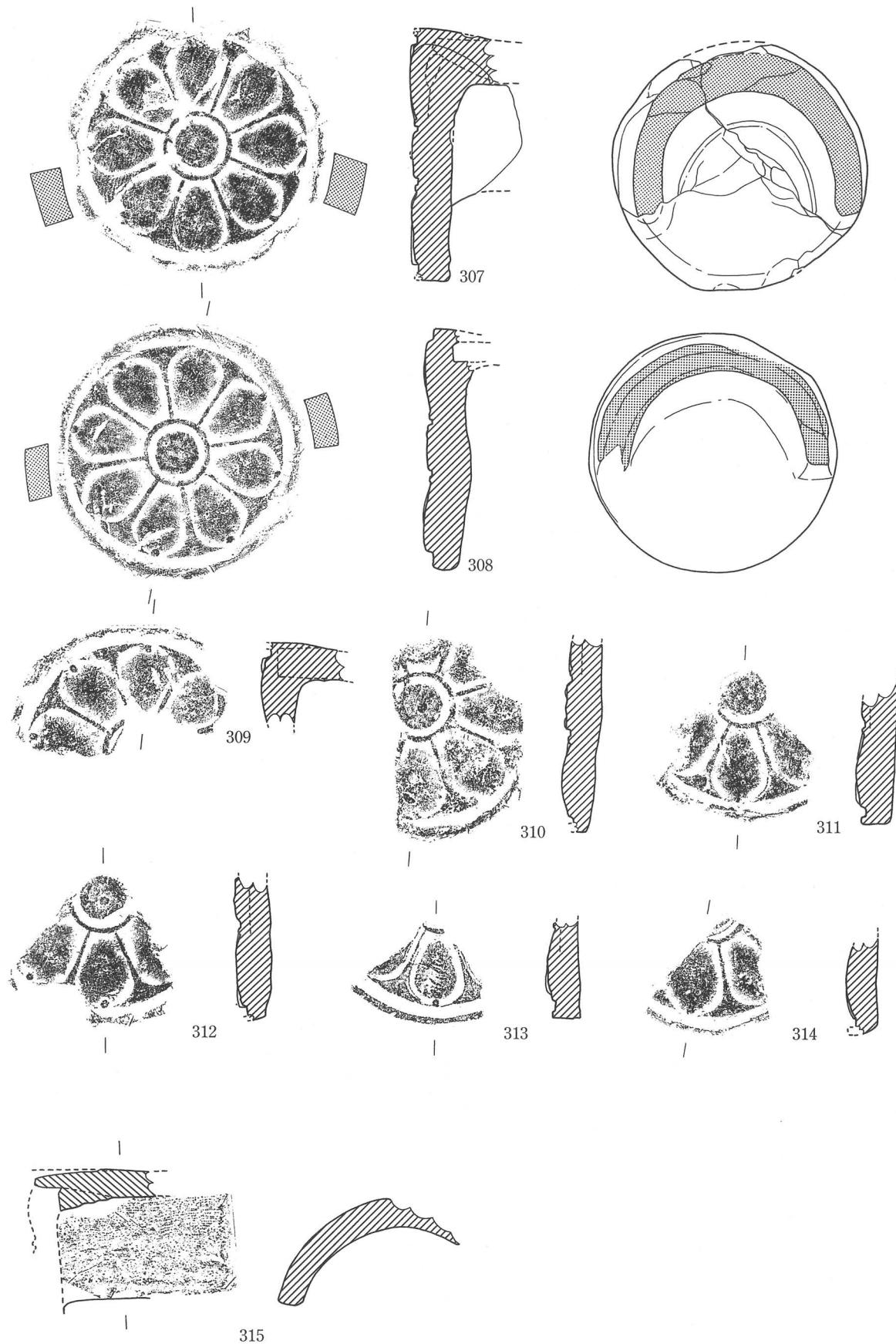
IV A 12-h・・・(437、438)丸瓦先端の切り込みは上端で幅約0.5cm、下端で幅約1cmあり、切り込みも密に行われている。

IV A 12-a-2・・・(442)

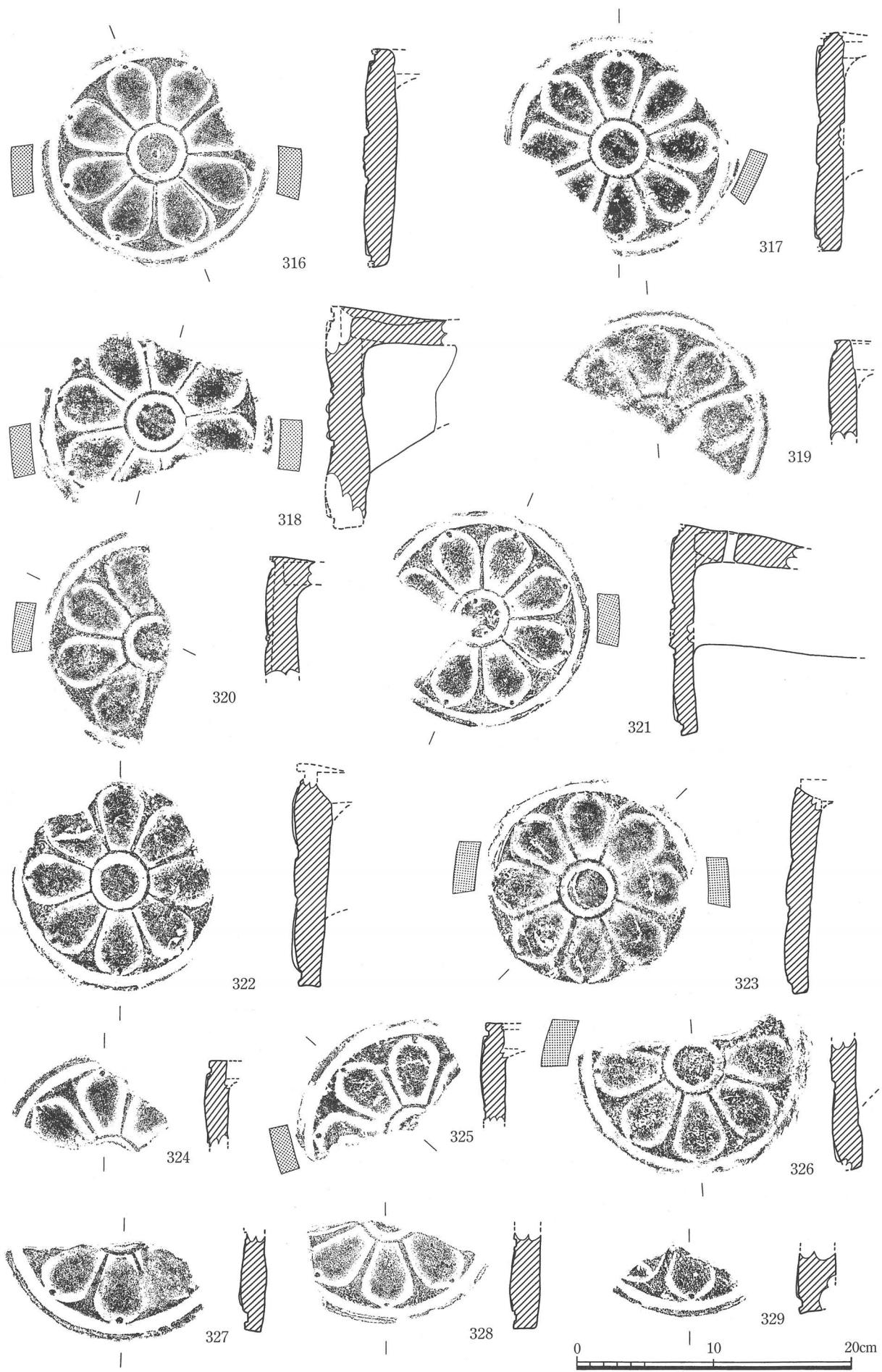
IV A 12- ℓ ・・・(439～441、443～445)すべて同様の横置式一本造りでi技法である。



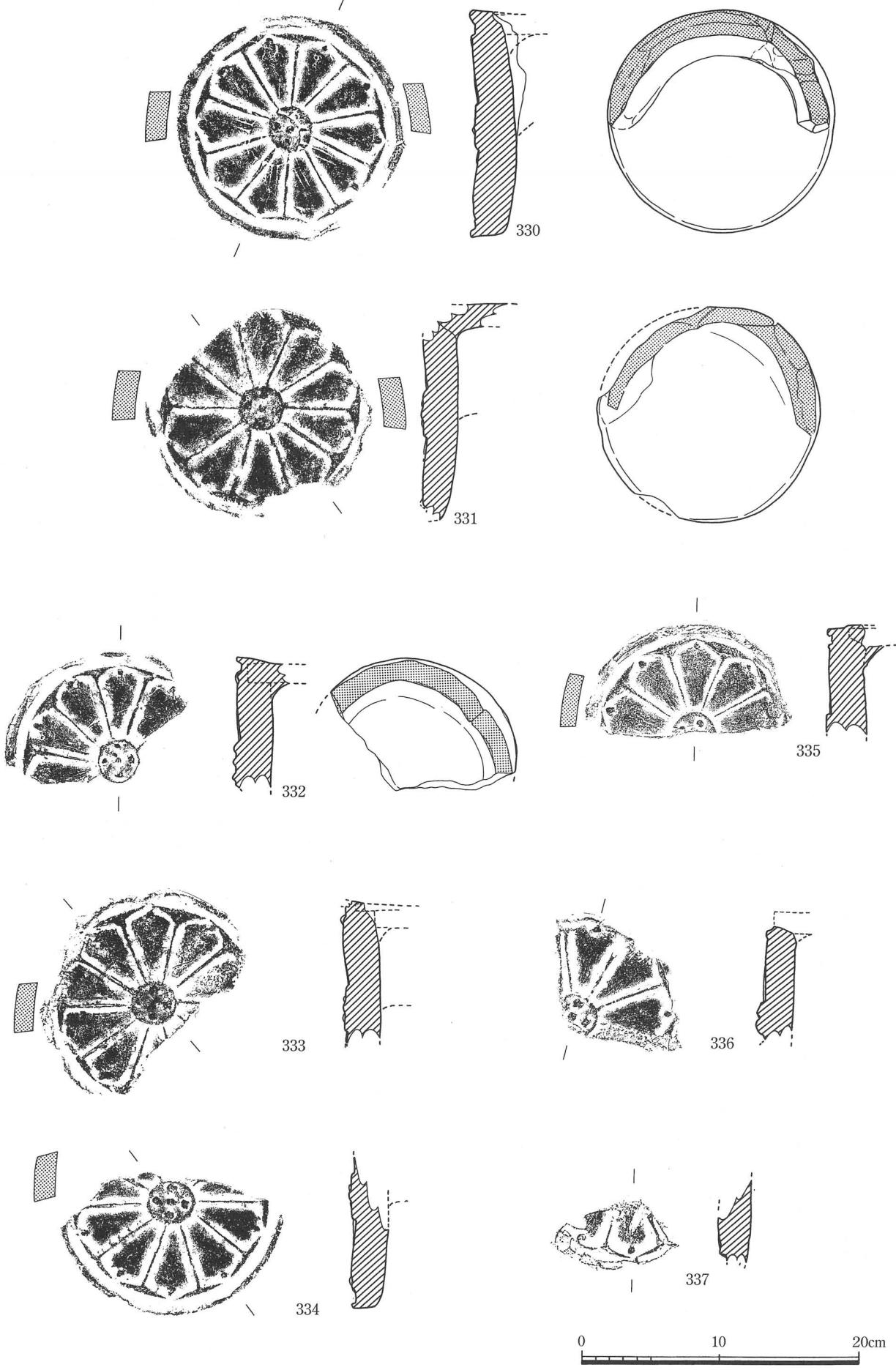
第54図 軒丸瓦実測図・1 (IA02型式)



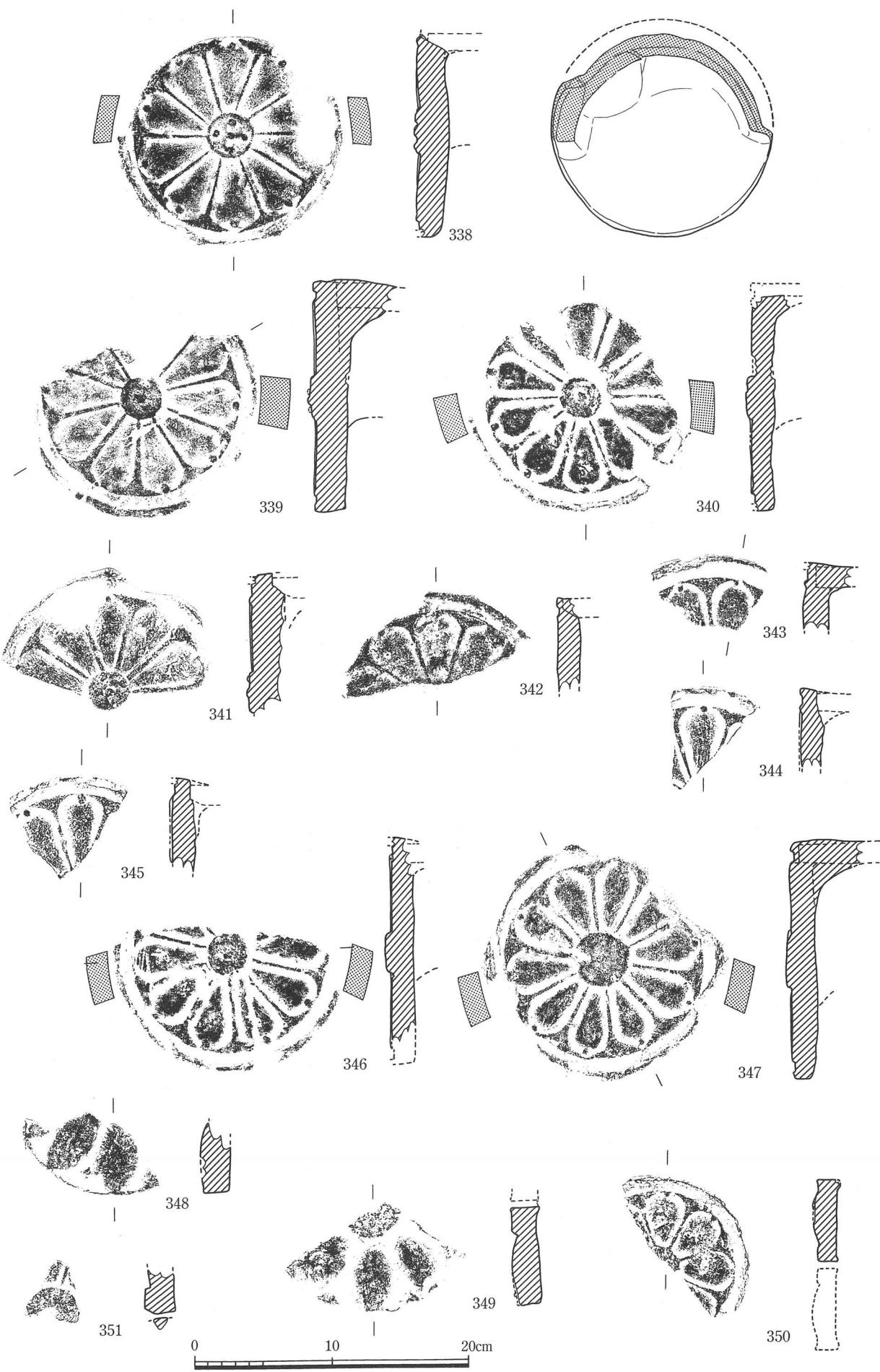
第55図 軒丸瓦実測図・2 (IA02型式)



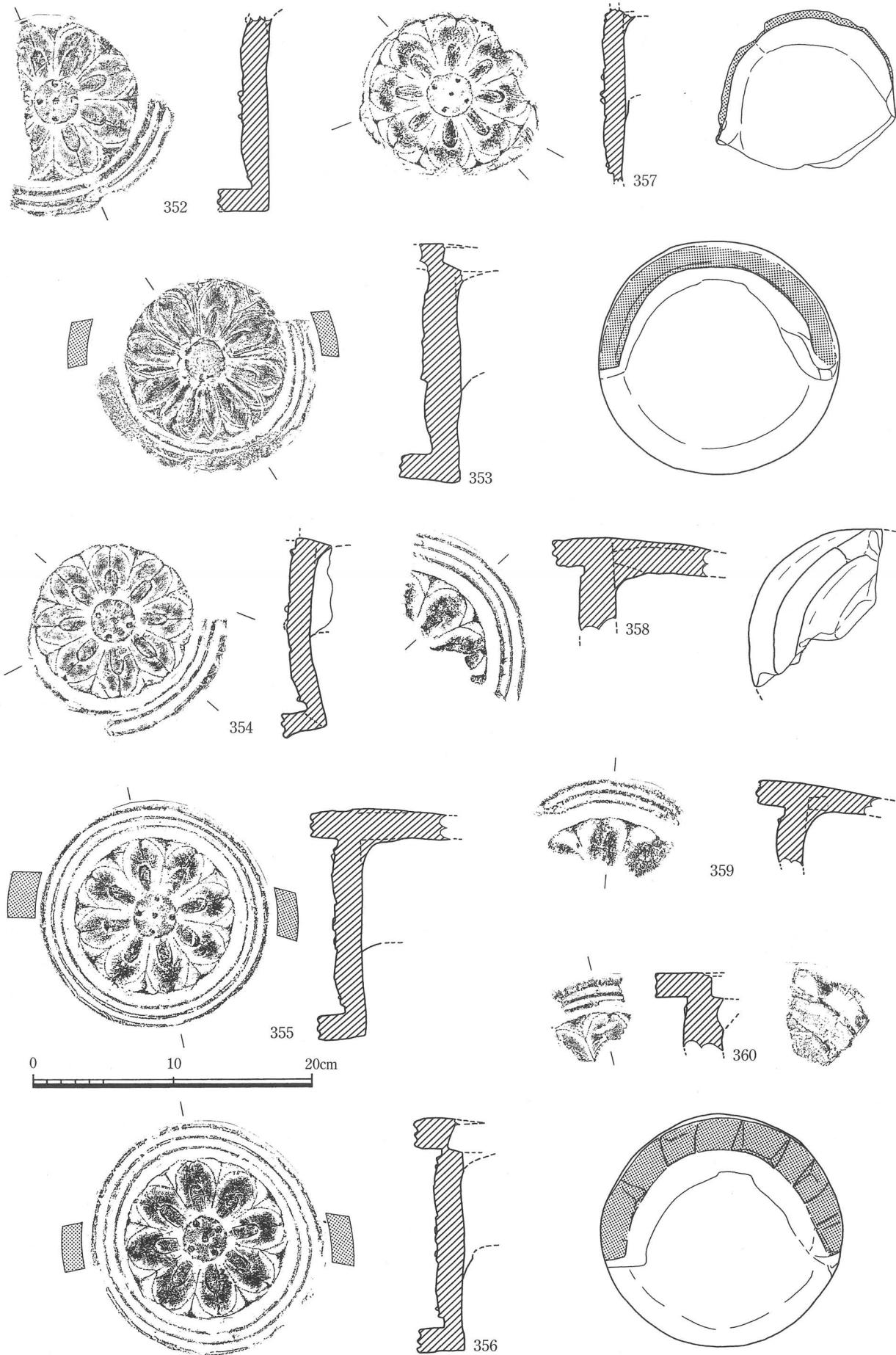
第56図 軒丸瓦実測図・3 (I A 03型式)



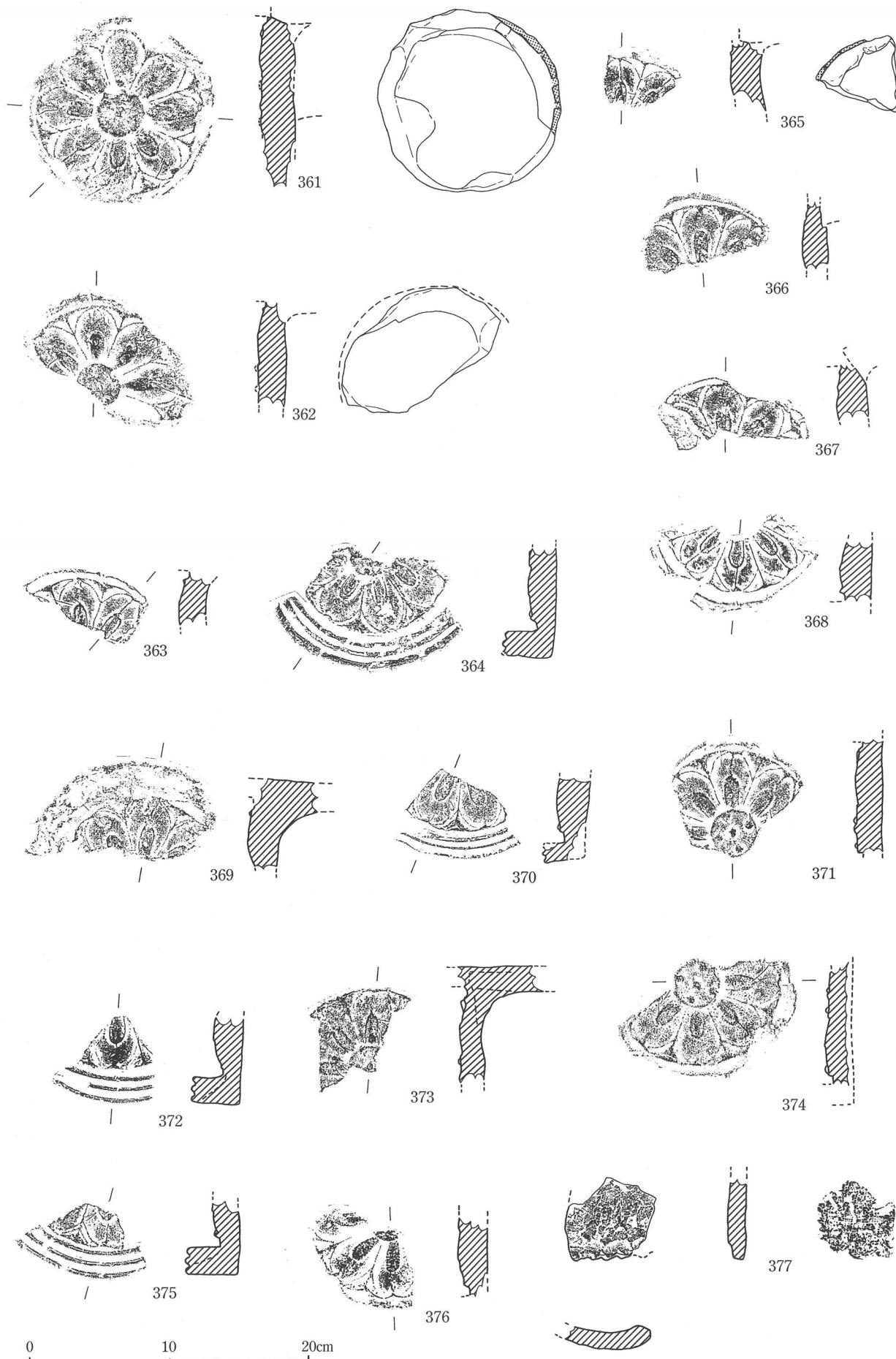
第57図 軒丸瓦実測図・4 (IA 04型式)



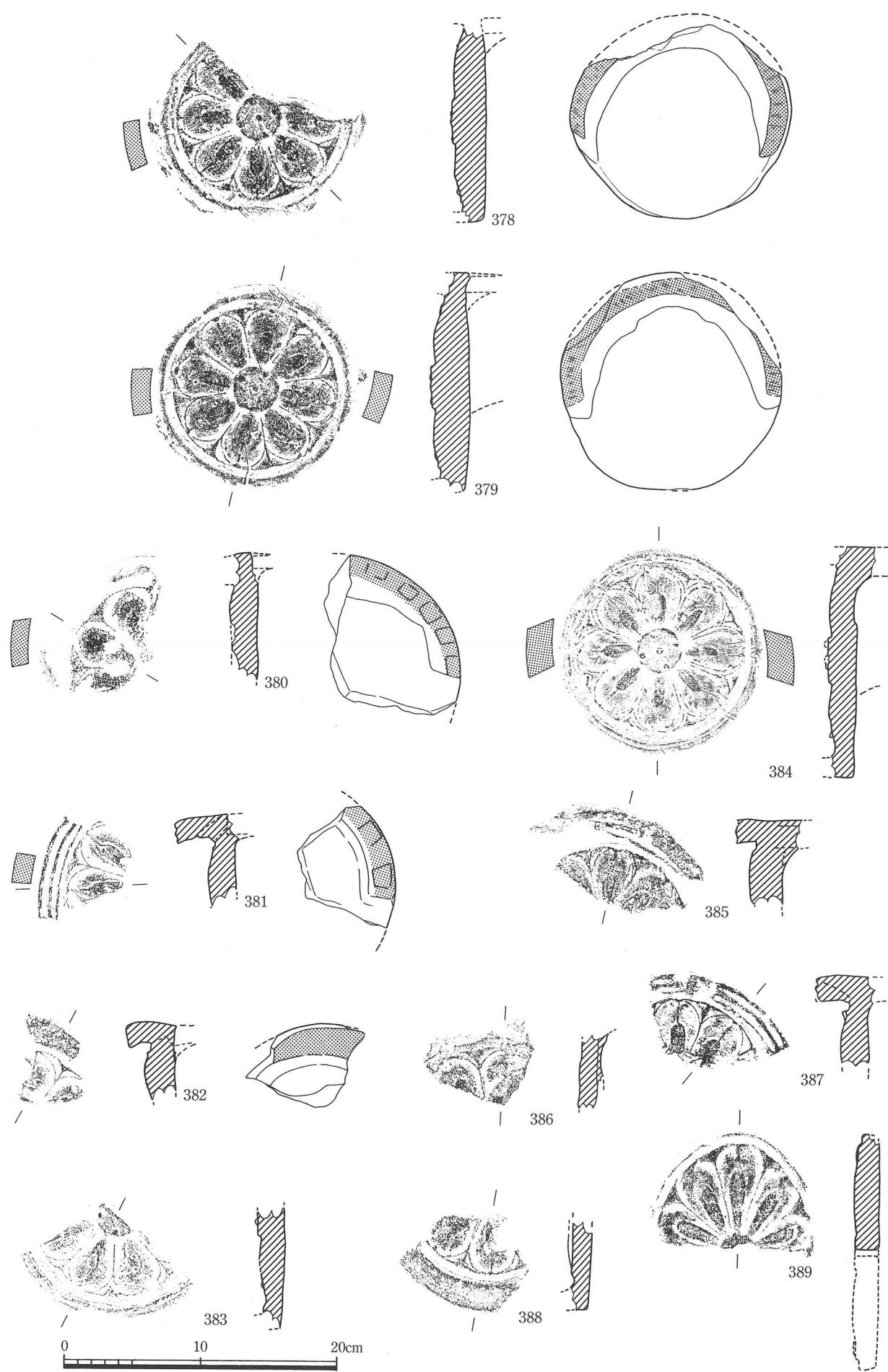
第58図 軒丸瓦実測図・5 (IA 04・05・13型式)、垂木先瓦実測図 (IC 01・02・04)



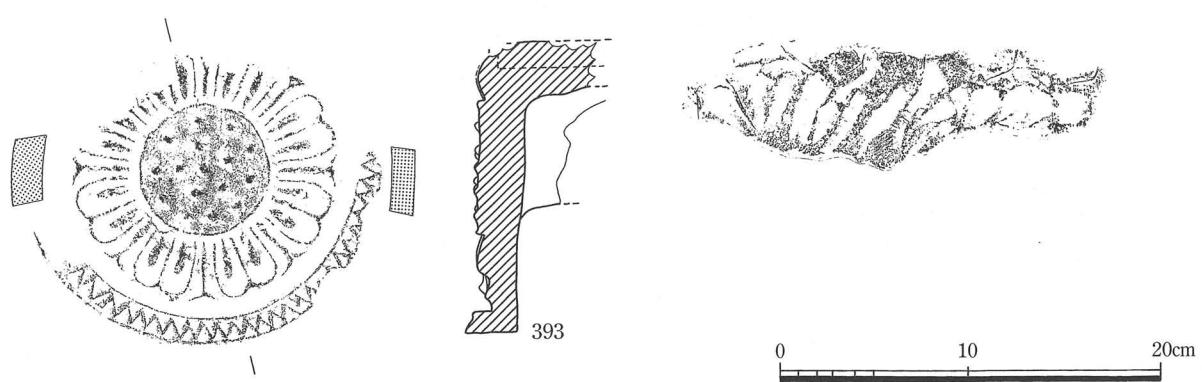
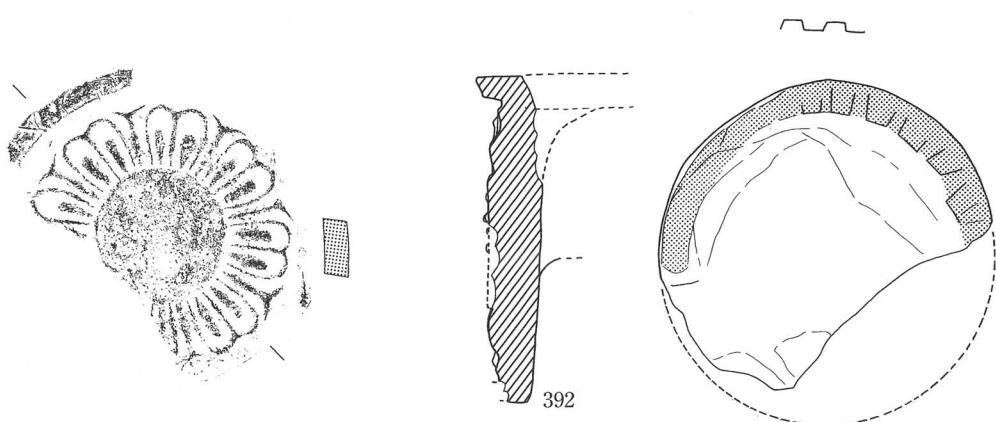
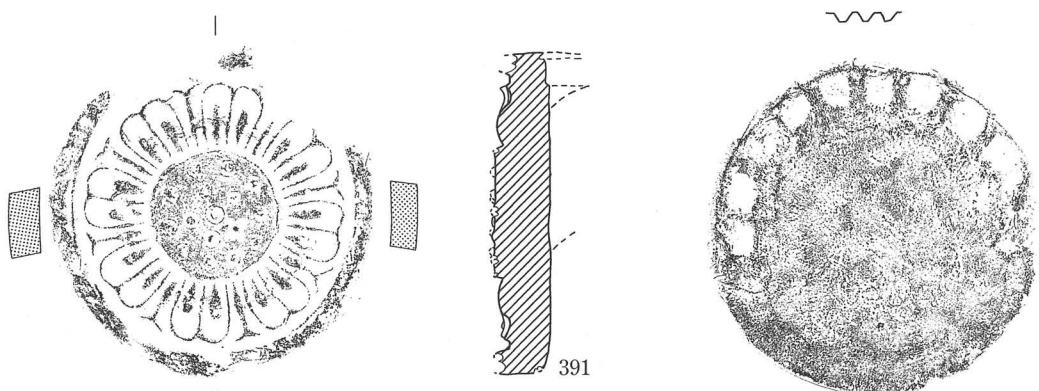
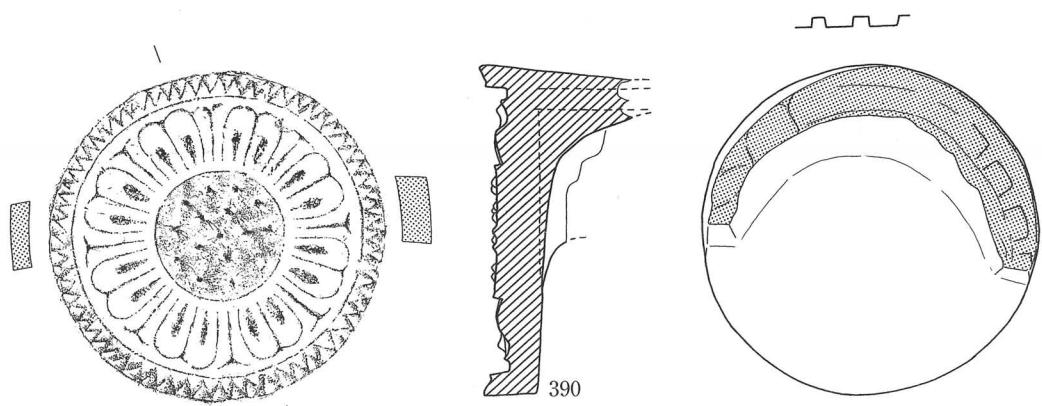
第59図 軒丸瓦実測図・6 (II A 06型式)



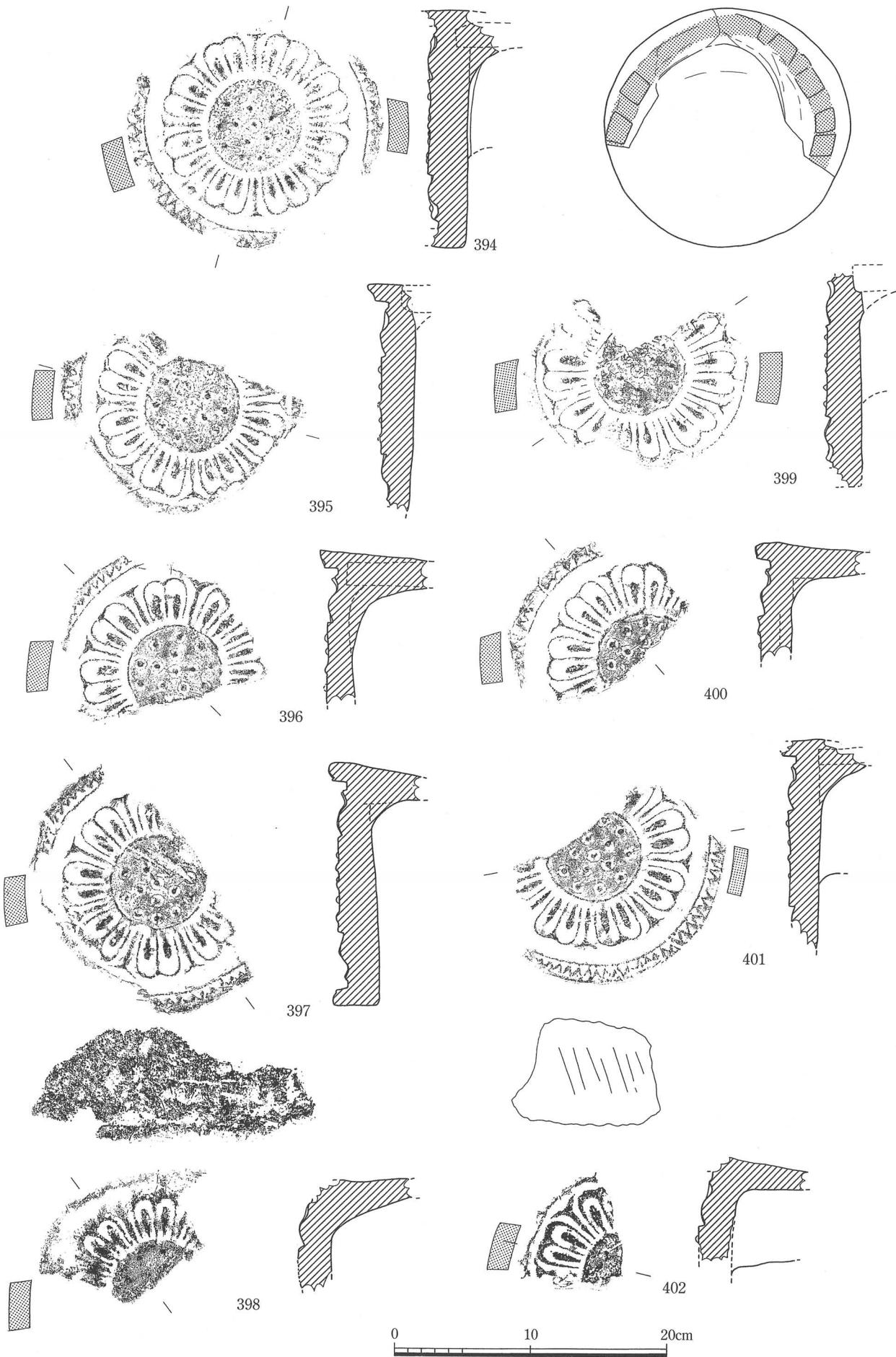
第60図 軒丸瓦実測図・7 (Ⅱ A 06・Ⅱ A 07型式)



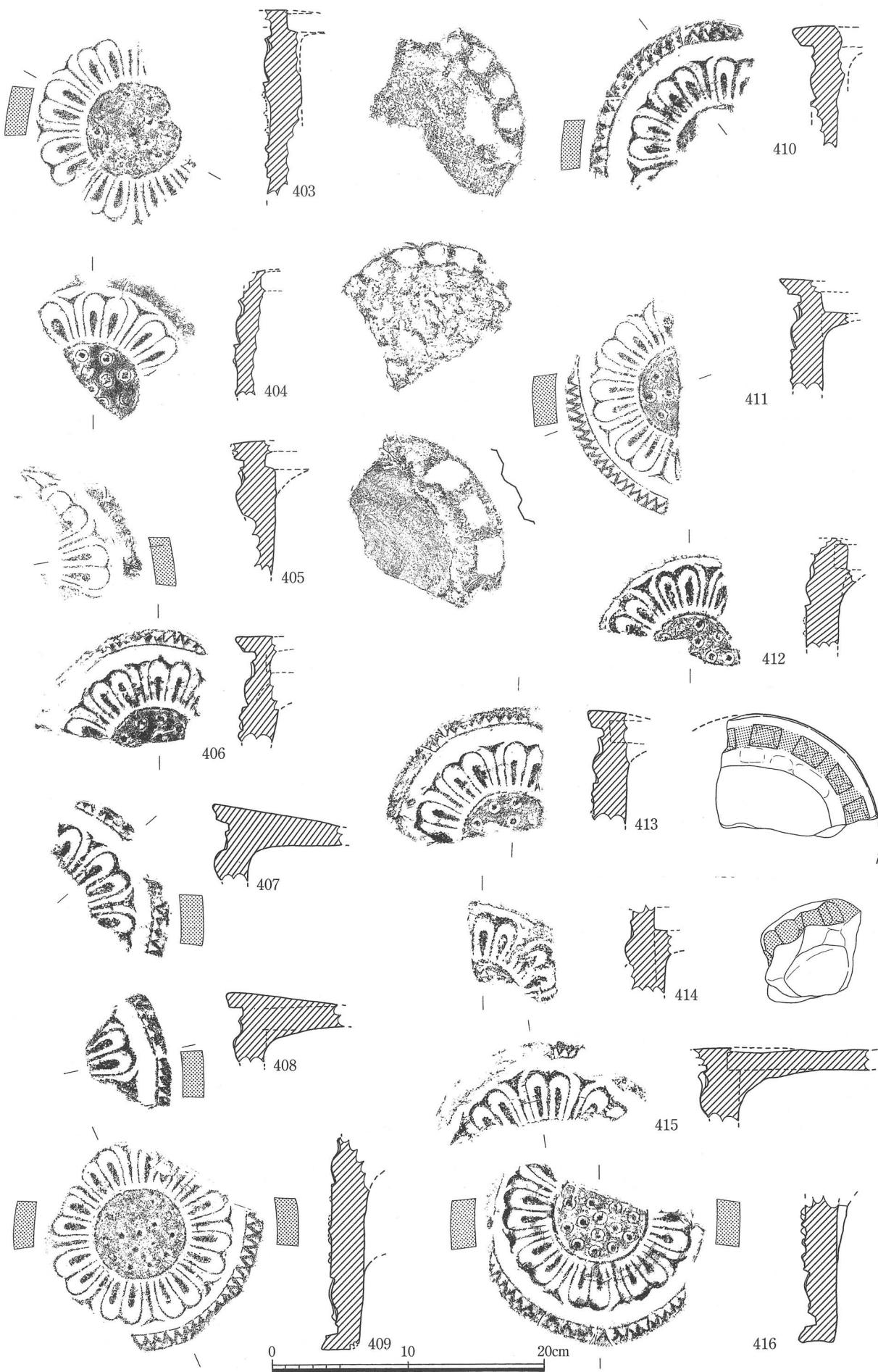
第61図 軒丸瓦実測図・8 (Ⅱ A 07型式)、垂木先瓦実測図 (Ⅱ C 03型式)



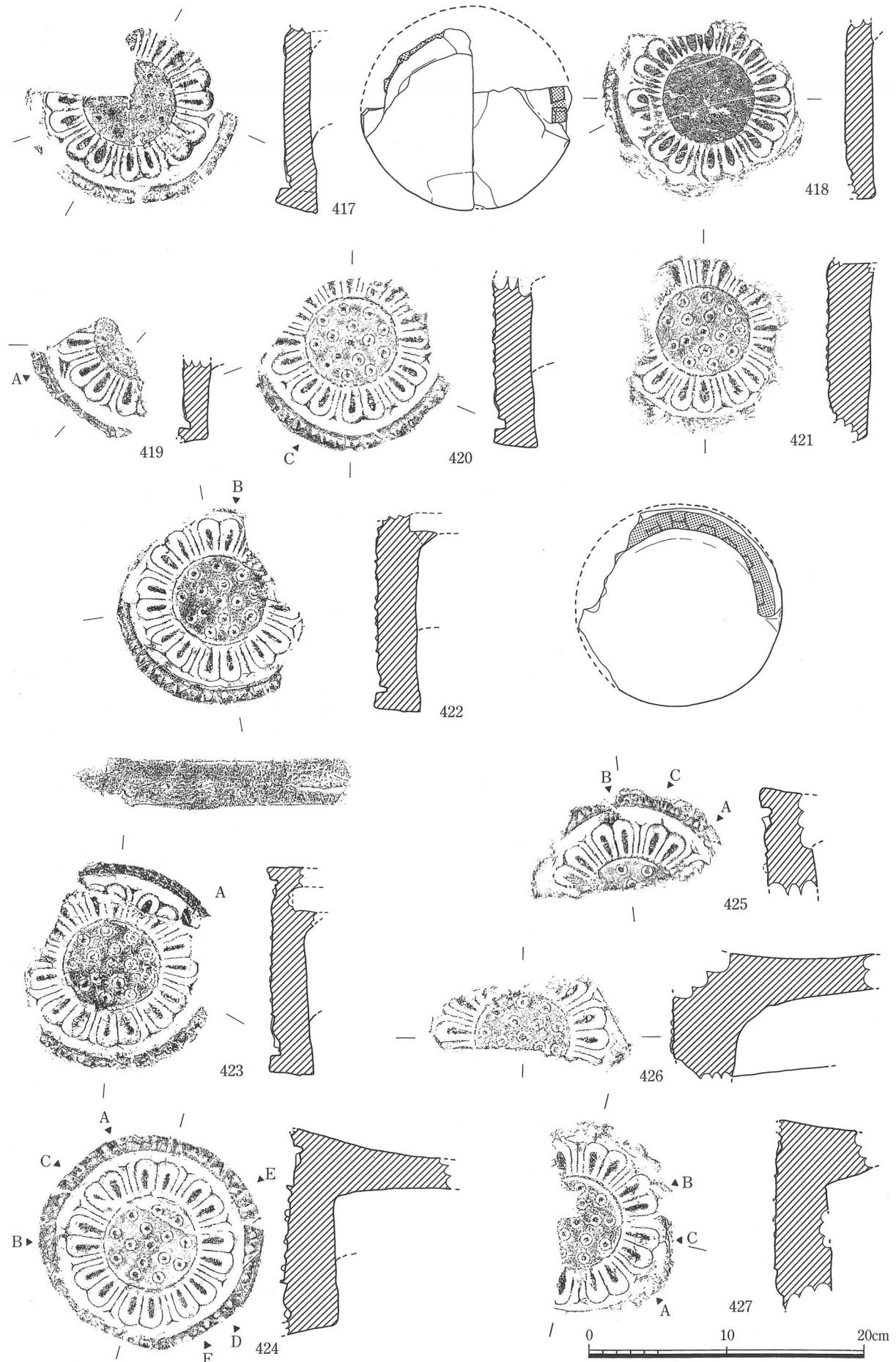
第62図 軒丸瓦実測図・9 (Ⅱ A 09型式)



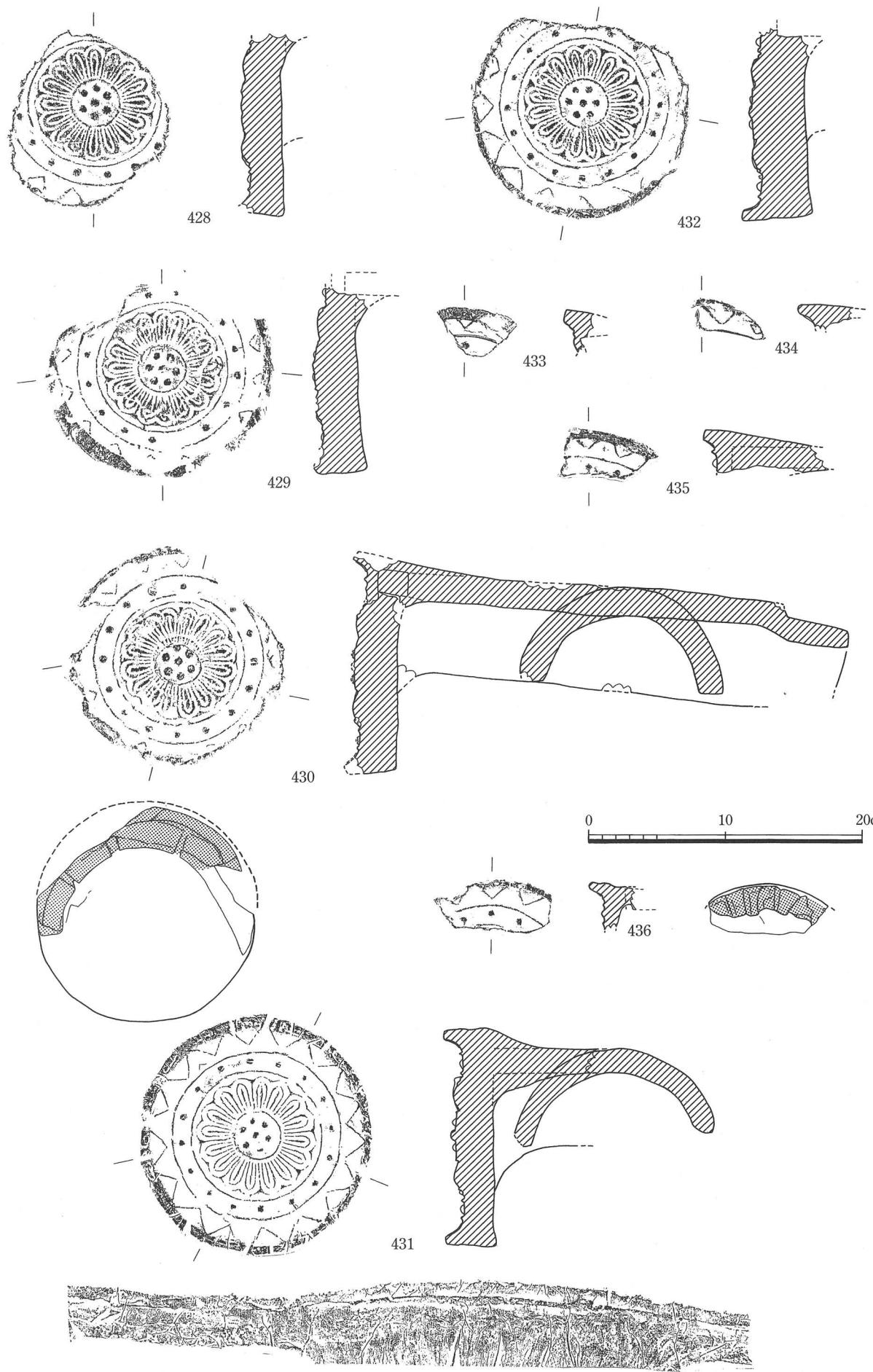
第63図 軒丸瓦実測図・10 (Ⅱ A 09型式)



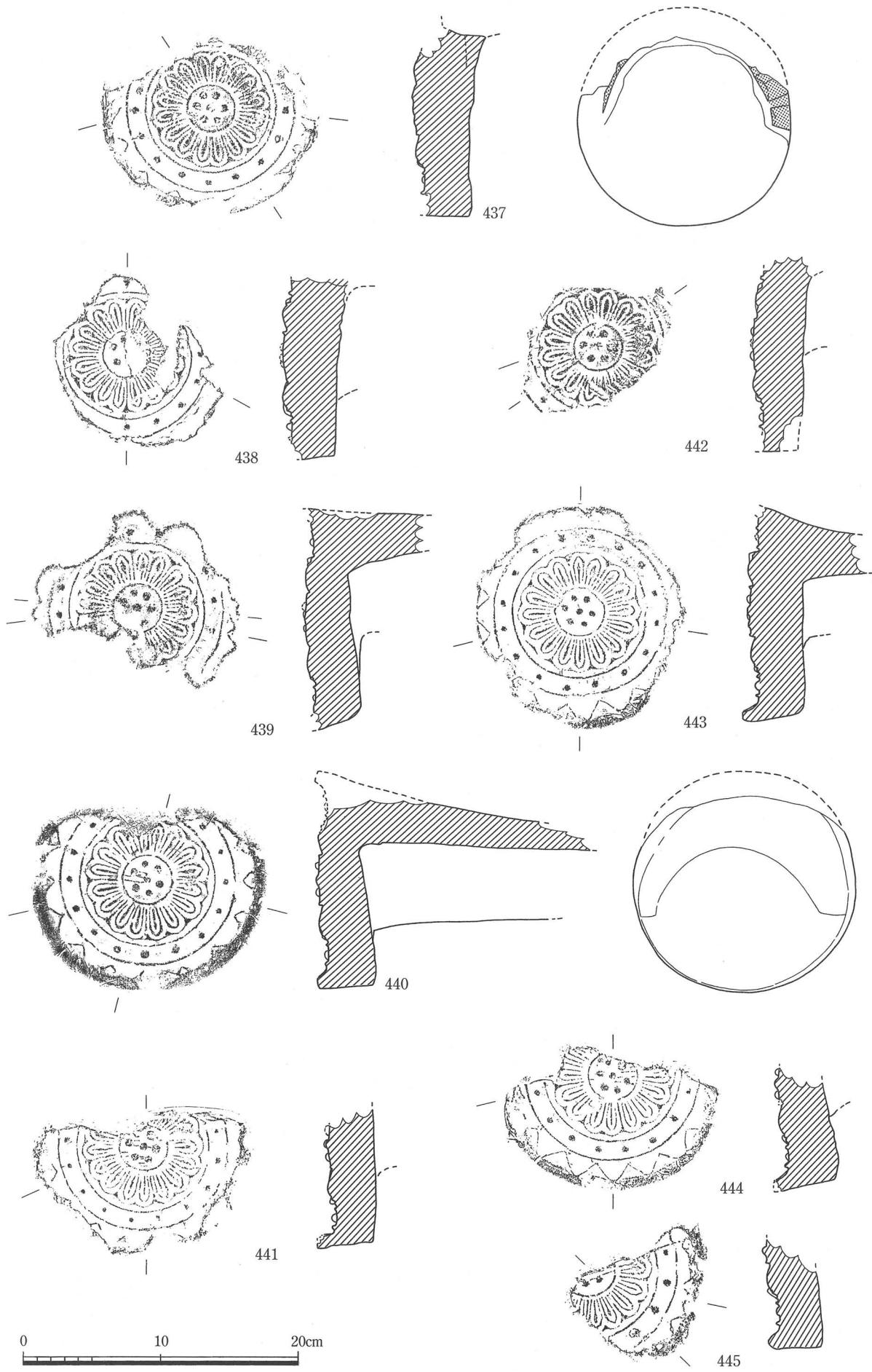
第64図 軒丸瓦実測図・11 (II A 09型式)



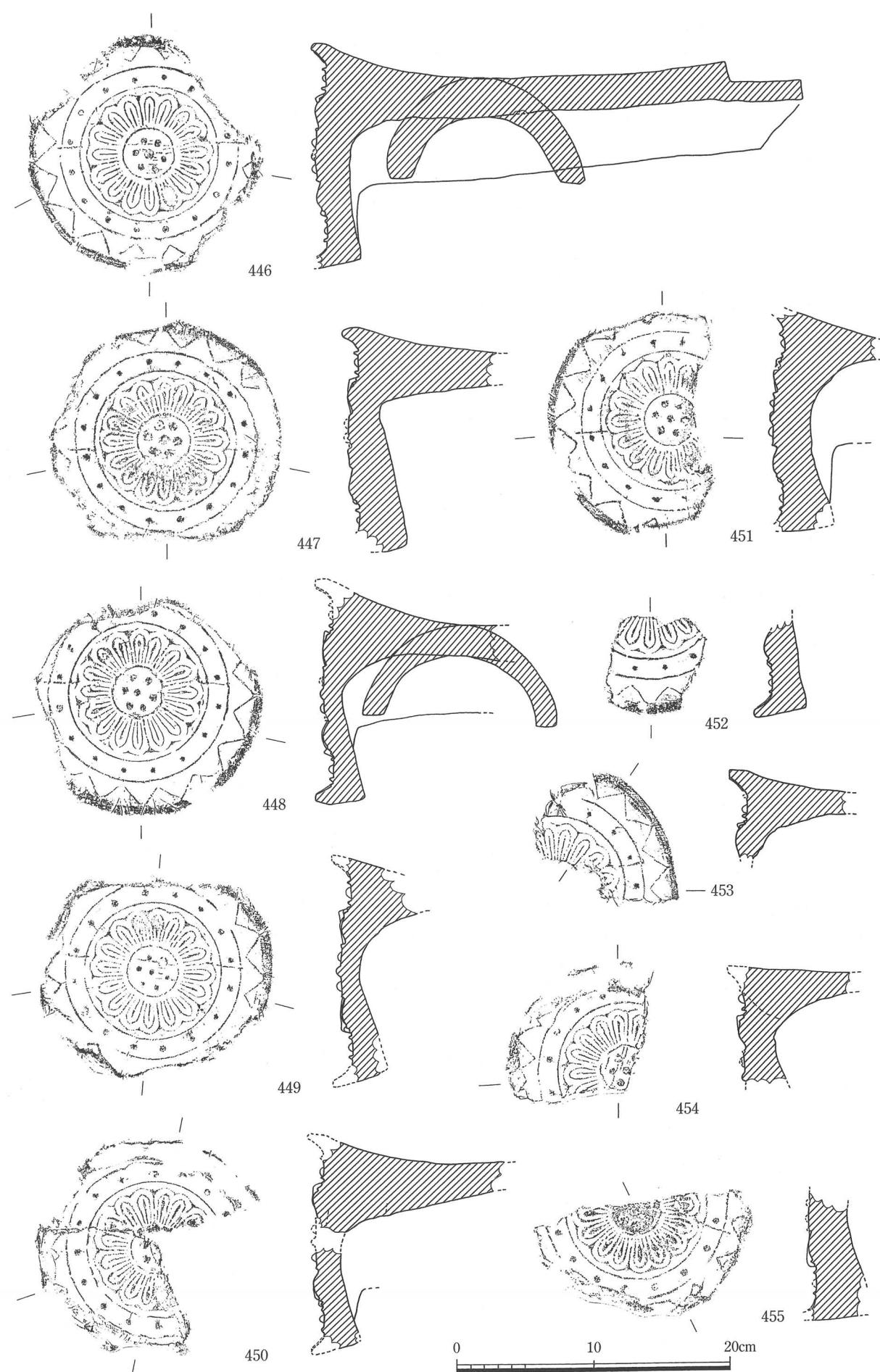
第65図 軒丸瓦実測図・12 (II A10型式)



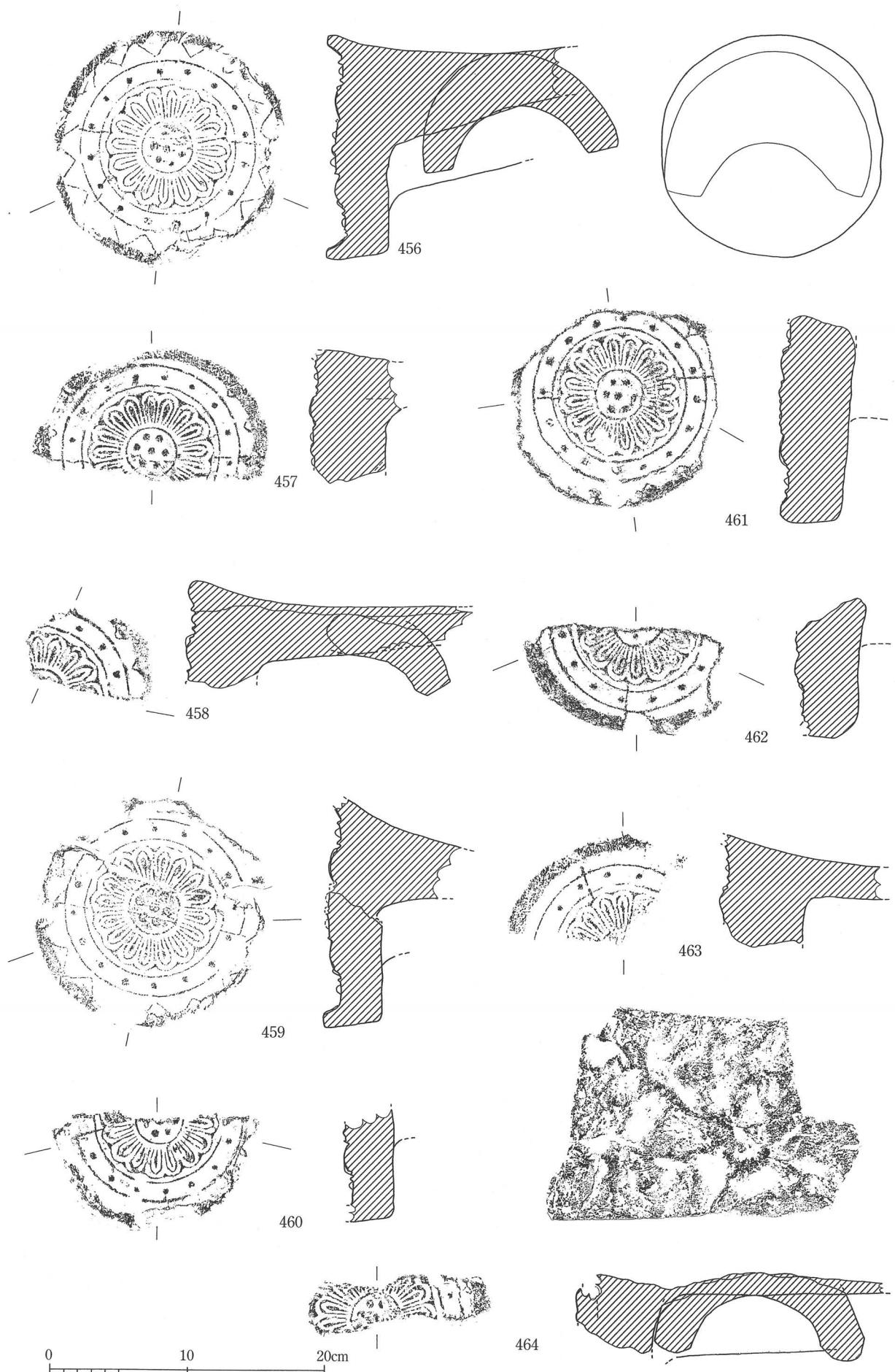
第66図 軒丸瓦実測図・13 (IV A 12型式)



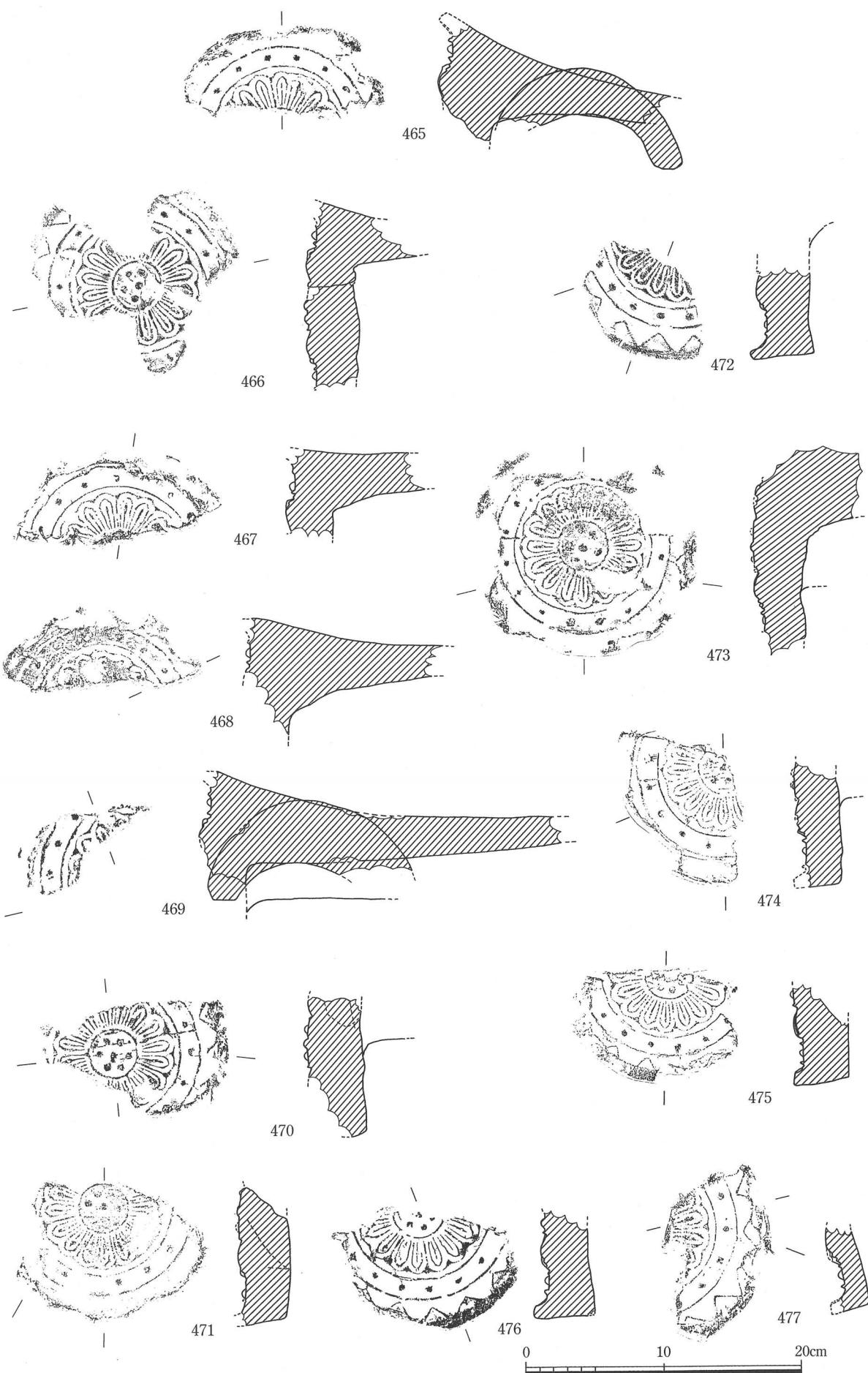
第67図 軒丸瓦実測図・14 (VA12型式)



第68図 軒丸瓦実測図・15 (IV A 12型式)



第69図 軒丸瓦実測図・16 (VA12型式)



第70図 軒丸瓦実測図・17 (IV A 12型式)

第3段階・・・個体数は70点確認された。范型が二つに割れた後に接合され製作された段階のものである。製作技法は1種のみですべて横置式一本造りである。

IV A 12-ℓ-i . . . (446~455)

IV A 12-ℓ-ii . . . (456~465)

IV A 12-ℓ . . . (466~477)

中世軒丸瓦（第71図・図版42）（478~483）

(478) は複弁で内区と外区の境に圈線が巡り、その外側を珠紋が巡る紋様をもつものと思われる。外縁は直立縁である。(479) は複弁で(478) とは違い内区と外区の境に圈線が巡らない。その外側に巡る珠紋は(478) に比べ大きい。外縁は直立縁である。

(480~483) は、60年度報告で藤澤一夫氏によって、鎌倉期の屋瓦、三巴文系類端瓦に分類されているものである。復元直径約16cmで瓦当厚約2.5cmである。

註12 毛利光俊彦「軒丸瓦の製作技術に関する一考察—范型と枷型—」『畿内と東国の瓦』平成2年 京都国立博物館

註13 大阪府教育委員会『錦織遺跡発掘調査概要』1985年3月

第3節 軒平瓦

飛鳥時代軒平瓦（第71図・図版43）（484~486）

平瓦の広端部側面に1条の沈線を施す資料が確認された。(484) の凹面側では、桶枠板痕跡がはっきりと確認され、枠板綴紐痕跡も明瞭に残る。沈線は側面の中央に幅0.2cmで1条施される。色調は灰色を呈し、胎土は長石他砂粒を多く含む。焼成はやや軟質である。(486) も同様に広端部側面に幅0.4cmで1条沈線が施される。色調は黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も堅緻である。(485) も同様に広端部側面に約0.2cmで1条沈線が施される。色調は灰色を呈し、胎土は精良で焼成も堅緻である。

(井西)

II B 01型式a（第72~74図・図版43、44）（487~520）

弧線の頂部が平坦なものである。胎土は長石、石英を含むことは共通しており、色調は灰色ないし灰褐色を呈するものが多い。わずかに橙褐色ないし茶褐色を呈するものがあるが、これにはクサリ礫も含んでいる。頸は平瓦の端部に沿わせて粘土帯を張り付けている。平瓦と頸の接合面はタタキ目をすり消しているもの、格子タタキが残るもの2種がある。頸段部を成形する際の切り込みが平瓦部まで及んでいるもののがかなりあり、その部分で破損しているものが多い。分割の方法は、平瓦凹面側の分割界線にそって切り込みを入れた後割り離す通常の平瓦の分割法と同じであるが、大半が事前に頸部凸面側に分割部に合わせてV字形の切り込みを入れている。他にわずかではあるが、頸部の切り込みがV字形ではなく桶の円周に直交する1条のみのものもある。

II B 01型式 b (第74、75図・図版45) (521~538)

弧線の頂部が丸みを帯びたものである。胎土、色調はII B 01 a 型式と同様である。平瓦と頸の接合面はタタキ目をすり消すもの、格子タタキが残るものに加えて、すり消しの後ヘラ状工具による沈線を施すものの3種が認められる。頸段部の切り込みが平瓦まで及ぶものは見た限りではないと思われる。分割方法はII B 01型式 a と共通している。

II B 01型式 a と II B 01型式 b は同じ挽き型を使用しているものと考えられ、重弧の形態の違いは挽き型の摩滅によるものと思われる。また、軒丸瓦との共伴関係は明らかにできなかった。詳細については第5章に述べる。

II B 02型式 a (第76・図版46) (540~554)

重弧の弧線と凹線の幅がほぼ等しいものである。弧線の頂部はいずれも丸みを帯びており、II B 01型式のように挽き型の形態による細分はできない。胎土はII B 01型式とよく似ているが、色調は橙褐色を呈するものの割合が高く、黒色を呈するものもある。頸の接合法はII B 01型式 a と同様である。頸と平瓦の接合面は格子タタキが残るものとタタキ目をすり消しているものの2種が認められる。分割方法はII B 01型式と同様である。

色調が黒色を呈するものは、頸の断面形が端部近くで外反する特徴を持つが、山田寺式軒丸瓦II A 06型式の黒色を呈するものと胎土、焼成が似通っており、共伴関係にあるものと考えられる。他の資料については軒丸瓦との共伴関係は明らかになっていない。

II B 02型式 b (第76図・図版46) (539)

瓦当部が完存する。分割の際に頸にV字形の切り込みを入れるが、側縁には分割破面が残る。大阪大学保管資料(12)と技法、胎土、色調ともきわめてよく似ている。瓦当面の3ヵ所に粘土の小塊を貼り付けており、特異である。

II B 05型式 (第77図・図版46) (555~570)

弧線に比して凹線の幅が広いものである。きわめて挽きの浅いものが含まれている。胎土、色調はII B 02型式と似かよっている。頸の接合もII B 02型式と同様で、接合面に格子タタキ目を残すものとタタキ目をすり消すものの2種が認められる。この型式の中にも黒色を呈し、頸が外反するものが含まれており、II A 06型式との共伴関係が確認できた。分割の方法は大半がII B 01・02型式と同様であるが、頸部に切り込みを入れず、分割破面が残るものもわずかに見られる。

(広瀬)

IV B 06型式 (第77図・図版46) (571)

本型式は現時点では1点の資料しか確認されていない。(571)は60年度報告で「第3B期類均齊唐草紋系類・第1形式」にあたる資料で、山崎信二氏は興福寺創建軒平瓦6671Aとほぼ同範が間違いないものと指摘されている(註14)。

IV B 03型式 (第78~82図・図版47、48) (572~604)

平城宮6664型式系の瓦当紋様をもつものである。同範ではないが、後期難波宮にも類例が見ら

れる。花頭形の中に中心飾りをもち、3回反転の均齊唐草紋の紋様をもつ。唐草第3単位の先端が脇区界線に接する。中心飾りの花頭基部は上外区基部界線に接しない。ほとんどが曲線顎であるが、段顎をもつ資料も存在する（603、概要Ⅱ：第35図923～925）。（587、600）は、平瓦凸面に横方向に朱線が確認された。

IVB04型式

平城宮6667型式系の瓦当紋様をもつものである。花頭形の中に中心飾りをもつ、4回反転の均齊唐草紋である。中心飾りの花頭基部は上外区基部界線に接しない。IVB03型式に比べ出土数が少ない。（概要Ⅱ：第36図932～935）はすべて約5cmの段顎である。山崎氏の分類による6667A 3段階のもので、歌姫西瓦窯産であると指摘されている。（註14）

中世軒平瓦（第82図）（605～612）

60年度報告で藤澤一夫氏が、鎌倉期類の連珠文系類端瓦に分類されているものである。

註14 山崎信二 1994『平城宮・京と同範の軒平および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察』

1993年度文部省科学研究費一般研究C

（井西）

第4節 丸瓦

丸瓦は、飛鳥時代から奈良時代までのものが出土した。出土地点が比較的原位置を保っていると考えられるA区瓦溜と、C区南門瓦落ち出土の奈良時代の瓦については、第5章の考察で扱うので、ここでは飛鳥～白鳳時代の丸瓦についての記述のみにとどめる。

無段式丸瓦（第83、89図・図版53、54、56）（613～625、677～682、816）

飛鳥時代と白鳳時代の無段式丸瓦は、出土資料の制約などにより、明確に分類することは困難であるが、製作技法の差異と軒丸瓦とのセット関係等から可能な限りの分類を試みた。まず、丸瓦を型木から切断する際の分割方法で2種に分類できる。

1類 型木から丸瓦を切断する時に、凸面側から切り込みをいれるもの。1類については、胎土・色調からさらに2種に分類される。

1類-a（616） 色調は灰白色系を呈し、胎土は長石・石英を含み、焼成は堅緻である。凸面は、タタキ板の痕跡が確認されず、丁寧にナデが施されている。分割界線は、幅約0.3cmで、撲りの太い紐状のものが使用されていたようである。破片も含め実見した資料については、切断後の側面についての2次調整は行っていない。

1類-b（613～615、617、620） 色調は青灰色系で胎土は長石・石英を含み焼成は堅緻である。側面の凹面側は、先端から1～2.5cm程ヘラケズリが施され、いずれの個体も分割界線が確認されない。凸面は、丁寧にナデ調整が施されている資料がほとんどであるが、幅0.2～0.3cmの平行タタキの痕跡が観察されるもの（615）も確認された。（620）の資料は、平行タタキが観察されるが、凸面がかなりすり消されておりよくわからない。（615）の凸面に観察された平行タタキは大阪大学保管資料（3）で確認された平行タタキと同様であり、本資料はIA03型式とのセット



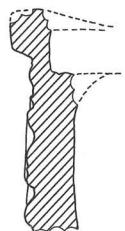
478



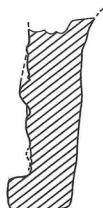
479



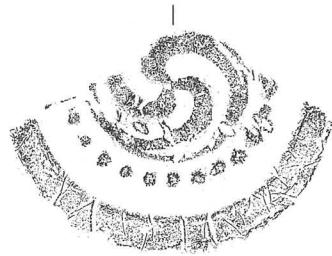
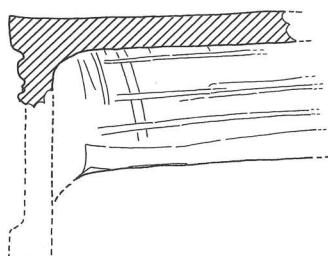
480



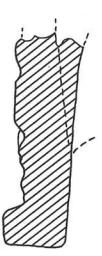
481



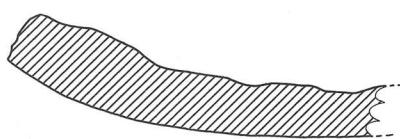
482



483



0 10 20cm



485

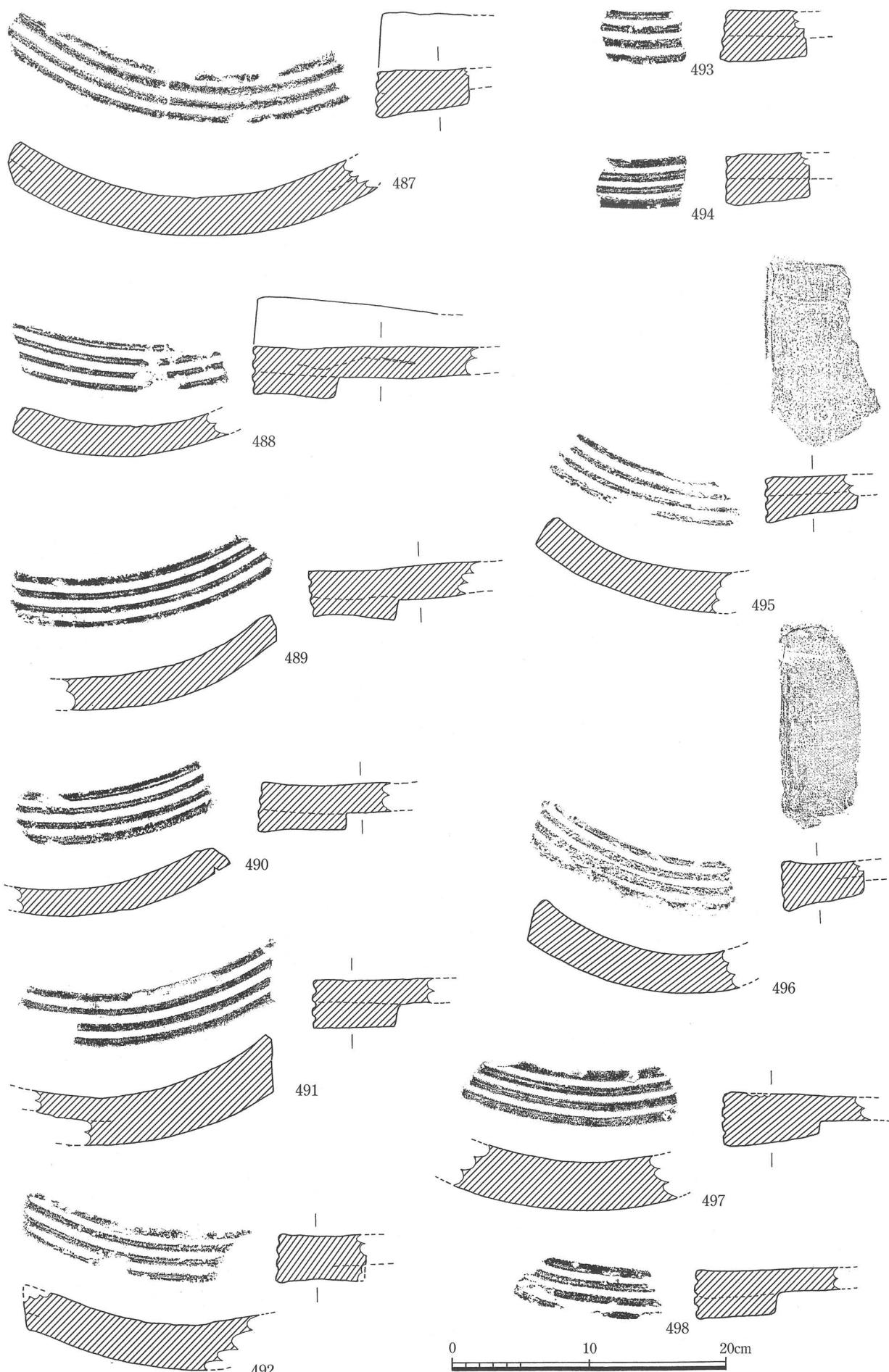


487

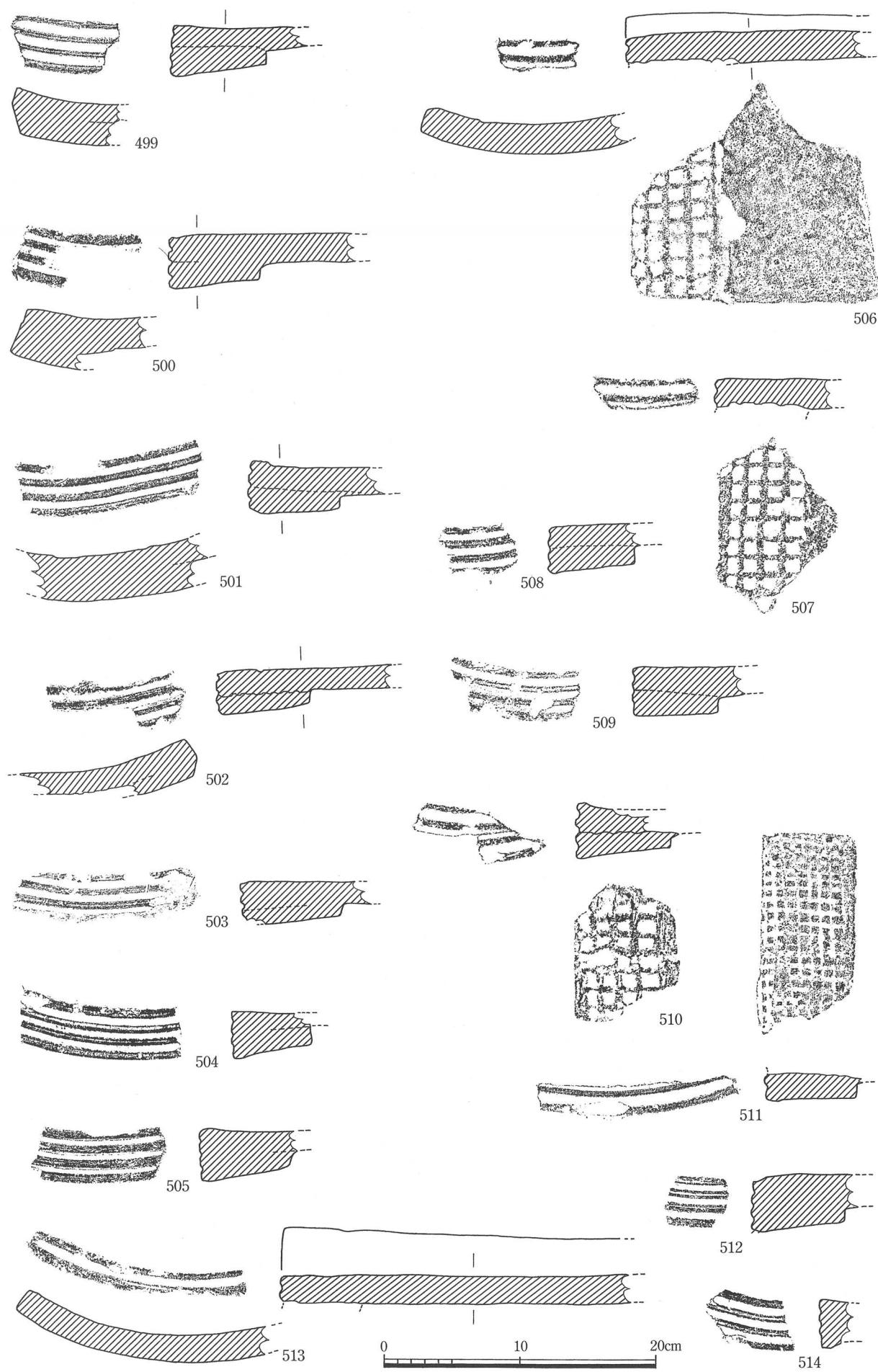


488

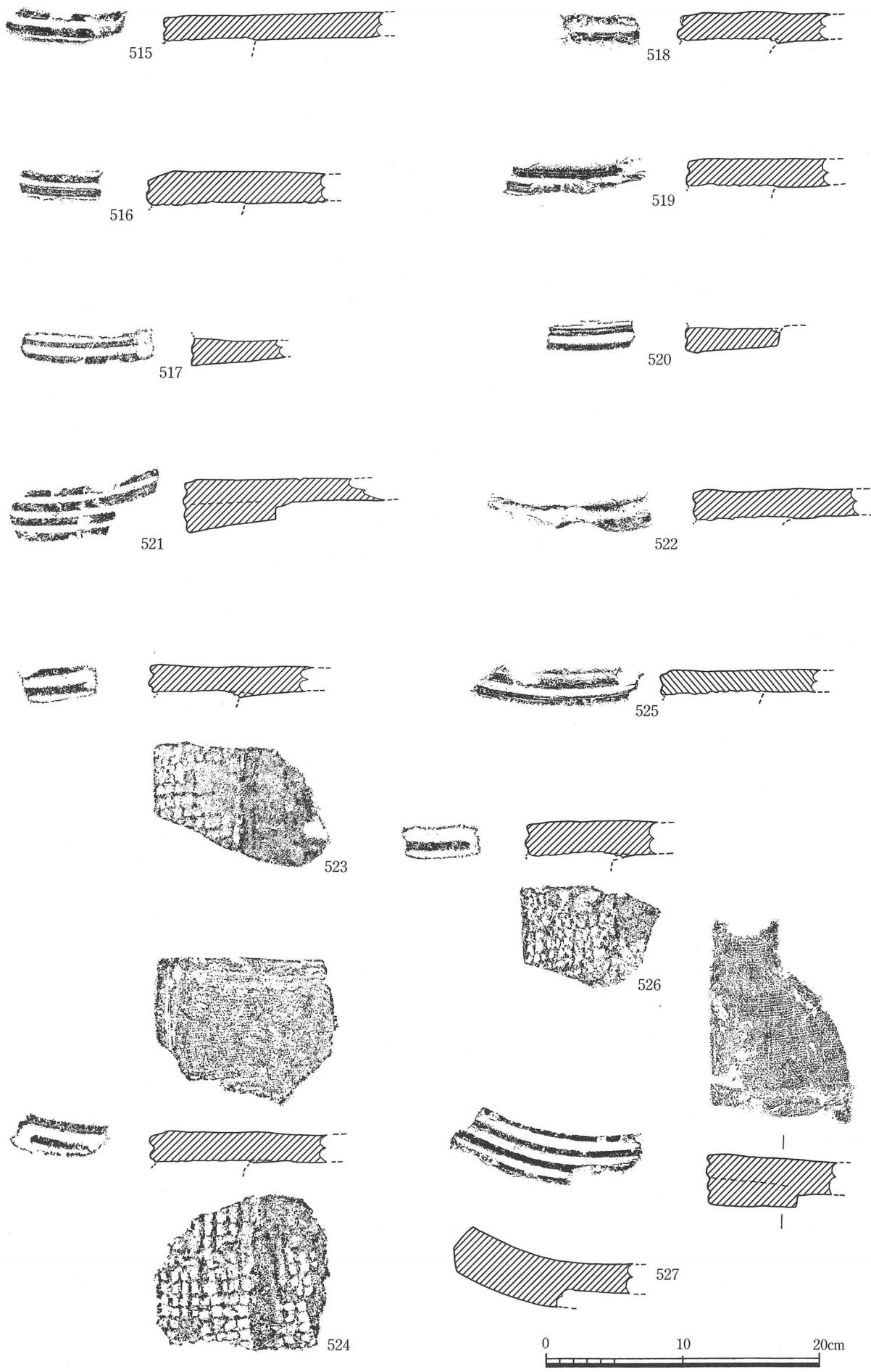
第71図 軒丸瓦実測図・18 (平安時代～中世)、軒平瓦実測図・1 (飛鳥時代)



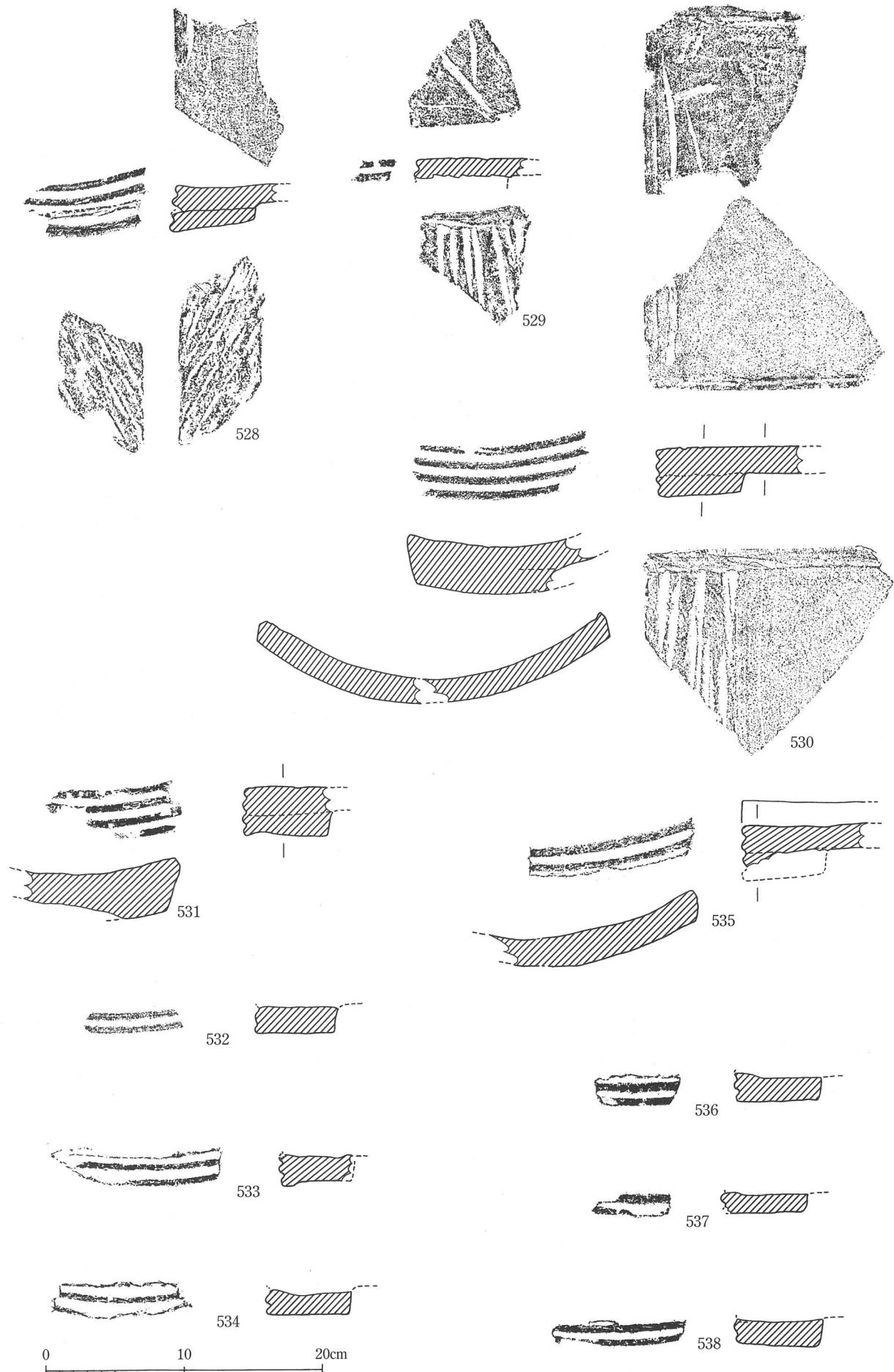
第72図 軒平瓦実測図・2 (Ⅱ B 01型式 a)



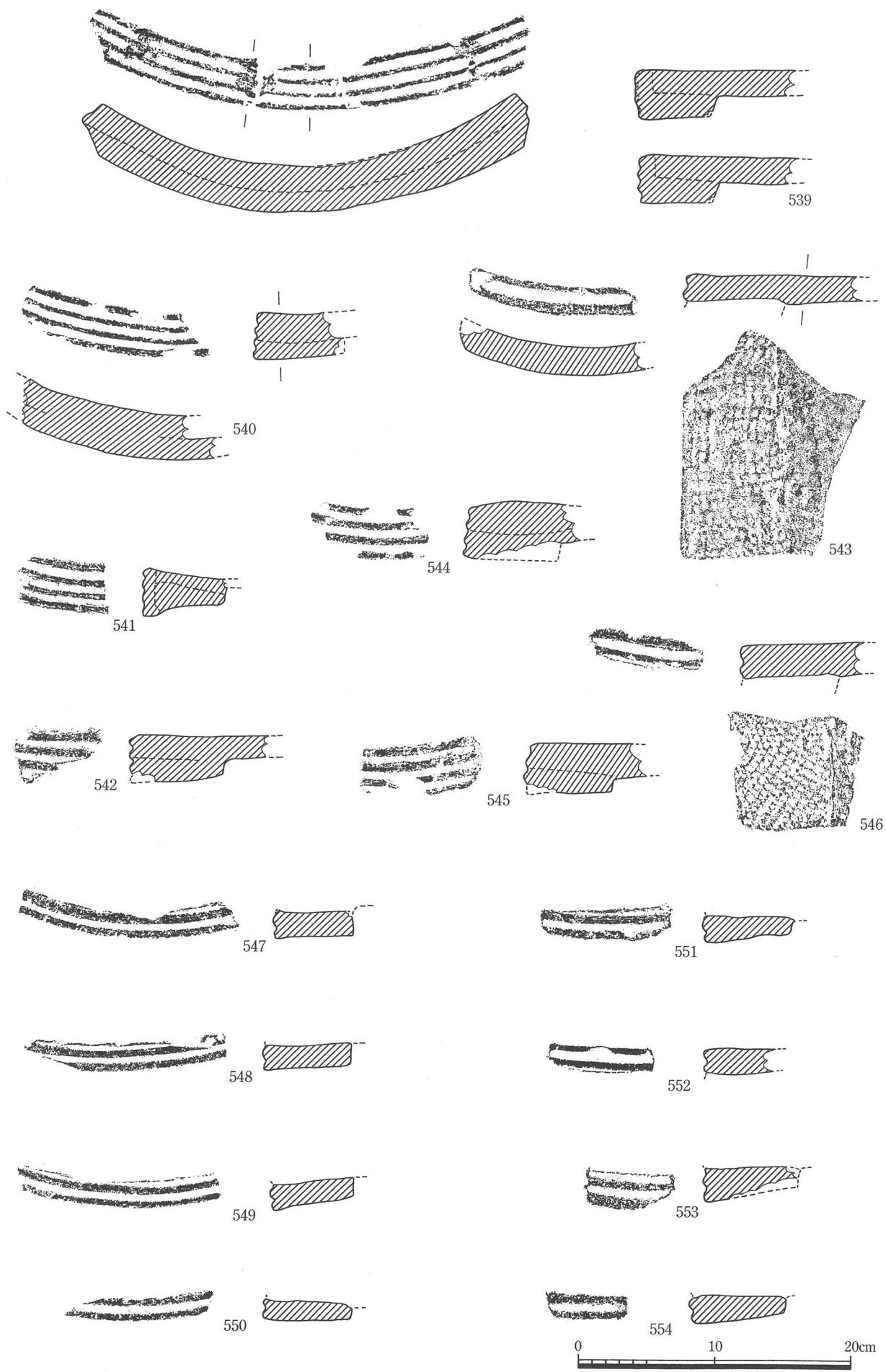
第73図 軒平瓦実測図・3 (Ⅱ B 01型式 a)



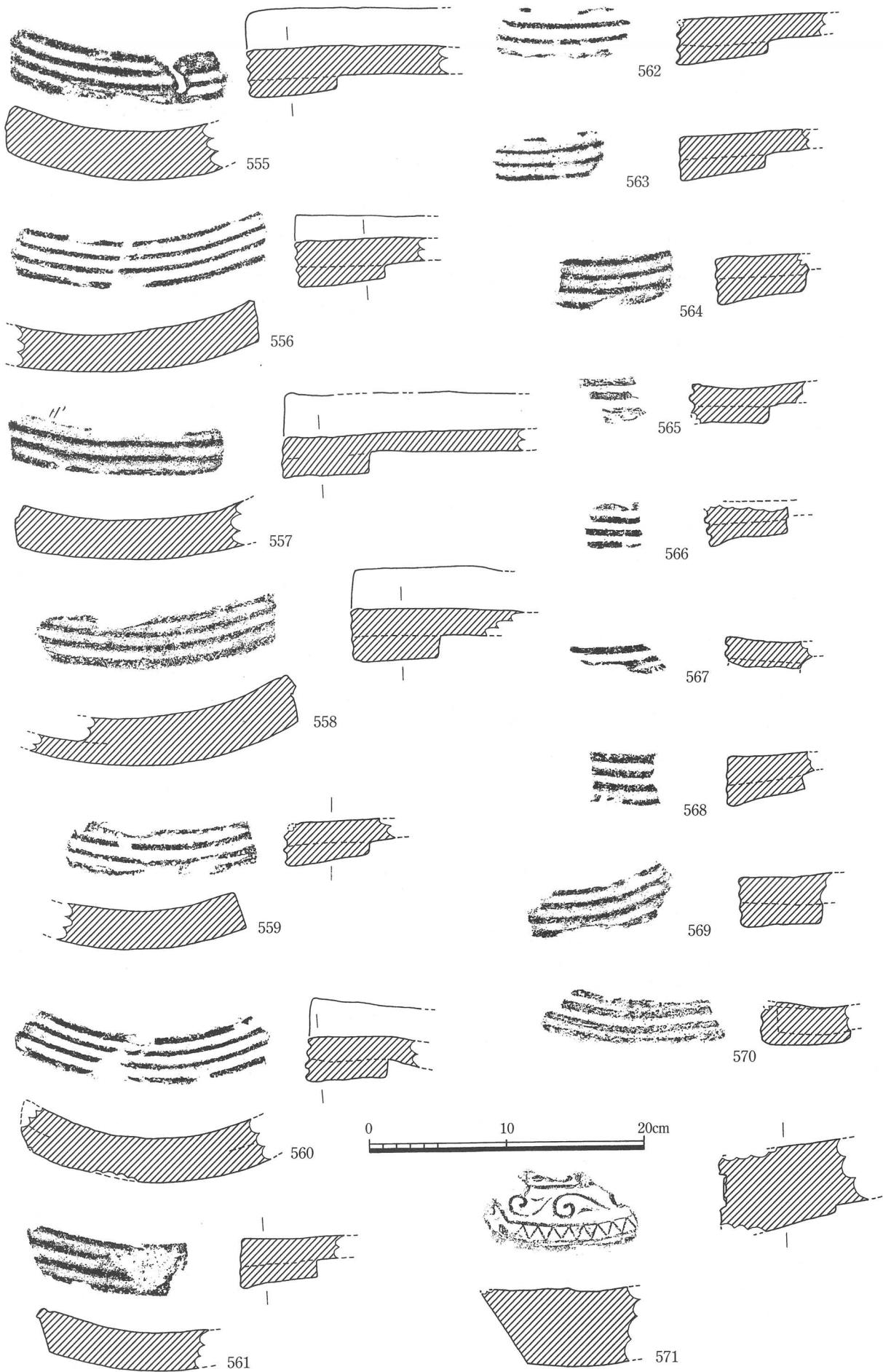
第74図 軒平瓦実測図・4 (Ⅱ B01型式 a・b)



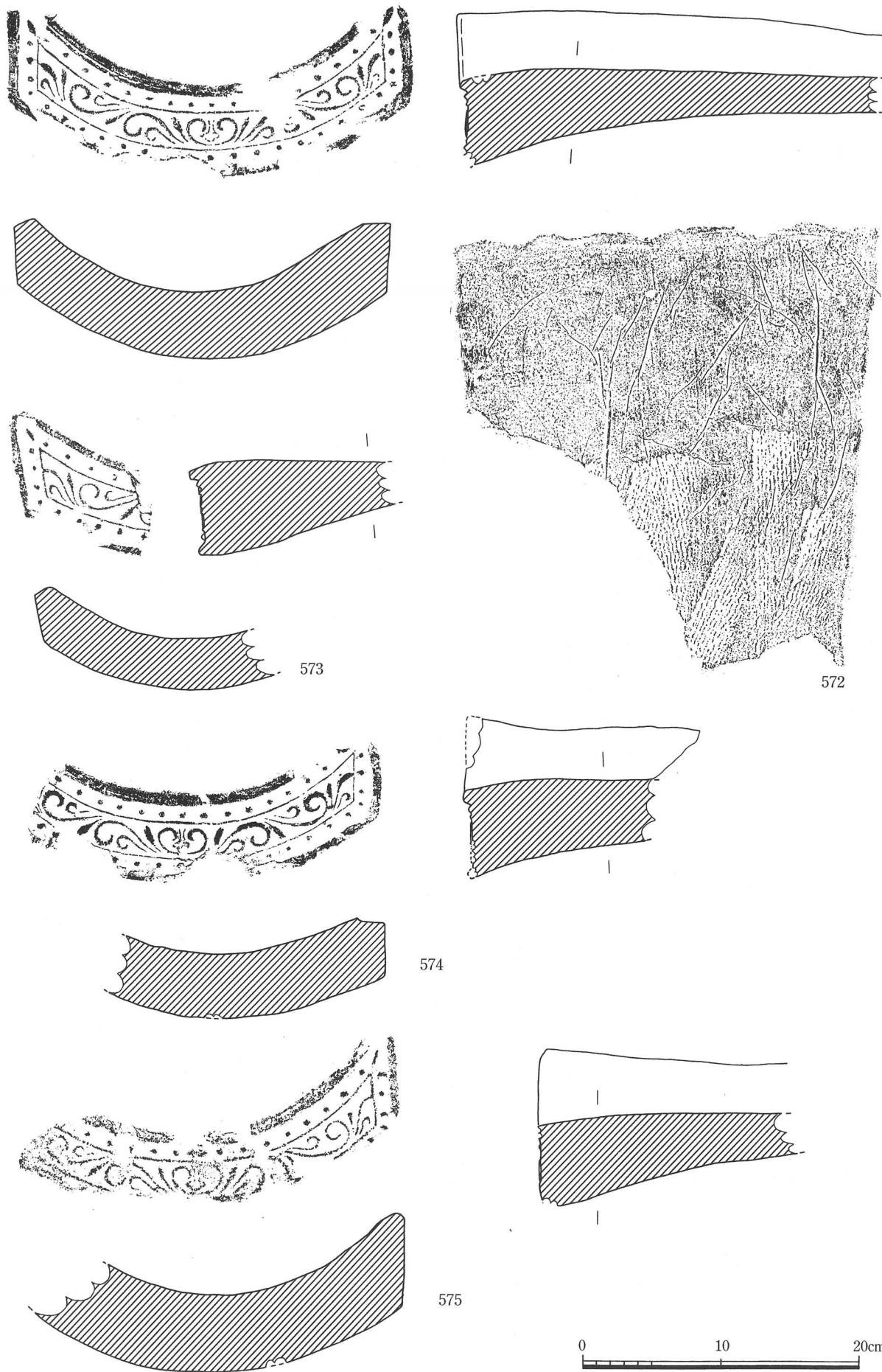
第75図 軒平瓦実測図・5 (Ⅱ B 01型式 b)



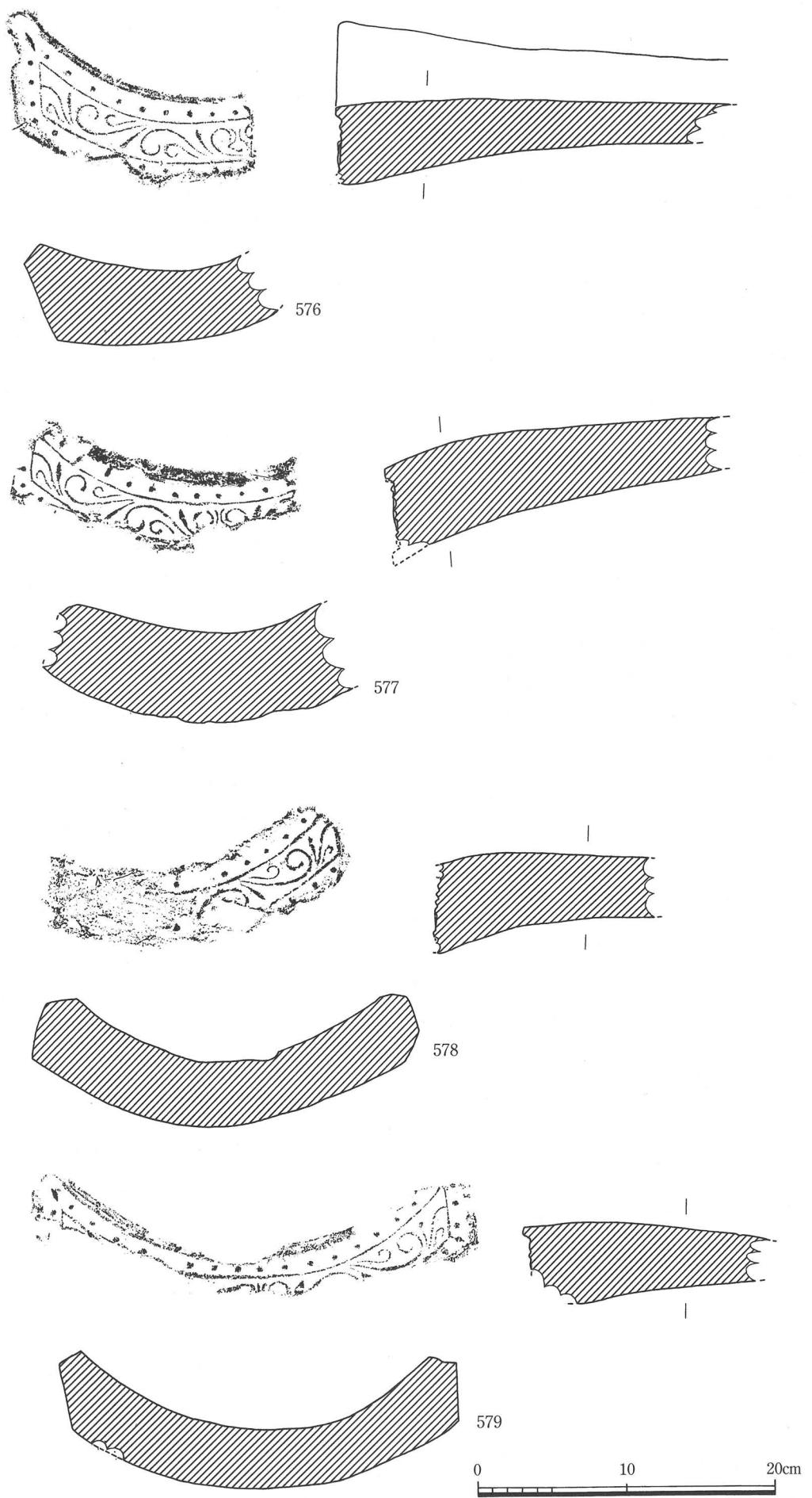
第76図 軒平瓦実測図・6 (II B 02型式 a・b)



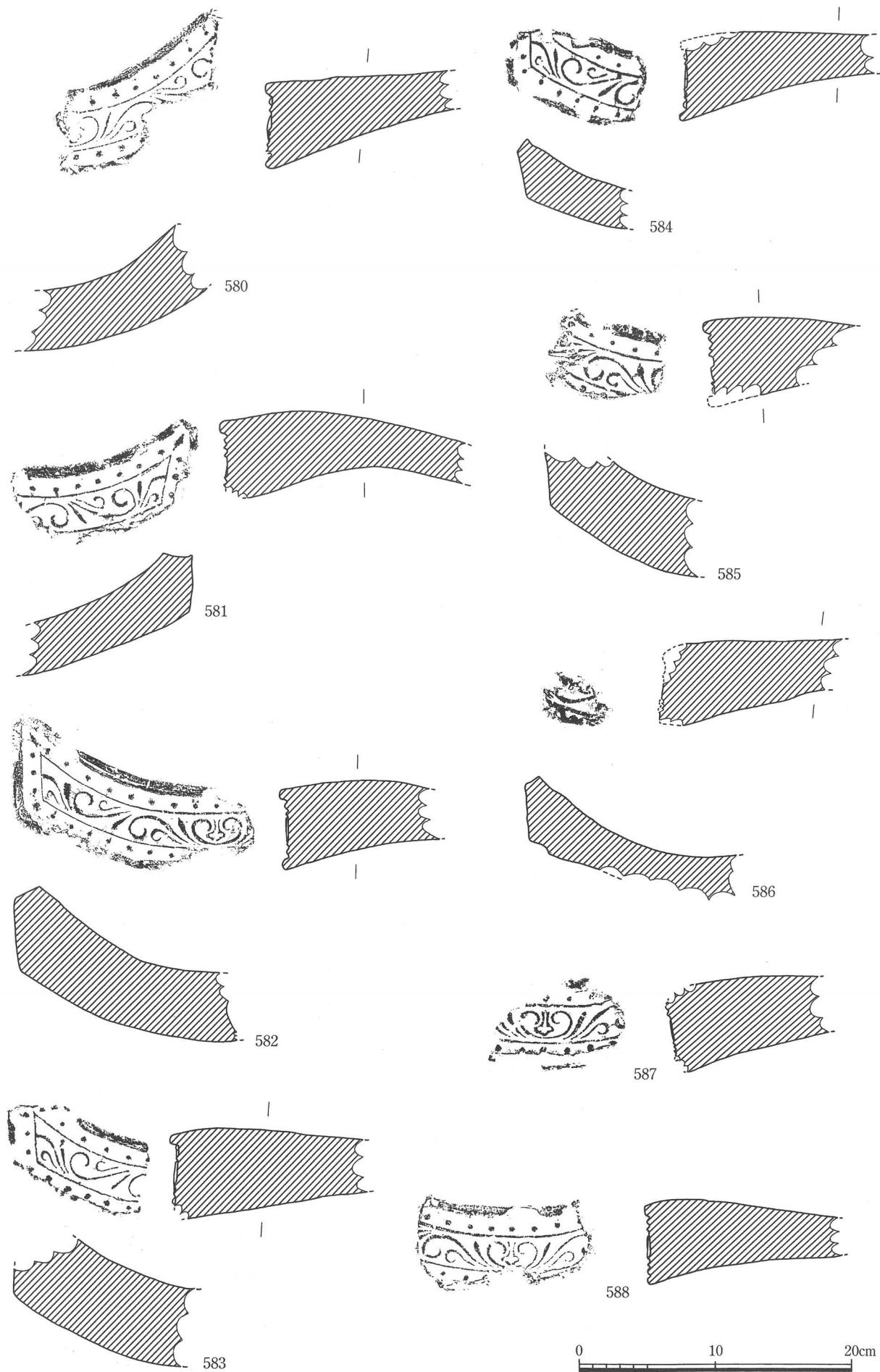
第77図 軒平瓦実測図・7 (IB 05型式・IVB 06型式)



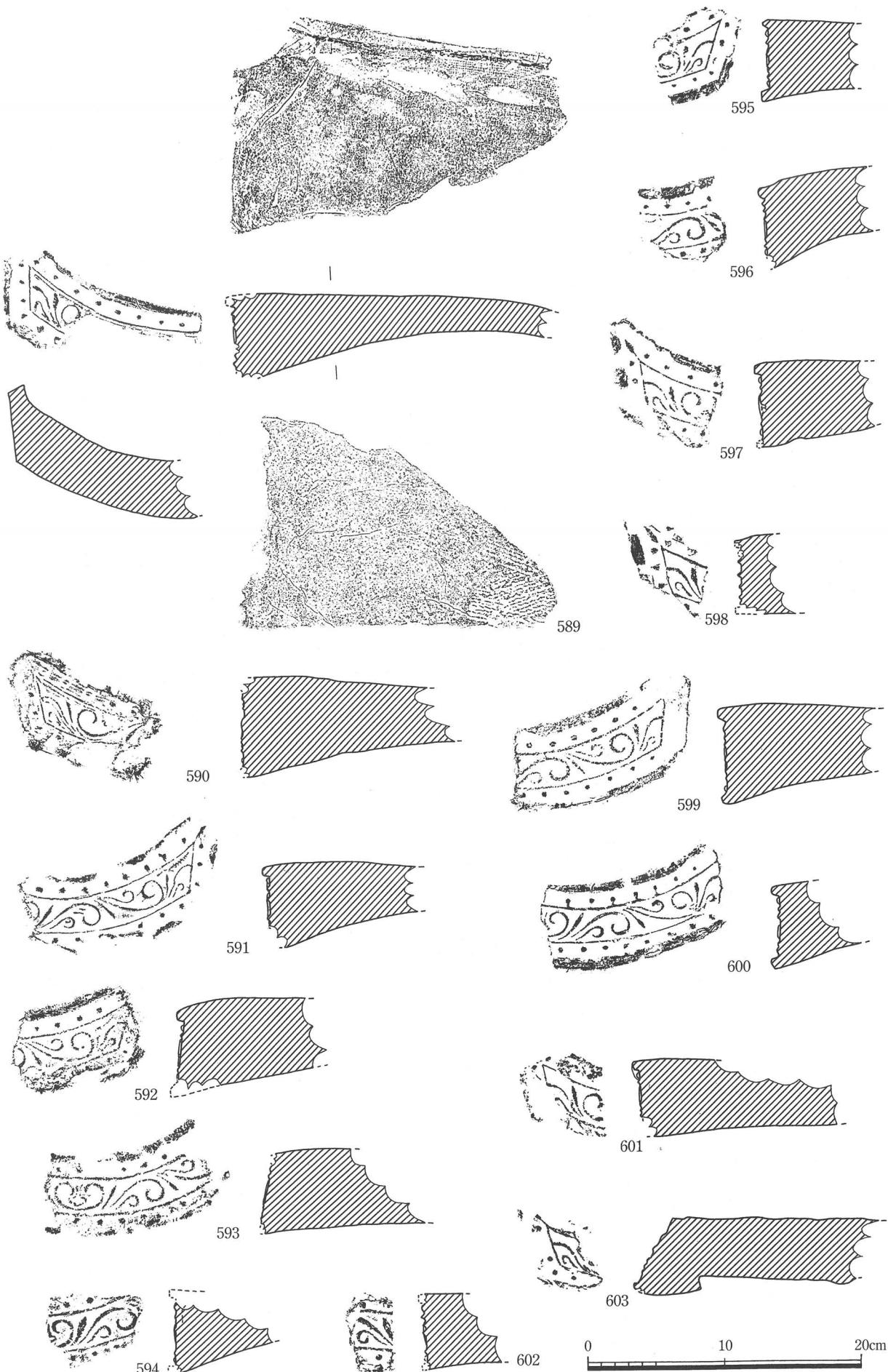
第78図 軒平瓦実測図・8 (IV B 03型式)



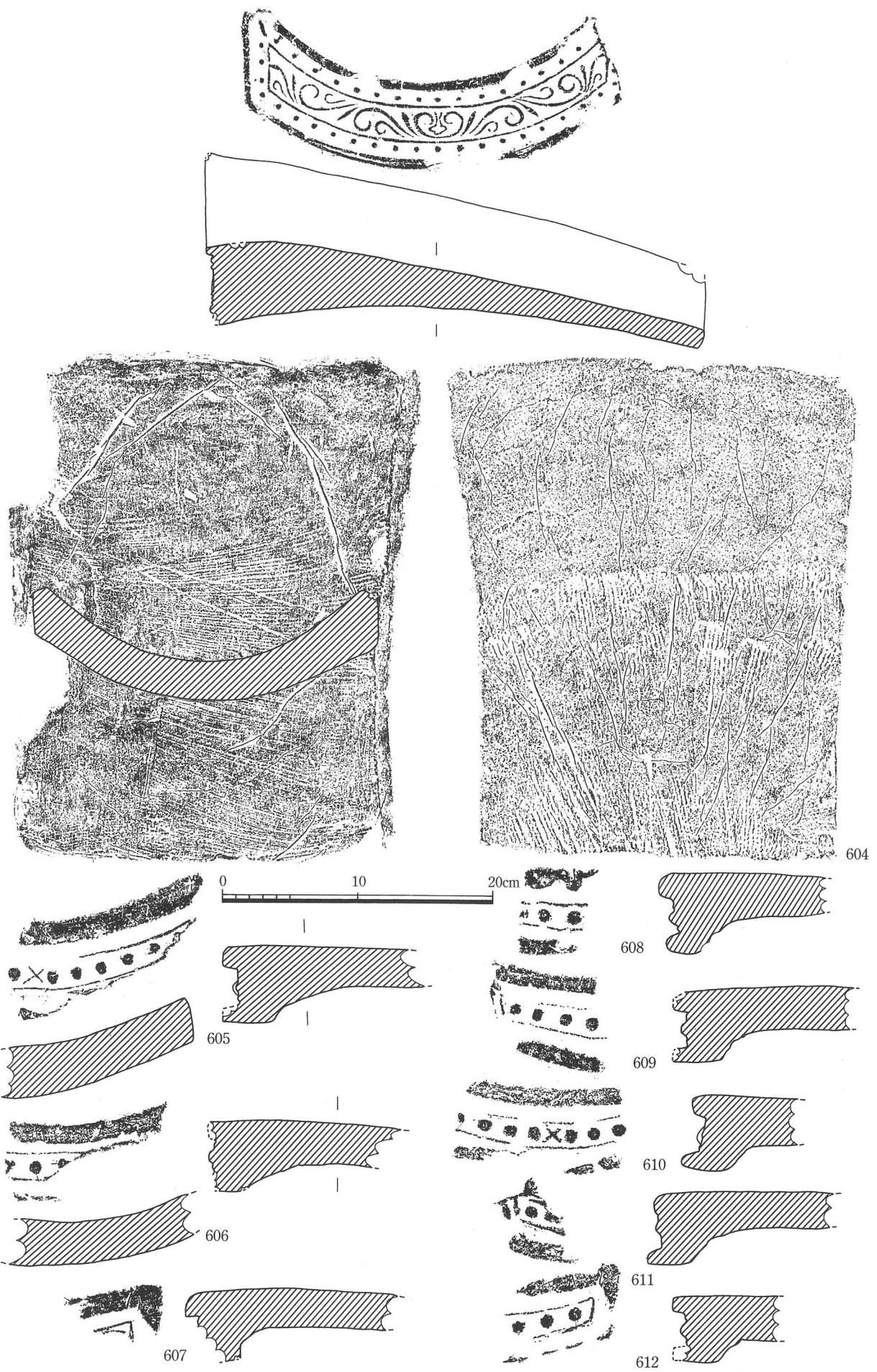
第79図 軒平瓦実測図・9 (IV B 03型式)



第80図 軒平瓦実測図・10 (NB03型式)



第81図 軒平瓦実測図・11 (IV B 03型式)



第82図 軒平瓦実測図・12 (IV B 03型式・中世)

関係が想定できる。(616) は、粘土板を巻き付けた合わせ目部分で剥離している。

2類 型木から丸瓦を切断する時に、凹面側から切り込みをいれるもの。

2類も1類と同様に色調・胎土・焼成からさらに2種に分類できる。

2類-a (618、679~682) 色調は灰白系で、胎土は長石・石英を含み、焼成は堅緻である。

凸面に幅0.2~0.4cmの格子タタキもしくは平行タタキが観察されるものときれいに指ナデを施してタタキ板の痕跡を消している資料がある。広端部にも同様のタタキが観察されるものもある。色調・胎土からII A 09型式(川原寺系)との類似性が看取できる。

2類-b (622~624、677、678) 色調が黒褐色系で、胎土は長石・石英を含み、焼成はやや軟質である。本分類の瓦群は、粘土紐巻き上げによって成形されている。色調・胎土からは、II A 07型式との類似性が看取できる。(619) は瓦当部が剥がれた軒丸瓦である。固定するための釘穴が確認された。(622、623) は、釘穴が確認された。(624) は断面の厚みが約0.8cmと薄い丸瓦である。

1類と2類の丸瓦については、型木から切断する時の技法に差異にあることが特徴である。これを時期差か、工人差かについて考えてみたい。

1類と2類の丸瓦については、同一の窯(ヲガンジ池瓦窯)で製作された可能性が高く、時代によって若干の差異はあるが、色調・胎土のみで軒丸瓦とのセット関係を求めるのは、困難である。しかし大阪大学保管資料(3)の凸面に観察される平行タタキについては1類-bで観察された平行タタキと同様であり、色調・胎土も酷似する。また、I A 02型式については、瓦当部から丸瓦部まで残っている資料が3点出土しており、型木から切断するときは凸面側から切り込みを入れていることが確認された。上記の2点から考えると1類の丸瓦群は、飛鳥時代の可能性が高いと思われる。II A 09型式については、丸瓦との接続部分での剥離が多く、側面の調整が確認できる資料がなかったが、2類-aについては、明らかにII A 09型式と色調・胎土・焼成が類似している。以上から2種に分類した丸瓦は時期差を示していると考えられ、1類の丸瓦が飛鳥時代に、2類の丸瓦が白鳳時代に属する可能性が高い。

有段式丸瓦(第84図・図版57)(626~629)

確認された丸瓦は、粘土板巻き付けによって成形される。横方向に割れて出土しているものが多く、粘土紐巻き上げの可能性も推測されるが、筒部が残る資料を観察する限りでは、粘土板巻き付けの可能性の方が高い。段部については、粘土紐巻き上げで成形されている。円柱形の型木を使用し、まず円筒部を成形する。円筒部を成形する段階で型木より上に出た粘土を折り曲げ、その上に段部を接合する。丸瓦の側面が観察される資料が少ないが、(概要Ⅱ:第38図957)の側面を観察すると丸瓦を半截する時には凸面側から切り込みを入れ切断し、側面調整を施している。段部凹面は横方向(右回り)にヘラナデ、ヘラケズリ、ナデが施される。(626) は段部が取り付く凹面側が、やや緩やかな角度をもっているため、先端がやや丸みをもった型木を使用したと思われる。色調は灰白色で、胎土は長石を含み、焼成は堅緻なものと色調は淡褐色で胎土は長石・